令和 7 年度

専門職業人材の最新技能アップデートのための

専修学校リカレント教育推進事業

これからの高齢社会に対応できる人材育成に必要な介護・医療分野の現場で利活用できる最新技能アップデートのための実践プログラム開発事業及びその有効性を確認する実証研究事業

成果報告書

令和 8 年 3 月

学校法人敬心学園　職業教育研究開発センター

本教育プログラムは、文部科学省の教育政策推進事業
委託費による委託事業として、≪学校法人敬心学園　職業教育研究開発センター≫が実施した令和 7 年度「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育推進事業」の成果をとりまとめたものです。

成果報告書の発刊にあたって

「専門職業人材の最新技術アップデートのための専修学校リカレント・リスキリング教育推進事業」にご協力いただいた関係者を始め、皆様に心より感謝申し上げます。

本事業は、医療・介護分野のフロンティアに取り組む専門学校・企業・公的機関などが連携し、スキル・知識のアップデートのための実践プログラムの開発、及びそのプログラムに基づく講座等が安定的・持続的に確保できる体制を構築することを目的としています。

2026 年 1 月 26 日 27 日タイのバンコクでは、プリンス・マヒドン・アワード会議という世界で 2 番目に参加者が多い国際会議が開催されました。そこで、論議されたのはケア経済という課題でした。1980 年代にはまだ人口高齢化は先進国の課題でしかなく、発展途上国の課題とはあまり認識されていませんでした。しかし、いまや世界各国が人口高齢化の課題に直面しています。人口高齢化が進めば、その事態に対応するためのケア経済の確立が急務となります。日本は高齢化先進国として、ケア専門職の創設、高齢者福祉基盤の整備、介護保険制度の確立などに取り組んできましたので、各国からの注目の的になっています。しかし日本が確立したシステムは、予想以上の速さで進む少子高齢化・人口減少に対応しきれずに、持続可能性の根幹が問われる事態に瀕しています。

ケア経済の構築は、それを支えるケア労働の職業としての確立が不可欠です。「ディセントワーク（働きがいのある人間らしい仕事）としてのケア」という思いは、国際労働機関が主張していることですが、ますます、この理想に向けての社会的期待は高まっています。高校新卒者に対するケア人材養成というだけでは、もう専修学校は立ち行かない日本になっています。社会人のリカレント・リスキリング教育と言われる分野を開発しなければ、社会の期待するケア人材の確保ができない社会になっています。

新型コロナの時期に、社会の持続的な活動を支える職業があるということが再確認され、エッセンシャルワーカーという概念で語られることが多くなりました。クリティカルワーカーとも、キーワーカーともいわれます。日常生活の維持に不可欠な職業があるという認識のもとに、ケア人材への関心が高まりました。身の危険をさらしながらも、職務を全うする人々の存在は、あらためて、ケア経済の根幹にかかわる職業に対する関心を高めました。そこで、日本政府は 2025 年度の経済財政運営と改革の基本方針（通称骨太の方針）で、「アドバンストエッセンシャルワーカー」の育成という方針を打ち出しました。

本事業は、本年度で一区切りとなります。しかし、本事業の取り組みの中には、まさに「アドバンストエッセンシャルワーカー」としてのケア専門職の養成の萌芽といえるものがあります。さまざまな

危機的状況の中にあっても、燃え尽きるのではなく、レジリエンス（耐久性）があるケア経済を支え続けることができるケア人材養成の教育訓練には、これまで以上の知識とスキルと規範がもとめられることになるでしょう。AI・ロボット・ICT などの技術についてのリテラシーの向上や、知育偏重ではない非認知スキルの育成などに向けてケア人材の養成課題がますます教育訓練課題として浮き彫りになります。ケア専門職の報酬についても、このような面でのリカレント・リスキリングに即して手当てされることになるでしょう。

こうした転機に、本事業で取り組んだ成果が活かされることを願っております。

学校法人敬心学園
職業教育研究開発センター　センター長
事業代表　小川全夫

令和 7 年度

専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育推進事業

これからの高齢社会に対応できる人材育成に必要な介護・医療分野の現場で利活用できる

最新技能アップデートのための実践プログラム開発事業及びその有効性を確認する実証研究事業

目次

Ⅰ事業概要

1. 事業名 …… 6

2. 事業の趣旨・目的

（1）当該学び直し講座が必要な背景について…… 7

3. 事業計画

（1）具体的な取組の全体像…… 12

（2）本年度の計画…… 15

（3）本年度の取組に関するスケジュール…… 20

4. 事業の実施体制

5. 組織体制

（1）教育機関…… 22

（2）企業・団体…… 22

（3）行政機関・その他…… 23

（4）各機関の役割・協力事項について…… 23

（5）事業を実施する上で設置する会議…… 24

Ⅱ.事業報告

（1）事業報告…… 36

（2）実証報告…… 48

（3）本年度の成果…… 99

（4）研究の考察と社会実装化に向けて…… 101

（5）成果報告会の報告…… 106

Ⅲ. 事業評価

外部評価委員会評価報告まとめ

（1）本委員会の役割…… 112

（2）評価方法について…… 112

（3）運営企画委員会に対する評価…… 112

（4）プログラム開発委員会に対する評価…… 113

（5）実証委員会に対する評価・・・ 113
（6）全体を通じての評価・・ 114
（7）今後の事業への期待・・・ 114

Ⅳ. 事業の振り返り
（1）プログラム開発委員会　　　　竹下　康平(委員長)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 118
（2）実証委員会委員長　　　　　　宮本　隆史(委員長) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 119
（3）新たなるチャレンジへの思い　　小林　英一(事業責任者)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 120

資料（1）専門職業人材最新技能アップデート講座　お知らせ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 122
資料（2）アンケート結果（受講前/受講後/一か月後）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 126

Ⅰ．事業概要

1. 事業名

これからの高齢社会に対応できる人材育成に必要な介護・医療分野の現場で利活用できる最新技能アップデートのための実践プログラム開発事業及びその有効性を確認する実証研究事業

2. 事業の趣旨・目的

2025 年問題では、①医療費や介護費の増大 ②現役世代の社会保険料の負担の増大 ③慢性的な人材不足の 3 つが懸念されている。

企業は、特に③の「慢性的な人材不足」への対策を考える必要があり、この問題を乗り切るためには 3 つの課題について取り組む必要があると考えられる。

1 つ目は、DX 推進である。DX を推進する第一歩としてデジタル化が進み、業務の効率化が可能になることで、作業時間の短縮、ヒューマンエラーや業務の無駄が削減され、業務効率や収益向上につながると言われているが、多くは IT 人材を育成し、安定して利用できるシステムの構築が不十分であり、DX を推進できていない。

2 つ目は、幅広い多様な人材確保の他、イノベーションを生み価値創造につながるという考え方に慣れていない企業が多いのが現状である。

3 つ目は、一人ひとりが、リハ職・介護職の専門職としての幅を広げることにより、マルチタスクをこなせる人材を育成し、生産性の向上ができるようになることである。

以上の 3 つの課題を解決するために、医療・介護分野に焦点を当て、最新のことに取り組む企業・専門学校・公的機関などが連携し、スキル・知識のアップデートのための実践プログラムの開発と有効性を確認し、講座等が安定的・持続的に確保できる体制を構築することを目的とする。

【講座に関する基本情報】

基本情報	内容・目標等
対象とする職業・分野	介護職（教育・社会福祉分野） リハビリ職（医療分野）
学習ターゲット、目指すべき人材像	現場で活躍する有資格者。 自分のチャレンジしたいことを介護や医療と結びつけることにより更なる視野を広げ専門職としてレベルアップした人材
対象者のレベル（当該プログラムの内容に関する基礎知識の有無）	基本的な知識を要することを必須とする
プログラム受講後に想定される受講者のキャリア・受講者が目指す姿	今のキャリアからステップアップできる人材。現在の組織の中で自分が今よりも成長することで、より組織に貢献し、利用者を支援できる姿
開発するプログラムの目標受講者数 （1期間あたり）	450 人
開発するプログラムの想定総授業時数 （1期間あたり）	72 時間 最大 12 時間×6 講座(オンデマンド部分は含まない）＝最大 72 時間

開発するプログラムの想定受講期間 （1期間あたり）	1か月(オンデマンド含む) ※講座は 6 つ全てを受講する訳ではなく、6 つのうちから自分が受講したい講座を選択するため基本的に 6 つ受講する受講生は想定していない。
e-ラーニングの実施の有無	(有)・無

（1）当該学び直し講座が必要な背景について

医療・介護におけるリカレント教育の現状

医療(リハビリ)における資格は、国家資格を一度取得したらその後は個々によって学びの継続をすることが任されているが、実際は個々で学ぶことが出来ておらず、最新の知識にアップデートされていないことが多い。

また、介護分野においては、介護現場で働くためのルートはいくつかあるが、卒業や終了後のフォローアップや新しい知識・技術のアップデートできる環境はまだ整備されておらず、目に見えてスキルアップする職員は非常に少ない。その上、職員一人ひとりが持つ能力や経験もさまざまであり、事業所（マネジメントする側）も施設によってマネジメントに関する理解や学びが浅いため、十分なマネジメントができていない。したがって、人材を育成することもできていない。マネジメントする側はマネジメントする力をつけるためのリカレント教育を行うことで、バランスがとれかつ安定した組織統制が図れる。そのことで一般職の方には状況に応じた学びを提供することができる。だが、このようなプログラムは、現行見えてきていない。

上記のことから、施設を管理する側のマネジメントの学び直しをするためのリカレント教育が重要であり、ダイバーシティにも対応するマネジメントへアップデートすることで、職員一人ひとりにあったリカレント教育も提供ができると考えられる。

浮き彫りとなった課題

当実証研究に必要な背景には大きく分けて 4 つの課題がある。

①介護人材不足による介護業務の増大

②ICT/DX 推進の遅れによる業務改善の停滞

③次世代の介護のニーズに合わせた人材不足

④現場で利活用できるアフターフォローの体制

以下、これらの課題に至った背景および解決策について記載する。

①介護人材不足による介護業務の増大

厚生労働省は、令和 3 年 7 月 9 日に第 8 期介護保険事業計画の介護サービス見込み量等に基づき、都道府県が推計した介護職員の必要数を公表した。これによれば、2025 年度には約 243 万人（＋約 32 万人（5.3 万人/年）の介護職員を確保する必要があると推計されている。(図 1 参照)また政府は、介護施設の人員配置基準を「入居者 3 人には職員 1 人」と人員配置の基準を緩和する検討をしているが、介護事業者から介護の質の介護事業者から介護の質の低下や職員の負担増への懸念が広がっている。

加えて、 令和 4 年度の公益財団法人介護労働安定センターが公表した介護労働実態調査によると、介護

の労働者における高齢化は年々進んでおり、全体の介護事業所で労働する 65 歳以上は 7 割、外国人労働者の受け入れは全体の 2.6%と受け入れ率が低い結果となっている。

以上の結果より、人材を確保するためには、生産人口の増加が必要であり多様な人材が重要になってくる。しかし、雇手は人材を確保することだけを考え、介護職員の業務が増大しているにもかかわらず処遇を改善する動きが全くないことも理由の一つとして挙げられる。

これらを解決するためには、処遇の改善や新しい人材育成の取り組みが必要である。さらに、介護の魅力を伝えることで生産人口の増加が必要だと考えられる。

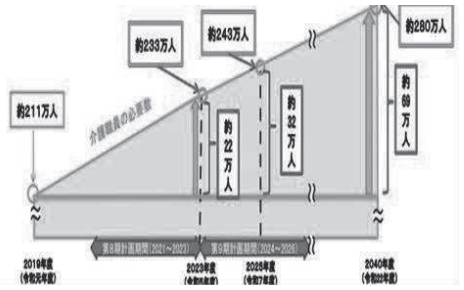


図1) 厚生労働省 8 期介護保険事業計画に基づく介護職員の必要数についてより引用

②ICT/DX 推進の遅れによる業務改善の停滞

労働環境の改善が必要とされる一方で、ICT を導入するコスト面にも問題があるが、介護職の ICT のスキルの低さが問題となっている。

2021 年 2 月に 1240 の事業所を対象とし、労働局が実施した ICT 調査では、(図 2 参照)感染拡大している地域が 42.6%。感染が少ない地域では、53.3%と ICT 導入がされていない事業所が多い結果となっており、なかなか ICT 導入が浸透されていない現状がある。浸透されない要因としては 3 つあり、1 つ目、介護職が、専門知識以外のスキルを勉強(研修)する機会が少ない。2 つ目として挙げられるのは、管理職・介護職の年齢による ICT への関心・理解がないことである。3 つ目として事業者側は、介護の専門職として採用するため、ICT スキルで採用はしないことであり、業務以外の新しいことが、さらに負担と感じる人が多いことも現状である。

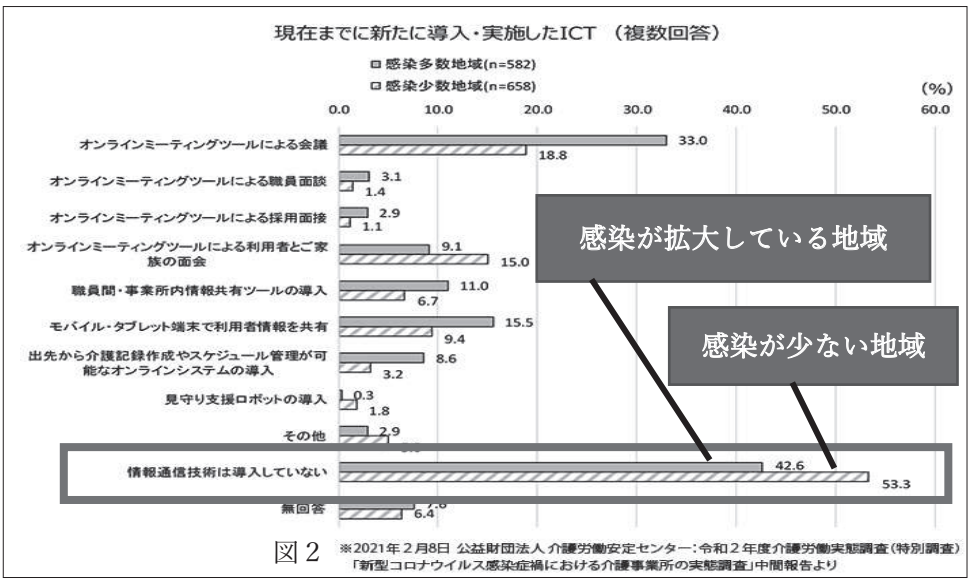


図 2 ※2021年２月8日 公益財団法人 介護労働安定センター：令和２年度介護労働実態調査（特別調査）「新型コロナウイルス感染症禍における介護事業所の実態調査」中間報告より

また、同調査で、新型コロナウイルス感染症禍での事業所運営において今後重要と思われるものを事業所全体でみると、（図 3 参照）「感染予防資材の備蓄・管理」が 84.5%、「職員の体温・体調管理」が 82.6%と高かったが、ICT の必要性については、オンラインでの会議や家族との面会での重要性が高いという結果になっており、ICT についてはこの部分は必要と感じている事業所が多いが、ICT 機器を活用した他の業務に関しては、「ICT による介護実施記録の作成が全体で 36.3%、「ICT によるケアの時間の削減」24.9％、そして「ICT による人で不足の解消」が 22.9%と ICT 導入への抵抗がつよいのか低い結果となっている。

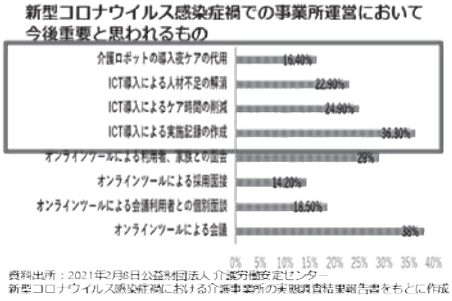


図 3

さらに、「介護ロボットの導入によるケアの代用」については、非常に活用意識が低く、16.4%という結果となっている。以上の調査の結果から、管理職・介護職への ICT への理解が低く、導入の必要性については、必要であると思いながらも、活用方法などの習得に不安を抱き、なかなか ICT 導入が浸透されていない現状となっていることがわかる。また、現場では、記録、行事の準備、入浴・食事等の介助の準備、各委員会での書類作成など、直接利用者とかかわる時間以上に他の業務量が多いが、1 日平均してどれくらいの専門外の業務をしているかの可視化がされていない。しかし、世間では ICT/DX 推進を進めている中で、実際のところ事業所は、業務改善点の具体案がされておらず、ICT/DX を導入した結果、活用のミスマッチが起こり、なかなか活用できない状況にある。これらを解決するためには、ICT/DX 活用と同時に活用のミスマッチを起こさずに ICT が導入できる知識や活用方法を学ぶ人材を施設ごとに増やすことで活用のミスマッチを起こさずに業務を改善できるのではないかと考える。そのためにも、即現場で活躍できる
ICT/DX が活用できる人材育成を行う必要があり、これは勤続年数に限らず施設全体で取り組む必要があると考えられる。

同様に、医療の業界でも今回のコロナ禍で、"ヘルスケアのデジタル化"の遅れと、その必要性があらためて浮き彫りとなっており、厚生労働省は、大規模な健康・医療・介護の分野を有機的に連結したICTインフラを本格稼働させるべく、厚生労働省内に「データヘルス改革推進本部」を設置し、データ利活用の前提となるデジタル基盤整備およびサービス創出の重要度が高まっている。

③次世代の介護のニーズに合わせた人材不足

2025 年団塊の世代といわれる人たちが、80 歳を迎え介護が必要になるとき今後この世代に対する支援提供の考え方が異なってくると考えられる。

今後の活力ある超高齢社会の実現にあたっては、知恵やノウハウを豊富に有する「アクティブシニア」が多く存在するようになることを念頭におき、多くの高齢者が可能な限り長く自立して暮らし、年齢を問わず、その知恵や経験を活かして積極的に社会参加できるよう、「健康寿命の延伸」を図ることが重要になってくるため多様なニーズが求められると考えられる。だからこそ、今までのサービスの内容では満足しない利用者も増えてくると考えられる。団塊の世代の介護が必要になるのはあと 10 年後とすると、10 年先に対応できるサービスを構築していく必要があり、受け身的なサービスではなく、ニーズの先読みと積極的なサービスの展開が求められてくる。しかし、現状は介護職のキャリアアップのための研修内容が、集団研修ばかりでこれからのニーズに沿った研修や個々のスキルに合わせた研修が少ない。これは、施設側の研修に関する情報や知識の不足、つまり管理者としての人材育成マネジメント力が足りていないことが原因ではないかと考えら

れる。また、人材不足などにより研修を受講したくても受講できない状況もある。職員の個々のスキルと次世代のニーズに沿った研修を企画・実施することで、利用者に対して満足のいくサービスが提供できるようになり、職員の仕事に対する姿勢も向上し、本来の専門職としてのやりがいや自信につながり離職防止なると考えられる。また、良い人材の育成やキャリアアップができる環境になれば生産性の向上も期待される。
以上のことより当センターでは、マネジメントの立場にある施設長や管理職層が有効な事業運営体制の構築し、次世代の介護ニーズをキャッチアップし、そこに対する情報の提供からスキルを身につけるための学びが提供できるようになることが介護施設経営における課題解決を図る重要な取り組みなのではないかと考えられる。

④現場で学びを利活用できるようにするためのアフターフォロー体制

神奈川県教育福祉振興会　令和 4 年セミナーアンケート：今後参加したいセミナー53 項目を当センターが 8 つにカテゴリー化し分類した結果、（図 4 参照）1 位は介護基本的知識 51%、2 位は運営・管理関連 12%、3 位は職員メンタル・思考・趣味 10%。半数以上が、既存の介護分野の知識であることが分かった。
また、多くの知識や技術を身に付ける研修を受けても、学びが一方通行であり、現場で利活用できるフォローアップ体制が整っていないのが現状である。そのため、学びに対する意欲の低下が生まれ、新しいものへ挑戦する意欲も低下してしまう結果になってしまう。

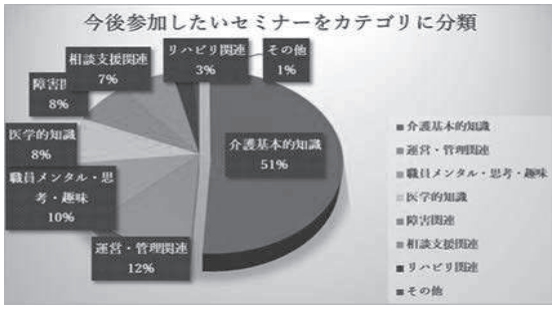


図 4
出典　神奈川県教育福祉振興会　令和4年セミナーアンケートを元に
職業教育研究開発センター：今後参加したいセミナーカテゴリ分類2023.6.16

レバレジーズメディカルケア株式会社「きらケア介護白書 2022・介護職員調査（表 1 参照） 4-6 仕事に求めるもの・価値観」では 1 位）人間関係を大切に働けること 41.5%、2 位）生活に必要な収入が得られること 37.8%、3 位）プライベートを大切にできること 36.8%、4 位）仕事が楽しくできること 32.9%、5 位）自分らしい生活が送れること 31.7%となっている。4 位の仕事が楽しくできることに着目すると例えば、介護職員の持っている知識及び技術を新しいものにするためのアップデートする環境を整える必要があり、更に既存の資格にプラスαの別の領域の知識と技術を持つことにより、多様化した利用者のニーズや「心身の状況に応じた介護」に役立つのではないか、またそれを職員自身が選択できる研修プログラムがあれば、「仕事が楽しい」「自分らしい生活」が送れるのではないだろうか。

表 1　レバレジーズメディカルケア株式会社　きらケア介護白書2022より5項目を5回に分けアンケート調査し集計したもの

仕事に求めるもの・価値観		
1位	人間関係を大切に働けること	41.5%
2位	生活に必要な収入が得られること	37.8%
3位	プライベートを大切にできること	36.8%
4位	楽しく仕事ができること	32.9%
5位	自分らしい生活が送れること	31.7%

例えば、アロマを取り入れた介護や身近なお出かけ支援などで、専門的知識の習得により現在の介護分野の幅が広がっていくことに気付き、そこから新しい学びや学び直そうとすることが生涯学習につながると考えるが、雇用する側の理解や介護職員の役職側のマネジメント力も必要となる。介護職員でいえば、経験年数や仕事の力量で役職になることが多いため、マネジメントをしっかり学んできたわけではないなどの課題がある。
以上の①～④の 4 つの課題について、当センターでは、課題の解決策として（表 2 参照）介護職や医療職（リハビリ）の人材スキル・知識を最新のものにアップデートできるリカレント教育のプログラム（基礎・基本）を開

発し、受講後のフォローアップをする体制、そして、これらの研修を行える人材教育アシスタントティーチャーの研修も同時に行うことで、講座等が安定的・持続的に確保できるプログラムを目指したいと考えている。そして、基礎・基本に留まらず、事業終了後もニーズがあれば、応用プログラムの開発にも着手し、さらなる展開をしていくことで、この研究が一過性のものにならぬよう継続的な取り組みとしていきたい。

表２【当センターが４つの課題に対し打ち出した解決策】

課題	解決策
①介護人材不足による介護業務の増大	介護の魅力を伝えることで、生産人口の増加が見込まれる可能性があると考えられるため、力が発揮できるための改善や新しい人材育成に取り組む。
②ICT/DX 推進の遅れによる業務改善の停滞	勤続年数に制限を設けず施設全体で ICT/DX 種類・活用方法を学ぶことで、業務にあった ICT/DX 導入のミスマッチを起こさずに業務改善方法の研修が必要である。同時に、ICT/DX の活用方法がいつでも相談できるサポート体制を構築することで導入の促進を促す。
③次世代の介護のニーズに合わせた人材不足	更に既存の資格にプラスαの別の領域の知識と技術を持つことにより、多様化した利用者のニーズや「心身の状況に応じた介護」に役立つ職員自身が選択できる研修プログラムを開発することで「仕事が楽しい」「自分らしい生活」継続的にアップデートできるリカレント教育の構築実践し対応できる人材を育成する。 そのために、マネジメントの立場にある施設長や管理者層が有効な事業運営を身に付けるための学びの提供をする。
④現場で学びを利活用できるようにするためのアフターフォロー体制	研修内容について、現場での有用性の確認や現場で利活用できるアフターフォローの場を提供することで、研修を受けた人たちがどのように利活用したかの事例を共有する場や、研修講師に相談・質疑応答ができる場を提供する。

3. 事業計画

（1）具体的な取組の全体像

令和５年度

① アップデートプログラム開発のための実態調査を行う。
６つの既存のプログラムを活用し、これから介護職となる人材と介護職員向けに活用できるプログラムであるかを調査する。

②既存のプログラムの実証実施

●対象者
介護施設の職員および介護福祉士養成校の学生、卒業生

●実証調査（10 月～12 月に実証を予定）
対象となる人数
・介護・医療施設　　30 施設 240 人程度
・介護福祉士養成校 5 校　　150 人程度
・エリア別(1 か所 20 名) 3 か所 60 人程度

●調査方法

次年度のプログラム開発をするため、既存のプログラムが介護職にとって有効的かつアップデートしやすい講座か否かに関するデータを収集する。

調査方法は、鋼材の内容・受講形態即現場で実践できるか、について、アンケート・インタビューを行い、プログラムの有効性を検証する。

●調査結果まとめおよびデータ分析

（1 月～2 月に実施予定）

実証調査においてプログラムが有用性のあるかどうかについて分析を行う。また、実証とともに受講形態の意識調査も行いその結果をまとめる。

③成果報告会の実施（2 月に開催予定）

全国の介護、医療施設、専門学校を招いた成果報告会の実施。

令和６年度

①アップデートプログラムの開発

（6 月～9 月に実証を予定）

1 年目の実証の結果を踏まえ、より現場に活用しやすい教育内容を抽出し、ブラッシュアップを行う。また、受講しやすい受講形態なども考慮した、教育プログラムおよび受講テキストの一部改訂を行う。

②開発したアップデートプログラムの実証実施

（9 月～12 月に実証を予定）

●対象者

介護施設の職員および介護福祉士養成校の学生、卒業生

●実証調査　対象となる人数

・介護・医療施設　　30 施設 200 人程度

・介護福祉士養成校　　5 校 150 人程度

・エリア別(1 か所 20 名) 5 か所 100 人程度

●調査方法

次年度のプログラムのブラッシュアップをするために必要なデータを収集する。開発したプログラムについて、即現場で実践できるかのアンケート・インタビューを行いプログラムの有効性を検証する。

●調査結果まとめおよびデータ分析

（1 月～2 月に実施予定）

実証調査においてプログラムが有用性のあるかどうかについて分析を行う。また、実証とともに受講形態の意識調査も行い、その結果をまとめ、次年度のブラッシュアップ検証を行う。

③成果報告会の実施

（2 月に開催予定）

全国の介護、医療施設、専門学校、企業を招いた成果報告会の実施。3 月に専門学校を卒業し、就職しプログラムを受講した施設職員を調査する。

令和７年度

①アップデートプログラムの完成

（6 月～8 月を予定　2 年目の調査結果で抽出された課題をもとに内容のブラッシュアップ、教育プログラムおよび受講テキストの一部改訂を行う。また、施設リーダー職、専門学校の教員を対象に、モジュール型のアシスタントティーチャー養成講座マニュアルを作成する。

※提供するプログラムに関しては、最終的に4つのステップに沿って提供することを想定している。

②プログラムの実証およびアシスタントティーチャー養成講座を開催

（9 月～1 月に実証を予定）

令和 5 年・6 年度の実証の施設のみならず実装化を見据えて、プログラムの有効性を訴求し、公募し実証を行う。する。アシスタントティーチャーのトライアル講座を開催し、資格制度として制度を作り講座実施後に認定をする。

③調査のまとめ、社会実装化の検討

（1 月～2 月に実施予定）

次年度に向け、更なる研究の継続やまたは施設や企業とのパートナーシップを図り、事業終了後にどう社会実証化していくのかについて仕組みを検討する。

④最終報告会の実施

（2 月に開催予定）

全国の介護、医療施設、専門学校、企業を招いた成果報告会の実施。実装化に向け参加した方へ実装意向調査を行う。

（2）本年度の計画

【令和 7 年度の活動】

・昨年度、実証調査で得た基礎データを踏まえ、受講しやすい受講形態なども考慮した、教育プログラムおよび受講テキストの一部改訂を行い、そのプログラムの有効性の実証検証を行う。

・また、アシスタントティーチャーが提供できる講座をについて、養成講座およびプログラムを開発し、そのプログラムの有効性の実証検証を行う。

アップデートプログラムの開発について（6 月～9 月を予定）

昨年度の課題をもとに、改題解決策を 3 つ設定し、介護職が受講の継続できかつアップデートできるプログラム開発を行う。

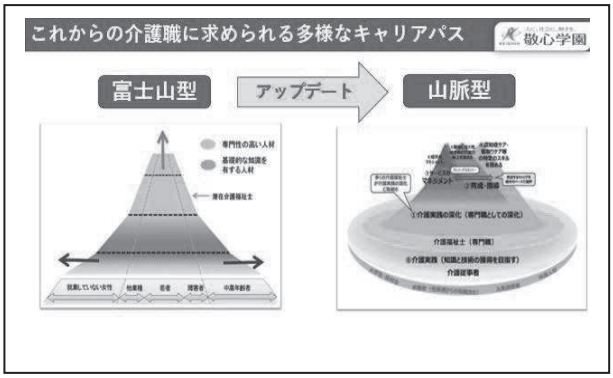
1）講座に合わせた受講レベルの設定。

2）受講しやすい受講形態の設定。

3）現場で実践できる活用方法や講座の意義について習得。

1）講座に合わせた受講レベルの設定

内閣府が提唱している介護プロフェッショナルのキャリア段位とキャリアパスの山脈型を用いた対象コースに分け、受講生のレベルに合わせた講座の提供を行う。

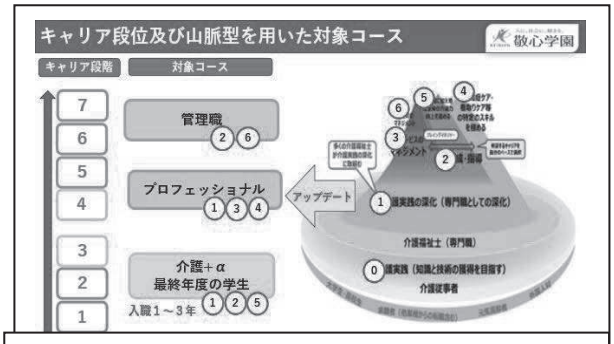


【想定される効果】

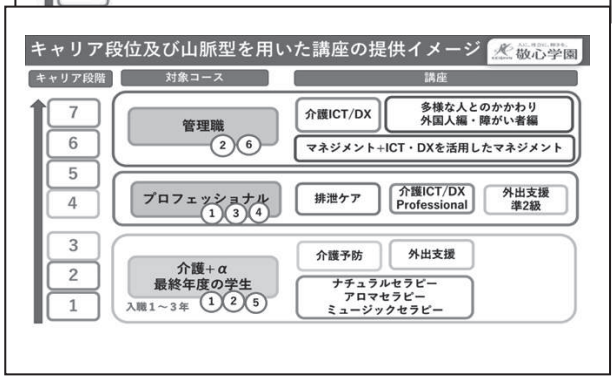
＊実務経験数によるプロフェッショナルの学びがアップデートできる。

＊受講者自身もキャリア段位を基準にすることで、受講のミスマッチを防ぐことができる。

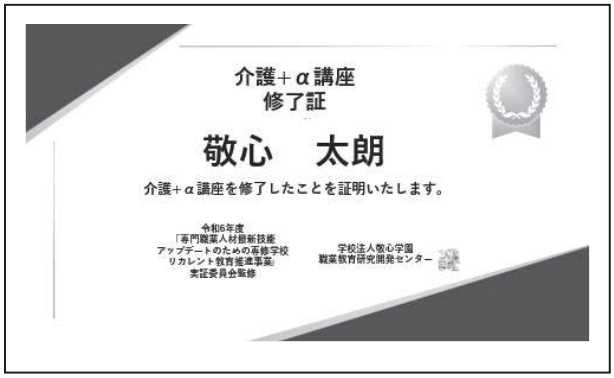
＊キャリアに合わせた講座を受講することで、仕事のスキルやモチベーションの向上に繋がる。



キャリア段位を用いた講座を開発する。



7 段位のレベルを管理者、介護一般職、初任者・実務者研修修了者のキャリアに分け、それぞれのレベルに合わせた講座内容を開発する。また、受講修了後、修了証を発行する。



2）受講しやすい受講形態の設定

昨年の調査の結果、受講生が希望する講座について形態は、全体的にオンデマンド・オンラインと対面が良いという回答が多く。受講しやすい環境という面では、人的にも時間的にも余裕がない介護の現場では、いつでも、自分の空いている時間を使って、出向かなくても学べる環境が受講継続につながるという結果となった。また受講時間や受講回数についても平均して 1～4 時間、1～3 回という短期間で希望するという回答が多かった。しかし、短期間で知識や技術のアップデートでき、現場で実践できるものには限界があるため、このデータをもとに、モジュール式の講座を提供することで、確実に学びの習得につながるのではないかと考えられる。

対象者に合わせた講座の提供方法イメージ（案）

人に、社会に、輝きを。 KEISHIN 敬心学園

NO	対象コース	必須とされる講座	講座提供方法		
			講師	アシスタントティーチャー	動画のみ
1	管理職	介護ICT/DX	●		●
		マネジメント＋ICT・DXを活用したマネジメント	●		
		多様な人とのかかわり（障がい者）			●
		多様な人とのかかわり（外国人）			●
2	プロフェッショナル	排泄ケア	●		
		介護ICT/DX　Professional	●		
		外出支援　トラベルヘルパー準2級	●		
3	介護＋α 最終年度の学生	介護予防		●	
		外出支援	●		
		ナチュラルセラピー　アロマセラピー		●	
		ナチュラルセラピー　ミュージックセラピー			●

3）現場で実践できる活用方法や講座の意義について習得

2021 年介護報酬改定で、【LIFE】科学的介護情報システムへのデータ入力とフィードバック機能の活用による PDCA サイクルの推進・ケアの向上を図ることが求められている加算が新設されている。講座を構築するにあたっては、LIFE との繋がりのある講座を開発する必要がある。

これを踏まえ、講座の意義や活用方法については、現場 Q&A を設け、講師がファシリテーターとなりグループセッションを開催したいと考えている。また、講座の意義、現場での課題解決のヒントを得る場所を提供することで、より現場での実践効果が期待され、受講後のフォローアップができ、LIFE との繋がりのある講座になると考えられる。

■提供方法

講座の提供方法

＊オンデマンド受講後に、対面またはオンラインによる講座を開催、その後、実践交流会現場 Q&A を設け、講師がファシリテーターとなり、受講後のフォローアップ研修を開催する。

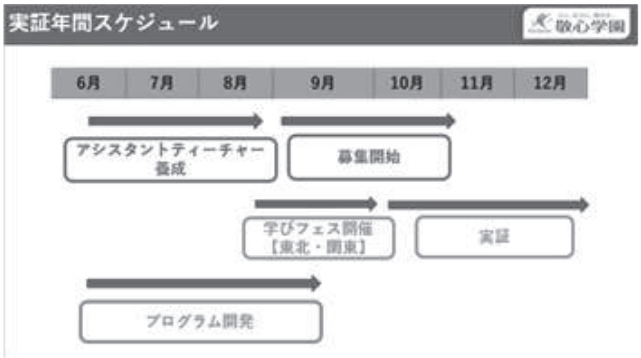
＊3 つの提供先別に分け講座を提供する。

Ⅰ:実証協力先　対象者・・①～③

1 つのプログラムに対して 2 の施設に限定し講座を提供する。

Ⅱ:学びフェスによる学びの体験

8 つの講座および介護に関係する企業を募集し、ミニ体験プログラムの提供を行う。



9月～10月　オンデマンド講座開始
↓
10月～12月対面またはオンラインによる講座開催
↓
11 月～1月オンラインによる実践交流会を実施

参加者に、介護業界を盛り上げるとともに、講座の内容の理解を深めてもらい本講座への申し込みを促す。（東北・関東の 2 か所で開催）

Ⅲ広告での一般募集

首都圏及び地方エリア別に分けオープン募集し講座を提供する。

4）開発したアップデートプログラムの実証調査の実施（9 月～12 月に実証を予定）

■調査名 「開発したアップデートプログラムの有効性を検証する実証調査」

■調査目的

1）開発したプログラムについて、即現場で実践できるか検証する。

2）講座の受講形態について受講しやすい形態か検証をする。

3）提供した受講後のフォローアップ体制の有効性について検証する。

■調査手法

・受講前後のアンケート調査

・受講後直後のインタビュー調査

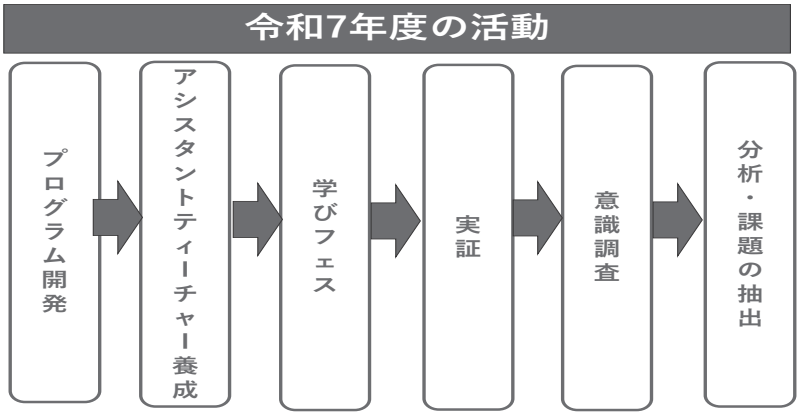
・1 か月後の経過アンケート・インタビュー調査

■調査対象

・介護・医療施設の管理職、一般職

・養成校学生(2025 年度卒業見込み 2 年生)

及び養成校の卒業生



■調査実施体制

	対面で受講	オンデマンド オンラインで受講	■コースまたは8つの講座の中から希望の講座を1つ選択してもらい受講する。 ■時間帯・曜日等については、比較調査を検討しているため、実証委員会で検討を行う。
1 回目	東京	東京・千葉・神奈川・仙台・福島・大阪・高知・名古屋・北海道・長崎・沖縄・福岡 ＊実証都市が増える可能性あり	
2 回目	福島		
3回目	北海道、宮城、福島、東京、埼玉、香川、沖縄、の全国7か所の専門学校または介護施設でプログラムに合わせて実施する。実証都市が増える可能性あり		

■調査項目

・受講内容、時間、受講形態

・受講後の有効性や利活用について

・受講後のフォローアップについて

■分析内容

・受講生の講座に対するモチベーション

・ミニテストによる知識や技術定着率

・施設などの他の研修・セミナーでのフォローアップ体制について

・学習のニーズおよび継続するための受講形態に関するニーズ調査

・どのようにしたら、地方と都市との差がない、標準化の研修を行えるか？

・学習の継続できない理由について、何が不足しているのか？

・学習効果の向上について、どのようにしたらアウトプットできるか？

・オンデマンドの受講時間はどのくらいが習得でき、継続して受講できるか？

■成果（学び直し講座の開設）

実証調査においてプログラムが有効性のあるかどうかについて分析を行う。また、実証とともに受講形態や受講後のフォローアップについて意識調査も行い、その結果をまとめ、今後ブラッシュアップ検証を行う。

5）仙台リハビリテーション専門学校との文部科学省事業の連携について

■趣旨・目的等について

仙台リハビリテーション専門学校が取り組んでいる、事業は、高等部の知的障がい者を対象とした就業教育の開発であり、本事業が次年度開発するプログラムは、採用側並びに介護職員向けのプログラム開発（知的障がい者とのかかわり方）を予定している。

両校ともに、対象者は異なるものの、介護の現場で戦力になる人財育成という共通の目標があると考えられる。両校が連携しプログラムを提供することで、介護業界の慢性化した人財不測の解消にもつながることが予想されるため、社会実装化できるプログラムをともに開発することを目的としている。

■連携内容

①敬心学園　職業教育研究開発センターが開発する知的障がい者とのかかわり方講座内容への助言等。

②障がい者が受講できるアップデートプログラムの開発。

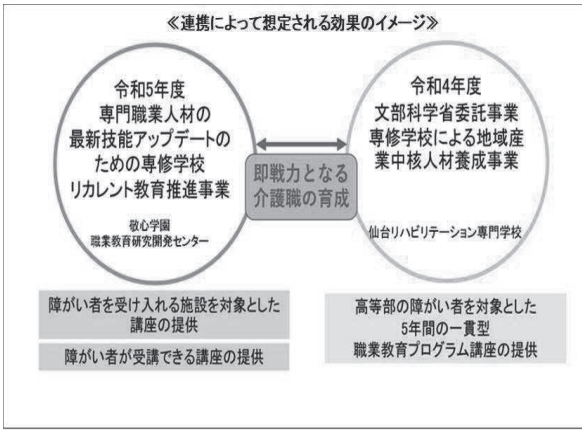
③仙台リハビリテーション専門学校が開発する介護講座内容への助言等。

■想定される効果

＊講座の内容が、実践的でかつ現場で実践できる内容が提供できる。

＊採用側並びに介護職への理解がより深まり、知的障がい者への受け入れができるようになる。

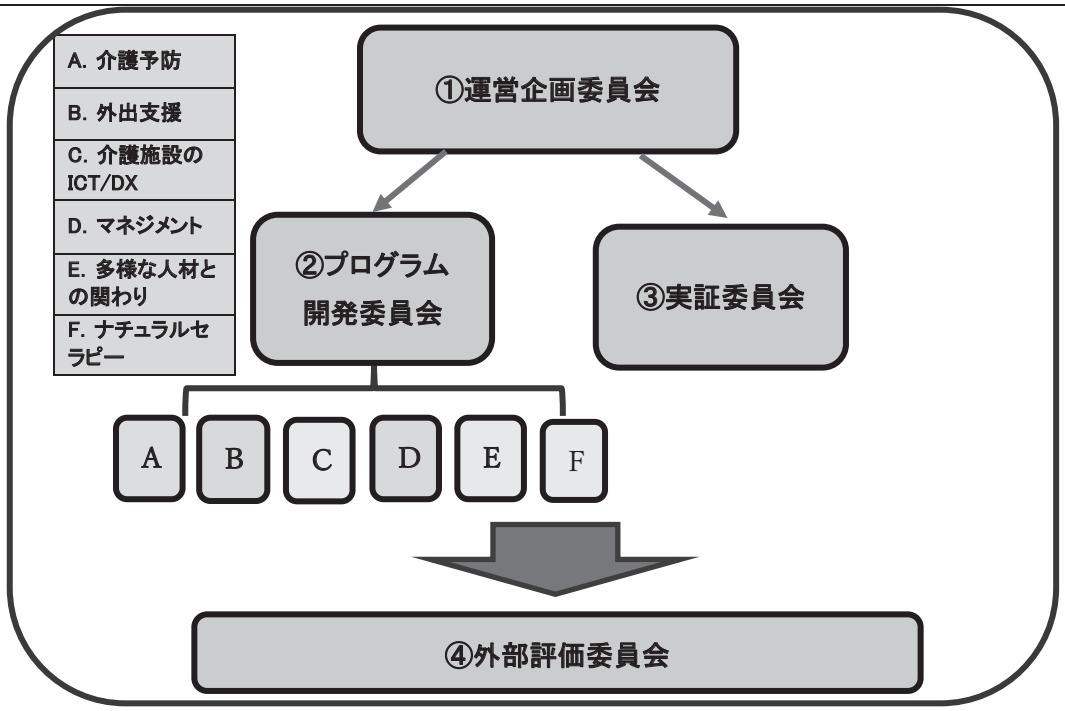
＊知的障がい者の活躍できる業務内容を的確に提示することが出来るため、障がい者が活躍できる場を提供することが出来る。



（3） 本年度の取組に関する年間スケジュール

6 月	事業開始 （5 月 27 日）	キックオフミーテイング、運営企画委員会同時開催 プログラム委員会開催 実証委員会開催
7 月	プログラム開発 アシスタントティ ーチャー養成	6 つの分科会会議開催
8 月	プログラム開発 アシスタントティ ーチャー養成	プログラム委員会開催および 6 つの分科会会議開催 実証委員会開催
9 月	実証講座 （KAIGO フェス） 受講募集	分科会会議開催 実証委員会開催 プログラム開発委員会開催
10 月	実証講座開始	分科会会議開催
11 月	実証講座実施	分科会会議開催
12 月	実証講座実施	分科会会議開催
1 月	実証講座終了 成果報告会開催	合同分科会、運営企画委員会同時開催（評価） プログラム委員会開催および 6 つの分科会会議開催（評価） 実証委員会開催（評価）
2 月		外部評価委員会開催（評価） 第 3 者評価終了
3 月	事業終了	成果報告書完成

4. 事業の実施体制



①運営企画委員会

プロジェクトに参加する当事者を含む多様な関係者による事業の目的、目標、運営方法の検討・共有を行う。各委員会の調整も行う。

②プログラム開発委員会

初年度は、リカレント教育にあった有効と考えられる講座を選定し、2 年目以降で、1 年目の実証結果をもとに、新規プログラムを開発し、アシスタントティーチャー用のテキストも同時に開発する。また、動画教材に使用する開発も行う。

また、本年度から次年度のプログラム開発を検討する為に講座ごとに 6 つの分科会を設置し分科会ごとにプログラムの検討を行い、最終的にプログラム開発委員会（全体）で承認する。

③実証委員会

初年度、既存の講座について有効性があるかどうか、また継続して受講できる環境に関するニーズ調査を行う。2 年目は、開発されたプログラムを各施設の職員や専門学校の学生を対象に実証し、評価を行う。併せて、各施設や専門学校などで導入を考えている施設の職員や学校の教員のためのアシスタントティーチャー養成講座を実施し、全国の施設や専門学校で実施できるよう人材育成を行う。

④外部評価委員会

プログラムの評価測定を担当するとともに、事業全体への総合評価・検証や助言を行う。

5. 組織体制

(1)教育機関

構成機関(学校・団体・機関等)の名称		役割等	都道府県名
1	学校法人　敬心学園 日本福祉教育専門学校	プログラム開発 実証協力	東京都
2	学校法人　仙台北学園 仙台リハビリテーション専門学校	プログラム開発 実証協力	宮城県
3	学校法人　こおりやま東都学園 郡山健康科学専門学校	プログラム開発 実証協力	福島県
4	学校法人西野学園 札幌リハビリテーション専門学校	プログラム開発 実証協力	北海道
5	公立大学法人　山梨県立大学	プログラム開発	山梨県
6	学校法人　千葉商科大学	外部評価	千葉県
7	学校法人　東京聖徳学園　聖徳大学	プログラム開発	千葉県
8	学校法人　駒澤大学	外部評価	東京都
9	学校法人　武庫川学院　武庫川女子大学	運営企画 プログラム開発 実証	兵庫県
10	学校法人 平成医療学園　宝塚医療大学	介護予防講座分科会	和歌山県
11	学校法人　共栄学園　共栄大学	プログラム開発	埼玉県
12	学校法人　慈恵大学　東京慈恵会医科大学	プログラム開発	東京都

(2)企業・団体

名称		役割等	都道府県名
1	社会福祉法人　敬心福祉会	実証協力	東京都
2	社会福祉法人　善光会	運営企画・実証	東京都
3	社会福祉法人　千歳会	実証協力・実証	千葉県
4	社会福祉法人　南生会	プログラム開発	千葉県
5	社会福祉法人　梅仁会	実証協力・実証	長崎県
6	株式会社　ビーブリッド	運営企画・プログラム開発	東京都
7	株式会社　リエイ	実証・実証協力	千葉県
8	社会福祉法人　今山会	プログラム開発	福岡県
9	コニカミノルタ株式会社	実証	東京都
10	株式会社ニチイ学館	実証・実証協力	東京都
11	株式会社オリーヴ	プログラム開発	東京都

12	株式会社スタジオ ドード	プログラム開発	神奈川県
13	株式会社ゆう&あい	プログラム開発	愛知県
14	B.A.O.V 株式会社	運営企画・プログラム開発	千葉県
15	株式会社　アライヴテック	実証	東京都
16	株式会社　マイナビ	運営企画・実証	東京都
17	合同会社　かいご支援サービス	実証・実証協力	神奈川県
18	公益財団法人　テクノエイド協会	実証	東京都
19	公益社団法人　全国老人保健施設協会	外部評価	東京都
20	株式会社　SPI あ・える倶楽部	プログラム開発	東京都
21	株式会社アイビー	プログラム開発	東京都
22	株式会社　Next Care Consulting	運営企画・実証	東京都

（3）行政機関・その他

	名称	役割等	都道府県名
1	川崎市経済労働局イノベーション推進室	外部評価委員会	神奈川県

（4）各機関の役割・協力事項について

〇教育機関

・医療・福祉・リハビリ系

（介護福祉士・理学療法士・作業療法士・柔道整復師・鍼灸師）専門学校（4 校）

・大学　（7 校）

①既存のコンテンツを使ったプログラムの開発

②新規コンテンツ企画、開発、プログラム開発

③それに伴う教材（動画も含む）の作成

④アシスタントティーチャー養成講座マニュアルの作成

⑤アシスタントティーチャー養成講座の参加協力

⑥プログラムを使った実証実施の協力

⑦効果測定調査実施の協力

⑧実証実施後のプログラムの評価・改善提案

〇企業・団体

・対人援助分野・個人

①開発するプログラムに対する現場視点での助言

②開発したプログラムの評価

③アシスタントティーチャー養成講座マニュアル開発協力

④アシスタントティーチャー養成講座の参加協力

⑤教育機関同様の実証実施の協力

⑥実証の効果測定の方法に関する助言

・IT 関係事業者

①介護職向けの ICT/DX における使用上の助言

②ICT/DX 講座プログラム開発協力

③講座で活用する LMS システムについての評価・助言

・業界団体

①業界全体の状況を踏まえてのプログラムに対する評価・助言

②業界の取り組みとのコラボレーションを検討

〇行政機関、その他

①プログラムの導入に対する評価・助言

②プログラムが広く受け入れてもらうための助言

③事業全体に対する評価

（5）事業を実施する上で設置する会議

会議名①	運営企画委員会		
目的・役割	本プロジェクトに参加する当事者による事業の目的・目標・計画立案、運営方法の検討を行う。		
検討の 具体的内容	・事業全体の企画・運営 ・事業進捗の管理調整 ・事業計画の到達点、評価指標の設定 ・評価基準の確認 ・実証調査・実施・研修会の運営企画		
委員数	10 人	開催頻度	2 回

運営企画委員会の構成員（委員）

	氏名	所属・職名	役割等	都道府県名
1	小林　光俊	学校法人敬心学園 理事長	運営企画委員会	東京都
2	小川　全夫	学校法人敬心学園 職業教育研究開発 センター　センター長	運営企画委員会長	東京都
3	小林　英一	学校法人敬心学園 職業教育研究開発 センター研究員	運営企画委員会副委員長 プログラム開発委員会 実証委員会	東京都
4	竹下　康平	株式会社　ビーブリッド 代表取締役	運営企画委員会 プログラム開発委員会委員長	東京都

5	宮本　隆史	社会福祉法人 善光会 アドバイザリーボード	運営企画委員会 実証委員会委員長	東京都
6	柳沼　亮一	株式会社 Next Care Consulting 代表取締役社長	運営企画委員会 実証委員会副委員長	東京都
7	内田　和宏	学校法人　武庫川学院 武庫川女子大学 心理・社会福祉学部 講師	運営企画委員会 プログラム開発委員会 マネジメント講座分科会 実証委員会	兵庫県
8	吉田　涼平	B・A・O・Ｖ株式会社 取締役	運営企画委員会 プログラム開発委員会副委員長 ICT/DX 講座	千葉県
9	笹島　慶太	株式会社　マイナビ 未来応援事業本部 進学情報事業部 営業統括部	運営企画委員会	東京都
10	沢田　秀樹	学校法人敬心学園 職業教育研究開発センター	・運営企画委員会 ・プログラム開発委員会 ・実証委員会	東京都

会議名②	プログラム開発委員会		
目的・役割	・プログラムの企画・開発する。それに伴う教材の企画・開発を行う。 ・6つの分科会に分かれ、分科会ごとにプログラム開発を行いプログラム開発委員会全体会にて最終検討を行う。 A. 介護予防講座分科会 B. 外出支援講座分科会 C. 介護施設の ICT/DX 講座分科会 D. マネジメント講座分科会 E. 多様な人材との関わり講座分科会 F. ナチュラルセラピー講座分科会		
検討の 具体的内容	①既存のコンテンツを使ったプログラムの開発 ②新規コンテンツ企画、開発、プログラム開発 ③それに伴う教材（動画も含む）の作成 ④アシスタントティーチャー養成講座マニュアルの作成		
委員数	18 人	開催頻度	5 回

プログラム開発委員会の構成員（委員）

氏名		所属・職名	役割等	都道府県名
1	竹下　康平	株式会社　ビーブリッド 代表取締役	運営企画委員会 プログラム開発委員会委員長	東京都
2	吉田　涼平	B・A・O・Ｖ株式会社 取締役	運営企画委員会・プログラム開発委員会副委員長 ICT/DX 講座	東京都
3	伊藤　健次	公立大学法人 山梨県立大学 人間福祉学部 福祉コミュニティ学科 教授	プログラム開発委員会 介護予防講座分科会	山梨県
4	菊地　克彦	学校法人東京聖徳学園 聖徳大学文学部教養 デザインコース教授	プログラム開発委員会 マネジメント講座分科会	東京都
5	高橋　利明	TWEC	プログラム開発委員会 外出支援講座分科会	千葉県
6	櫻井　直人	学校法人仙台北学園 仙台リハビリテーション 専門学校 作業療法学科学科長	プログラム開発委員会 ナチュラルセラピー講座分科会	宮城県
7	西村　昭宣	宝塚医療大学 和歌山保健医療学部 リハビリテーション学科 作業療法学専攻　助教	介護予防講座分科会	和歌山県
8	内田　和宏	学校法人　武庫川学院 武庫川女子大学 心理・社会福祉学部 講師	運営企画委員会 プログラム開発委員会 実証委員会 マネジメント講座分科会	東京都
9	鳥居　賢一	株式会社オリーブ 代表取締役	プログラム開発委員会 多様な人との関わり方講座	東京都
10	町　　亞聖	フリーアナウンサー	プログラム開発委員会 外出支援講座分科会	東京都
11	尾滝　元太	株式会社ビーブリッド 経営企画部新規事業推進チームマネージャー	プログラム開発委員会 ICT/DX 講座	千葉県
12	朝野　愛子	社会福祉法人 今山会　統括施設長	プログラム開発委員会 マネジメント講座分科会	福岡県
13	太原　靖一郎	学校法人　共栄学園	プログラム開発委員会	埼玉県

		共栄大学 国際経営学部　教授	マネジメント講座分科会	
14	光星　きらら	フリーキャリア コンサルタント	プログラム開発委員会 ナチュラルセラピー講座分科会	沖縄県
15	吉田　あい	株式会社ゆう&あい 取締役	プログラム開発委員会 多様な人材との関わり方講座 分科会	愛知県
16	角田　大騎	学校法人西野学園 札幌リハビリテーション 専門学校 作業療法士科　学科長	プログラム開発委員会 介護予防講座分科会	北海道
17	小林　英一	学校法人敬心学園 職業教育研究開発セン ター研究員	運営企画委員会副委員長 プログラム開発委員会 実証委員会	東京都
18	沢田　秀樹	学校法人敬心学園 職業教育研究開発セン ター研究員	運営企画委員会 プログラム開発委員会 実証委員会	東京都

会議名③	介護予防講座分科会		
目的・役割	介護予防プログラムの企画・開発をする。それに伴う教材の企画・開発を行う。		
検討の 具体的内容	① 新規コンテンツ企画、開発、プログラム開発 ② それに伴う教材（動画も含む）の作成 ③ アシスタントティーチャー養成講座マニュアルの作成		
委員数	5 人	開催頻度	5 回

介護予防講座分科会の構成員（委員）

氏名		所属・職名	役割等	都道府県名
1	伊藤 健次	公立大学法人 山梨県立大学 人間福祉学部 福祉コミュニティ学科教授	・プログラム開発委員会 ・介護予防講座分科会リーダー	山梨県
2	西村　昭宣	宝塚医療大学 和歌山保健医療学部 リハビリテーション学科 作業療法学専攻 助教	・介護予防講座分科会	兵庫県

3	角田　大騎	学校法人西野学園 札幌リハビリテーション専門学校 作業療法士科 学科長	・プログラム開発委員会 ・介護予防講座分科会	北海道
4	高橋　直人	学校法人　慈恵大学 東京慈恵会医科大学附属柏病院 外科医長　教授	・介護予防講座分科会	東京都
5	八子　久美子	学校法人 敬心学園 日本福祉教育専門学校 国際交流事業特任プロジェクトリーダー	・介護予防講座分科会	東京都

会議名④	外出支援講座分科会		
目的・役割	外出支援プログラムの企画・開発をする。それに伴う教材の企画・開発を行う。		
検討の 具体的内容	① 新規コンテンツ企画、開発、プログラム開発 ② それに伴う教材（動画も含む）の作成 ③ アシスタントティーチャー養成講座マニュアルの作成		
委員数	3 人	開催頻度	3 回

外出支援講座分科会の構成員（委員）

氏名		所属・職名	役割等	都道府県名
1	高橋　利明	TWEC	・プログラム開発委員会 ・外出支援講座分科会リーダー	東京都
2	町　　亞聖	フリーアナウンサー	・プログラム開発委員会 ・外出支援講座分科会	東京都
3	真鍋　圭彰	株式会社アイビー 代表取締役	・外出支援講座分科会	東京都

会議名⑤	ICT/DX 講座分科会
目的・役割	ICT/DX プログラムの企画・開発をする。 それに伴う教材の企画・開発を行 う。
検討の 具体的内容	① 新規コンテンツ企画、開発、プログラム開発 ② それに伴う教材（動画も含む）の作成 ③ アシスタントティーチャー養成講座マニュアルの作成

委員数	2 人	開催頻度	3 回

ICT/DX 講座分科会の構成員（委員）

	氏名	所属・職名	役割等	都道府県名
1	吉田　涼平	株式会社 B・A・O・V 取締役	・運営企画委員会 ・プログラム開発委員会副委員長 ・ICT/DX 講座分科会リーダー	千葉県
2	尾滝　元太	株式会社ビーブリッド 経営企画部新規事業 推進チームマネージャー	・プログラム開発委員会 ・ICT/DX 講座分科会	千葉県

会議名⑥	マネジメント講座分科会		
目的・役割	マネジメントプログラムの企画・開発をする。 それに伴う教材の企画・開発を行う。		
検討の 具体的内容	① 新規コンテンツ企画、開発、プログラム開発 ② それに伴う教材（動画も含む）の作成 ③ アシスタントティーチャー養成講座マニュアルの作成		
委員数	4 人	開催頻度	3 回

マネジメント講座分科会の構成員（委員）

	氏名	所属・職名	役割等	都道府県名
1	内田　和宏	学校法人　武庫川学院 武庫川女子大学 心理・社会福祉学部講師	・運営企画委員会 ・プログラム開発委員会 ・マネジメント講座分科会リーダー ・実証委員会	兵庫県
2	菊地　克彦	学校法人東京聖徳学園 聖徳大学文学部教養 デザインコース教授	・プログラム開発委員会 ・マネジメント講座分科会	東京都
3	朝野　愛子	社会福祉法人 今山会理事 一般社団法人　福岡市 老人福祉施設協議会 代表理事	・プログラム開発委員会 ・マネジメント講座分科会	福岡県

4	太原　靖一郎	学校法人　共栄学園 共栄大学 国際経営学部　教授	・プログラム開発委員会 ・マネジメント講座分科会	埼玉県

会議名⑦	多様な人とのかかわり方講座分科会		
目的・役割	多様な人とのかかわり方プログラムの企画・開発をする。 それに伴う教材の企画・開発を行う。		
検討の 具体的内容	① 新規コンテンツ企画、開発、プログラム開発 ② それに伴う教材（動画も含む）の作成 ③ アシスタントティーチャー養成講座マニュアルの作成		
委員数	4 人	開催頻度	5 回

多様な人とのかかわり方講座分科会の構成員（委員）

氏名		所属・職名	役割等	都道府県名
1	鳥居　賢一	株式会社オリーヴ 代表取締役	・プログラム開発委員会 ・多様な人とのかかわり方講座分科会	東京都
2	吉田　あい	株式会社ゆう&あい 取締役	・プログラム開発委員会 ・多様な人とのかかわり方講座分科会	愛知県
3	櫻井　直人	学校法人仙台北学園 仙台リハビリテーション専門学校　作業療法学科学科長	・プログラム開発委員会 ・ナチュラルセラピー講座分科会リーダー ・多様な人とのかかわり方分科会	宮城県
4	安永　愛香	社会福祉法人どろんこ会 理事長	多様な人とのかかわり方講座分科会	東京都

会議名⑧	ナチュラルセラピー講座分科会		
目的・役割	ナチュラルセラピープログラムの企画・開発をする。 それに伴う教材の企画・開発を行う。		
検討の 具体的内容	① 新規コンテンツ企画、開発、プログラム開発 ② それに伴う教材（動画も含む）の作成 ③ アシスタントティーチャー養成講座マニュアルの作成		
委員数	4 人	開催頻度	5 回

ナチュラルセラピー講座分科会の構成員（委員）

氏名		所属・職名	役割等	都道府県名
1	櫻井　直人	学校法人仙台北学園 仙台リハビリテーション専門学校　作業療法学科学科長	・プログラム開発委員会 ・ナチュラルセラピー講座分科会リーダー ・多様な人とのかかわり方分科会	東京都
2	光星　きらら	フリーキャリアコンサルタント	・プログラム開発委員会 ・ナチュラルセラピー講座分科会	沖縄県
3	遠藤　靖子	ソムリエ	・ナチュラルセラピー講座分科会	千葉県
4	村田　詩歩	株式会社　奏音 発達支援ルームしどれ 児童指導員、音楽療法士	・ナチュラルセラピー講座分科会	広島県

会議名⑨	実証委員会		
目的・役割	開発した、教育プログラムとそれに伴う教材を使って実証し検証する。		
検討の 具体的内容	以下の項目について実証調査を行う ①開発されたプログラムを活用した講座を希望する福祉施設の介護職及び専門学校の学生や、卒業生を対象に実施を行う。 ②習得の効果に関する測定が必要なため、当該講座の試験結果が基本データとなる。講座後その都度、学習効果の測定を精密化する。 ③受講生に対して、プログラムに内容がどこまで習得できたか、研修の改善や継続の有無に関するアンケートおよびインタビュー調査を行う。 ④今後、開発したプログラムの導入を考えている福祉施設の介護職や専門学校も教員のためにアシスタントティーチャー養成講座を実施し、全国の福祉施設や専門学校で実施できるよう人材育成を行う。 ⑤習得効果測定が基本であるので、講座の修了試験【筆記・実技】で効果が明確になる評価方法を取る。 ⑥アシスタントティーチャー養成マニュアルについて、受講したアシスタントティーチャー候補生の活用能力がどこまで向上したかに関する調査を行う。		
委員数	17 人	開催頻度	4 回

実証委員会の構成員（委員）

氏名		所属・職名	役割等	都道府県名
1	宮本　隆史	社会福祉法人 善光会 アドバイザリーボード	運営企画委員会 実証委員会委員長	東京都
2	柳沼　亮一	株式会社 Next Care Consulting 代表取締役社長	運営企画委員会 実証委員会副委員長	東京都
3	永井　周治	社会福祉法人　千歳会 常任理事	実証委員会	千葉県
4	大本　昇	株式会社アライヴテック 代表取締役	実証委員会	東京都
5	酒井　貴文	株式会社マイナビ 医療・福祉エージェント 事業本部	実証委員会	東京都
6	五島　清国	公益財団法人 テクノエイド協会 企画部　部長	実証委員会	東京都
7	阿比留　志郎	社会福祉法人　梅仁会 理事長	実証委員会	長崎県
8	岡田 真和	コニカミノルタ株式会社 FORXAI 事業統括部 QOL ソリューション事業部　サービスクリエイト部	実証委員会	東京都
9	坂手　百子	株式会社リエイ 取締役管理本部長	実証委員会	千葉県
10	次田　芳尚	合同会社かいご支援サービス　代表社員	実証委員会	神奈川県
11	千石　友明	株式会社ニチイ学館 人財開発事業部	実証委員会	東京都
12	吉田　智哉	敬心学園　日本福祉教育専門学校　副校長	実証委員会	東京都
13	比嘉　美香	合同会社クリエイト LaBo 沖縄　代表社員	実証委員会	沖縄県
14	田島　利子	「Re-think」代表	実証委員会	神奈川県
15	内田　和宏	学校法人　武庫川学院 武庫川女子大学 心理・社会福祉学部講師	・運営企画委員会 ・プログラム開発委員会 ・マネジメント講座分科会リーダー ・実証委員会	兵庫県

16	小林　英一	学校法人敬心学園 職業教育研究開発センター研究員	運営企画委員会副委員長 プログラム開発委員会 実証委員会	東京都
17	沢田　秀樹	学校法人敬心学園 職業教育研究開発センター　研究員	運営企画委員会 プログラム開発委員会 実証委員会	東京都

会議名⑩	外部評価委員会		
目的・役割	【目的】 外部評価委員会は直接点検・評価を行うことはせず、各プロジェクトが行う自己点検・評価の結果を総合評価実施することで、評価の有効性、適切性について第三者の立場から客観的のある評価を行う。 【役割】 ・計画段階において、目標が明確か、目標を達成したことを測定する評価指標は適切か、事業がスムーズに進み大きな成果が得られるように助言する。・プログラムの評価効果測定を担当するとともに、事業全体への評価・検証を行う		
検討の 具体的内容	・事業企画・運営に関する助言 ・事業運営と成果に関する評価と検証 ・開発した教育プログラムそれに伴う教材の検証		
委員数	4 人	開催頻度	3 回

外部評価委員会の構成員（委員）

氏名		所属・職名	役割等	都道府県名
1	末繁　泰弘	川崎市経済労働局 イノベーション推進室 ウェルフェアイノベーション担当	外部評価委員会	神奈川県
2	原田　啓一郎	学校法人　駒澤大学 法学部　教授	外部評価委員会	東京都
3	和田　義人	学校法人　千葉学園 千葉商科大学 人間社会学部　教授	外部評価委員会	千葉県
4	光山　　誠	公益社団法人 全国老人保健施設協会 人材対策委員会	外部評価委員会	大阪府

Ⅱ. 事業報告

(1)事業報告

人に、社会に、輝きを。 KEISHIN 敬心学園

令和7年度「専門職業人材最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育推進事業」

これからの高齢社会に対応できる人材育成に必要な
介護・医療分野の現場で利活用できる
最新技能アップデートのための実践プログラム開発事業
及びその有効性を確認する実証研究事業

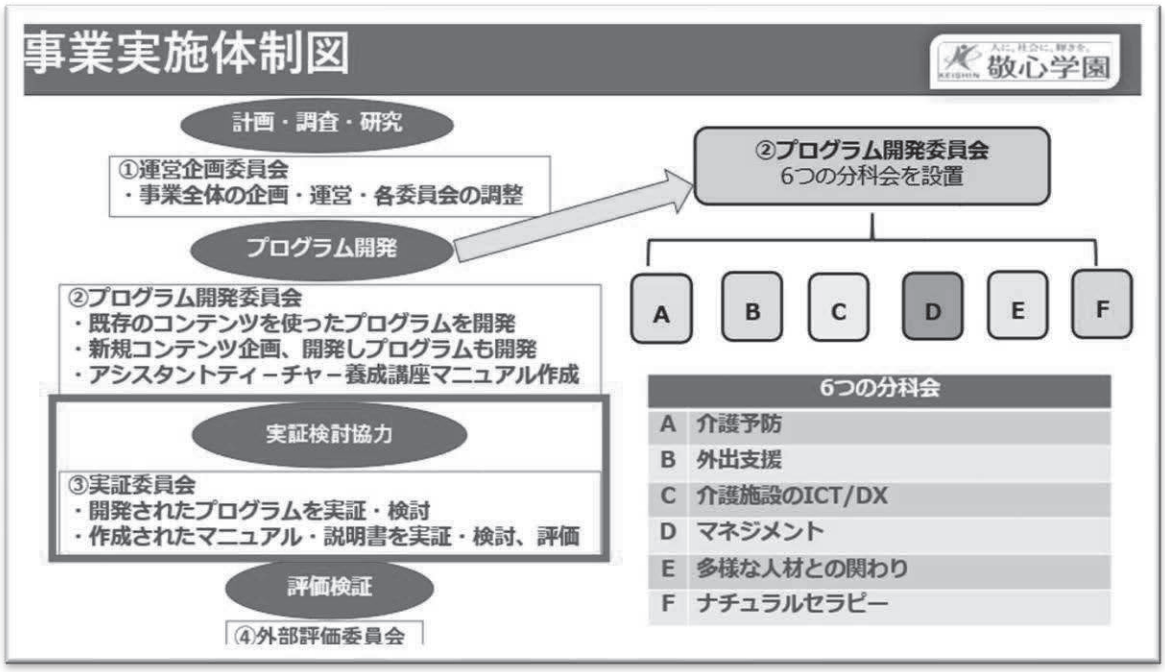
学校法人敬心学園　職業教育研究開発センター

1.研究の概要について

人に、社会に、輝きを。 KEISHIN 敬心学園

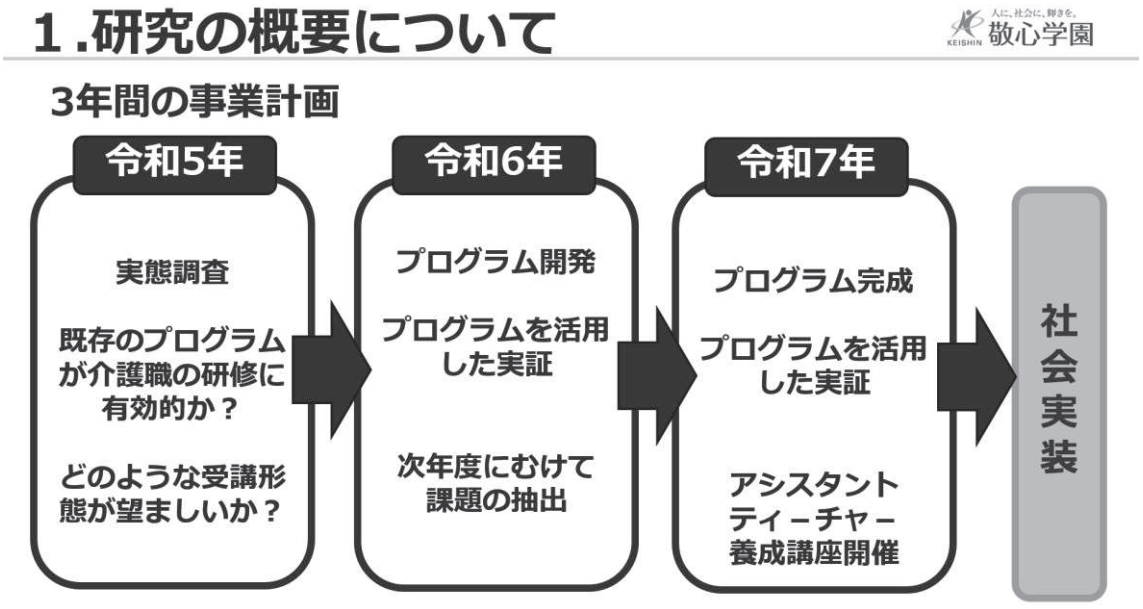
研究の目的

介護職や医療職の人材スキル・知識を**最新のものにアップデートできるリカレント教育のプログラム（基礎・基本）を開発**し、
受講後のフォローアップをする体制、そして研修を行える人材教育**アシスタントティーチャー（以下、AT）の研修**を同時に行うことで、
講座等が**安定的・持続的に確保できるプログラム**を作成し、
実証研究を行いその効果検証を実施する。



本事業の実施体制は、①運営企画委員会②プログラム開発員会③実証委員会④外部評価委委員会の４つの委員会を設置して実施した。
また、合同会議を実施し、各委員会が本年度実施する計画について情報共有を行った。

本年度は、６種類８つの既存のプログラムに加え、排泄ケアを追加し全部で９つのアップデートプログラム開発のための実態調査を行った。



また本年度は、アシスタントティーチャー（AT）養成講座を開催した。AT を含む完成した成果物については以下の表のとおりである。

研究の概要について

完成した成果物

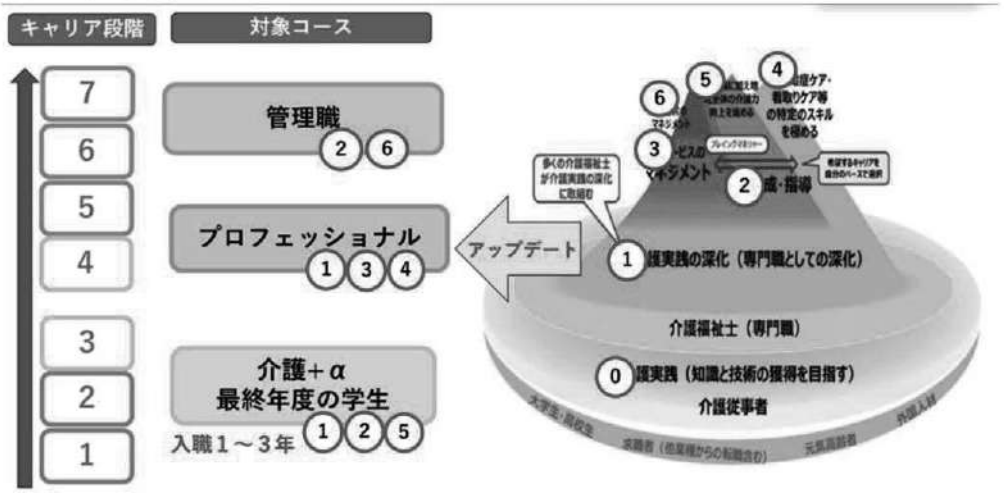


No	講座名	オンデマンド動画	教材一式	ミニテスト事前・事後	AT養成講座教材
1	介護予防	●	●	●	●
2	マネジメント	●	●	●	
3	外出支援	Text	●	●	
4	介護ICT/DX	Text	●	●	
5	多様な人とのかかわり　外国人	●	●	●	
6	多様な人とのかかわり　障がい者	●	●	●	
7	ナチュラルセラピーアロマセラピー	Text	●	●	●
8	ナチュラルセラピーミュージックセラピー	9月に開催したKAIGOフェスで、ベジガールズさんとコラボをしレクマニュアルを作成した。			
9	排泄ケア	本年度チャレンジのみのため、次年度は動画などを検討する予定。			

事前学習用のオンデマンド動画、講座で利用する教材、講座の前後で行うミニテスト、介護予防とナチュラルセラピーアロマセラピー講座でアシスタントティーチャー養成講座の教材を作成した。

本年度の事業内容

キャリア段位及び山脈型を用いた対象コース

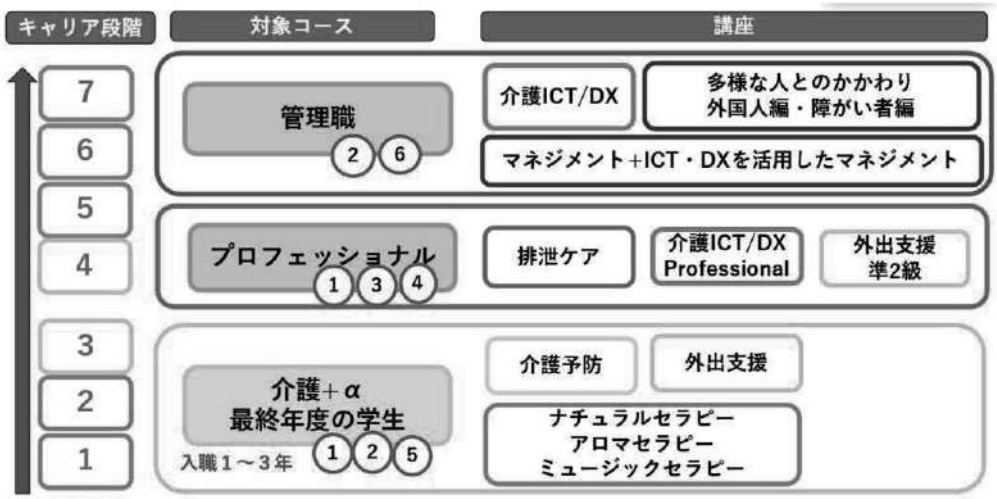


内閣府が提唱している介護プロフェッショナルのキャリア段位と厚生労働省が打ち出した山脈型のキャリアモデルを用いたプログラムを開発した。受講者の対象レベルを 3 つに分け、さらに、必須とされる講座とマルチタスク講座としてどのレベルも受講できるように分け、プログラムを開発した。

本年度の事業内容

敬心学園

キャリア段位及び山脈型を用いた講座イメージ



こちらがキャリア段位及び山脈型に併せた対象コース、講座の一覧である。

キャリア段位の 1～3 のレベルは最終年度の学生や入職して 1 年目～3 年目までの職員を対象に、4～5 のレベルではプロフェッショナルコースとして、キャリア段位 6～7 のレベルでは管理職コースとして設定し、それぞれのコースに合わせた講座の開発を行った。

本年度の事業内容

敬心学園

開発する講座一覧

NO	対象コース	必須とされる講座	講座提供方法		
			講師	アシスタントティーチャー	動画のみ
1	管理職	介護ICT/DX	●		●
		マネジメント+ICT・DXを活用したマネジメント	●		
		多様な人とのかかわり（障がい者）			●
		多様な人とのかかわり（外国人）			●
2	プロフェッショナル	排泄ケア	●		
		介護ICT/DX　Professional	●		
		外出支援　トラベルヘルパー準2級	●		
3	介護+α 最終年度の学生	介護予防		●	
		外出支援	●		
		ナチュラルセラピー　アロマセラピー		●	
		ナチュラルセラピー　ミュージックセラピー			●

専門の講師が行う講座、動画を配信する講座、そしてアシスタントティーチャーが行う講座を開発した。こちらの表の通り、介護予防とナチュラルセラピーアロマセラピーの 2 つの講座でアシスタントティーチャー養成講座を行い、養成講座を受けたアシスタントティーチャーが専門の講師の代わりに講座を行った。

昨年度の課題と本年度に向けての解決策

1【講座集客について】
・内容や日時の記載等講座案内の説明不足。
・無料で受講するための条件の周知徹底不足。
・受講生の職歴・役職のばらつき。

▶ 募集の方法などを受講者目線で見直す。

2【講座について】
・動画の完成延滞に伴う事前学習開始の延滞。
・事前学習の周知徹底ができなかった。
・動画視聴時間が長すぎるものがあった。
・講座の目的、その後活躍方法の説明不足。
・アシスタントティーチャー養成ができる講座できない講座があった。

▶ 周知の方法についてメールだけではなく別の方法も検討。

▶ 動画やスライドで実践できる講座のみを再検討。

3【LMSシステムについて】
・ミニテスト・アンケートの回答率が低かった。

▶ 実施方法の見直し。

本年度は昨年度の課題をもとに受講者目線で講座の募集、講座の見直しを行った。
内容や日時等講座の説明不足を改善するため、チラシにおすすめや講師情報など受講者が興味を持ち、受けたくなるような内容に変更した。

昨年度の課題と本年度に向けての解決策

1.講座集客について





講座ごとにおススメをわかりやすく記載

講座ごとの受講時間を記載

受講形態・講座の受講で得られるもの、講師をわかりやすく記載

講座ごとにスムーズに申し込めるQRコードを添付

また、講座の認知・集客、そして介護の裾野を広げる目的で介護を知るイベント KAIGO フェスを企画した。
郡山市や新宿区などの自治体やコニカミノルタ、ユニ・チャーム、マルコメなど多くの企業からの後援・協賛をいただき 9 月に東京都と福島県にて開催した。

昨年度の課題と本年度に向けての解決策

1.講座集客について

KAIGOフェスの開催

目的：
①講座の認知、集客
②介護分野の裾野を広げる

日程：
①9/13（土）郡山健康科学専門学校
②9/23（祝）日本福祉教育専門学校

協賛・後援
自治体：郡山市、新宿区
企業：KONICA MINOLTA、ニチイ学館
ユニ・チャーム、マルコメ等





本イベントの目玉として TOKYO COOL、ハマカーン神田、サッチーを招き【芸人×介護トーク】を企画。各芸人のネタや現場で使えるレクリエーションを芸人と一緒に体験する内容で会場は笑いに包まれた。他にも本研究の講座が体験できるブースや参画した企業のブースなどがイベントを盛り上げた。

昨年度の課題と本年度に向けての解決策

1.講座集客について

KAIGOフェス実績

参加人数：
①郡山　9/13（土）80名
②東京　9/23（祝）92名

成果：
①講座の認知、集客については、イベント内容を案内することが優先され、その場で講座の案内する時間がなかったため、講座の集客についてはあまりできなかった。

②介護分野の裾野を広げられた。



結果は、郡山 80 名、東京 92 名の方が参加。学生、介護施設で働く方々、その家族、地域の方々など多くの属性の方が参加し、裾野を広げることができた。一方、講座の認知・集客についてはその場で案内や予約を促すことまではできなかった。

講座について

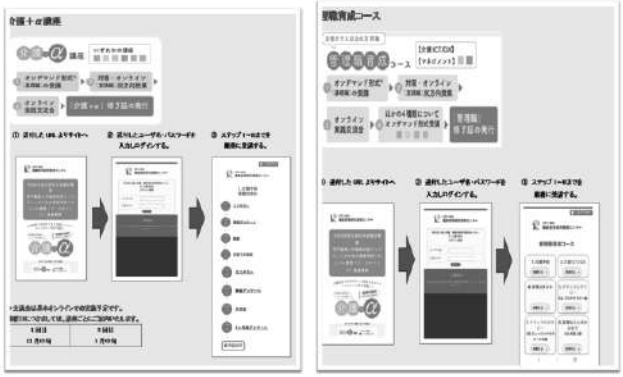
敬心学園

・動画の完成延滞に伴う事前学習開始の延滞。 ・事前学習の周知徹底ができなかった。 ・動画視聴時間が長すぎるものがあった。	事前学習がスムーズに行えるよう、あらかじめ、スケジュールをたて実施した。 動画については、本年度制作する動画視聴時間については、基本1本10分程度を原則とした。
・講座の目的、その後活躍方法の説明不足。	講座開始の前に、案内を徹底した。
・アシスタントティーチャー養成ができる講座できない講座があった。	できる講座、できない講座の理由を明確にする。

昨年度の動画の完成が遅れ、その動画を使って行う事前学習の開始が遅れるという課題が残った。また、動画が長すぎるという意見も挙がった。今年度はこの課題を解決すべく計画をしっかり立て、また 1 本あたり 10 分程度を原則とするルールを設定した。

LMSシステムについて

敬心学園

・ミニテスト・アンケートの回答率が低かった	申し込み時点での講座の流れの説明を徹底した。
	講座開始の前に、案内を徹底した。 1か月後についてもリマインドメールなど、案内を徹底した。

LMS（ミニテスト・アンケート）の課題については申込時典から講座終了 1 ヶ月後までフォローを徹底することで回答率の改善に努めてきた。

実証実績について

敬心学園

実証数

No	実証先	実証日	講座名
1	学校法人 都城コア学園 都城リハビリテーション学院	10月3日（金）	アロマセラピー 介護予防
2	学校法人　仙台北学園　仙台リハビリテーション専門学校	10月11日（土）	アロマセラピー
3	学校法人こおりやま東都学園　郡山健康科学専門学校	10月10日（金）	アロマセラピー 介護予防
4	学校法人明星学園　関東福祉専門学校	11月7日（金）	アロマセラピー 介護予防
5	介護＋α講座	11月8日（土）・9日（日）	全9講座
6	学校法人穴吹学園　穴吹パティシエ福祉カレッジ専門学校	11月14日（金）	アロマセラピー 介護予防
7	学校法人国際志学園　九州医療スポーツ専門学校	11月21日（金）	アロマセラピー
8	佐倉市社会福祉協議会	11月26日(水)	多様な人とのかかわり外国人編
9	学校法人西野学園　札幌リハビリテーション専門学校	12月1日（月）・2日（火）	アロマセラピー 介護予防
10	学校法人大庭学園　沖縄福祉保育専門学校	12月8日（月）	アロマセラピー
11	株式会社未来創造研究所	12月8日（月）	アロマセラピー
12	プロフェッショナル講座	12月13日（土）・14日（日）	外出支援
13	プロフェッショナル講座	11月30日（日）	介護ICT/DX
14	株式会社リエイ	11月28日・12月26日（木） 1月13日（火）	マネジメント 多様な人とのかかわり外国人編
15	学校法人こおりやま東都学園　郡山健康科学専門学校	1月29日（木）	介護ICT/DX

北は北海道、南は沖縄まで全国 15 の実証先で実証講座を行った。
専門学校の在校生、卒業生向けの卒後教育、一般向け、昨年度受講者のアップデート講座、企業、社会福祉協議会と様々な対象に向けて講座を実施できた。

実証実績について

敬心学園

受講者数

No	講座名	専門学校	介護＋α講座	その他 （プロフェッショナル・企業・団体）	合計
1	介護予防	169	45	0	214
2	外出支援	0	3	7	10
3	介護ICT/DX	18	1	0	19
4	マネジメント	0	7	62	69
5	ナチュラルセラピーアロマセラピー	268	20	7	295
6	多様な人とのかかわり～外国人編～	0	36	47	83
7	多様な人とのかかわり～障がい者編～	0	1	0	1
8	排泄ケア	0	3	0	3
9	管理者育成コース	0	1	0	1
				Total受講者総数	695

また、受講者数については講座ごとに人数の違いはあるが、目標 450 名を大きく上回る 695 名となった。

実証実績について

介護＋α講座（一般向け）の様子









こちらは一般募集を行った 11/8・9 に開催された介護＋α講座の様子である。
介護予防、マネジメント、外出支援などの対面での講座のほか、ICT/DX、多様な人とのかかわりなどはオンラインで開催した。

実証実績について

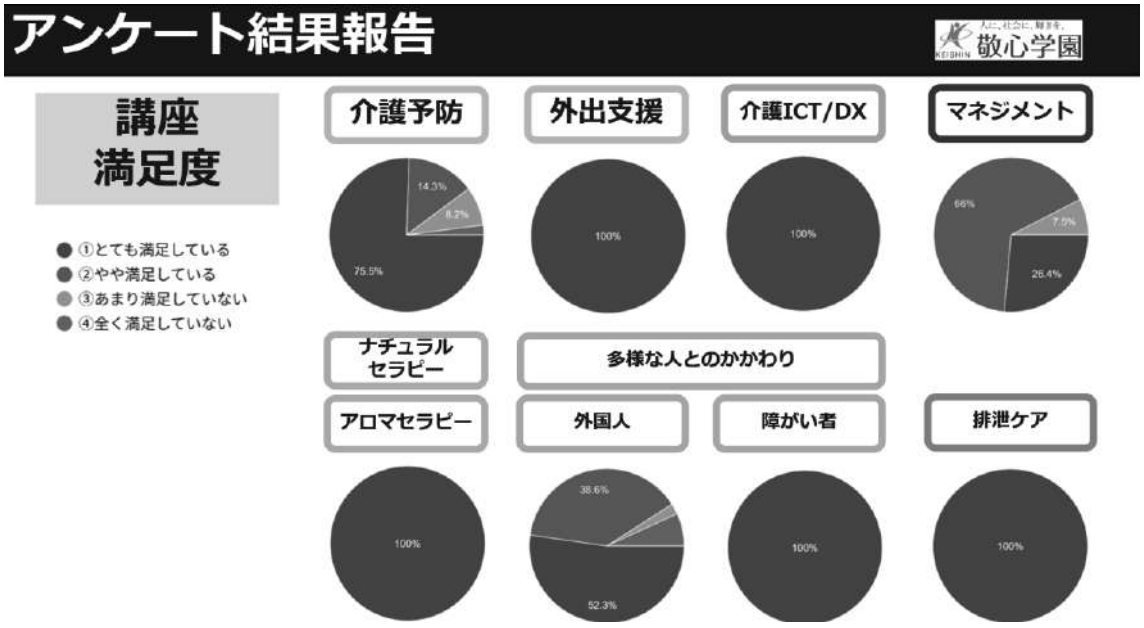
敬心学園

ミニテスト結果

*専門学校は別アンケートを実施

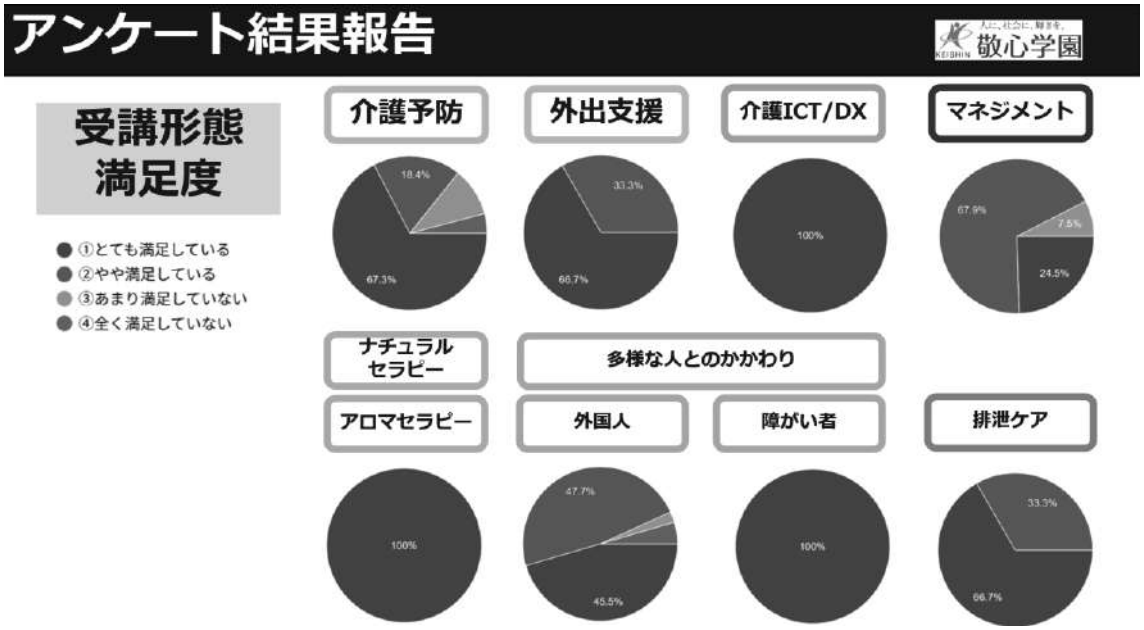
	事前テスト（人数）	事後テスト（人数）	事前テスト（平均点）	事後テスト（平均点）	事前アンケート（人数）	事後アンケート（人数）
介護予防	210	205	4.45/10	5.46/10	51*	49*
外出支援	4	3	8.75/10	10.00/10	4	3
介護ICT/DX	4	1	7.50/10	9.00/10	4	1
マネジメント	61	50	6.20/10	6.62/10	59	53
ナチュラルセラピー（アロマセラピー編）	278	270	7.81/10	8.65/10	32*	25*
多様な人とのかかわり（外国人編）	55	44	7.67/10	8.30/10	56	44
多様な人とのかかわり（障がい者編）	1	1	7.00/10	8.00/10	1	1
排泄ケア	7	4	9.25/10	8.33/10	7	3
管理者コース	0	0	ND/10	ND/10	1	0
合計	620	578	6.42/10	7.32/10	215	179

講座の事前事後で行うミニテストでは、ほぼすべての講座で事後テストの平均点が上がり、全講座の合計の平均点は事前 6.42 点から事後 7.32 点に UP。全体的に学習効果がみられる結果となった。



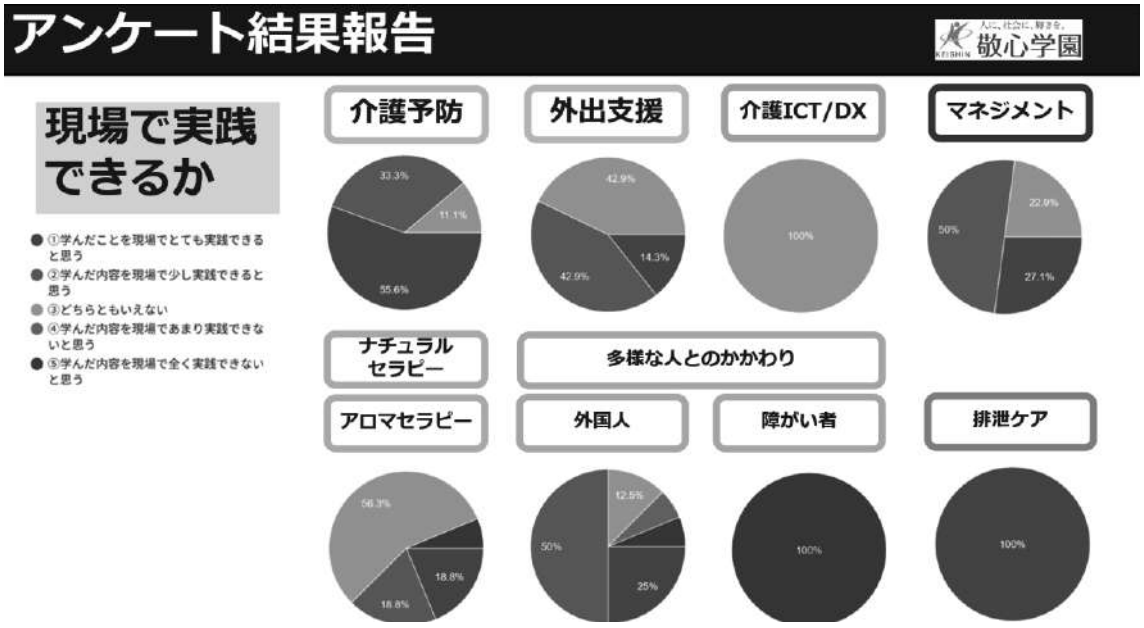
アンケートでは、

【講座の満足度】は全体の 95%が満足していると回答。

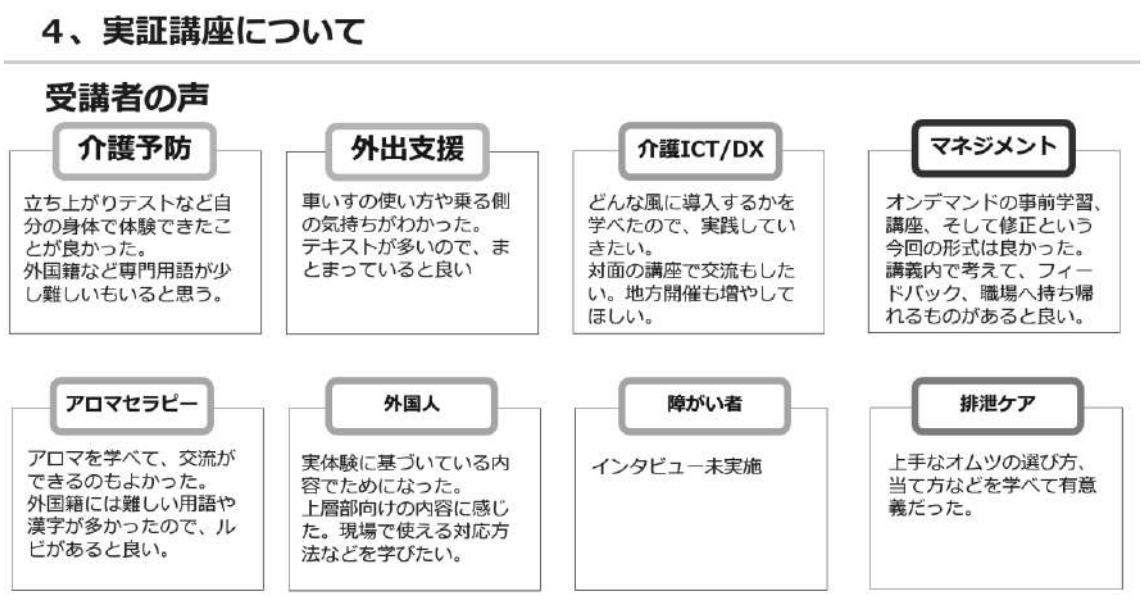


【受講形態の満足度】は全体の 96%が満足していると回答。

特に、事前オンデマンド＋リアルタイムの講座の満足度が高い結果となった。



一方、【現場で実践できるか】については、どちらともいえない、全く実践できないが目立つ結果となった。理由をヒアリングすると、「現場で（アロマを）導入する立場にいない」「車いすの利用者のいない部署」「障がい者施設で働いていない」など、実施できない環境を考慮できなかった質問、回答項目だったことがわかった。アンケートの取り方に工夫が必要であるという新たな課題が出てきた。



こちらは各講座の受講者インタビューの抜粋である。このインタビューからも事前学習から実践講座という受講形態の満足度や講座自体の満足度の高さがうかがえる。一方、増加している外国人

材に向けた教材の開発という新たな課題も浮き彫りになった。
研究の考察と社会実装化に向けては 4 章にて説明する。

（２）実証報告

①実証講座

No	実証日	開催都市	実証施設・実証校
1	10 月 3 日（金）	宮崎県	学校法人 都城コア学園 都城リハビリテーション学院
2	10 月 10 日（金）	福島県	学校法人 こおりやま東都学園　郡山健康科学専門学校
3	10 月 11 日（土）	宮城県	学校法人 仙台北学園　仙台リハビリテーション専門学校
4	11 月 7 日（金）	埼玉県	学校法人明星学園　関東福祉専門学校
5	11 月 8 日（土）・9 日（日）	東京都	学校法人敬心学園　日本福祉教育専門学校
6	11 月 14 日（金）	香川県	学校法人穴吹学園　穴吹パティシエ福祉カレッジ専門学校
7	11 月 21 日（金）	福岡県	学校法人国際志学園　九州医療スポーツ専門学校
8	11 月 26 日（水）	千葉県	佐倉市社会福祉協議会（佐倉市役所社会福祉センター）
9	11 月 28 日･12 月 26 日(木)	千葉県	株式会社リエイ
10	11 月 30 日（日）	東京都	株式会社善光総合研究所
11	12 月 1 日（月）・2 日（火）	北海道	学校法人西野学園　札幌リハビリテーション専門学校
12	12 月 8 日（月）	沖縄県	学校法人大庭学園　沖縄福祉保育専門学校
13	12 月 8 日（月）	沖縄県	株式会社未来創造研究所
14	12 月 13 日(土)･14 日(日)	東京都	日本トラベルヘルパー協会 事務局
15	1 月 13 日（火）	千葉県	株式会社リエイ
16	1 月 29 日（木）	福島県	学校法人こおりやま東都学園　郡山健康科学専門学校

令和 7 年度 文部科学省委託事業

「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業 」実証スケジュール

■実証実施日	令和 7 年 10 月 3 日（金）
■委託事業名	令和 7 年度 文部科学省委託事業 「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業 」
■事業名	これからの高齢社会に対応できる人材育成に必要な介護・医療分野の現場で利活用できる最新技能アップデートのための実践プログラム開発事業及びその有効性を確認する実証研究事業
調査名	「開発したアップデートプログラムの有効性を検証する実証調査」
調査目的	■調査目的 1）開発したプログラムについて、即現場で実践できるか検証する。 ■調査手法 ・受講後直後のインタビュー調査
■実証講座名	ナチュラルセラピーアロマセラピー講座、介護予防講座
■実証会場	学校法人 都城コア学園 都城コアカレッジ
■受講人数	介護福祉学科 1・2 年生 16 名
■実証担当者	内柴祐樹（介護予防コーディネーター） 渡邉みどり（プログラム開発コーディネーター） 小林英一（事業責任者） 沢田秀樹（事務局）
■企業参加者	一般社団法人自然セラピスト協会

【当日のスケジュール】

＊事前にアロマセラピー講座の教材到着

10 月 3 日（金）	
12:00	学校法人 都城コア学園 都城コアカレッジ到着
12:00～13:00	実証準備・教職員との打ち合わせ
13:00～14:30	介護予防講座
14:30～14:40	休憩
14:40～16:10	ナチュラルセラピーアロマセラピー講座
16:10～16:30	学生へのインタビュー
16:30	実証終了

インタビュー

受講生 3 名

〇講座を受けた感想（良かった点、改善点）

A:アロマは自分が楽しむことによって利用者も楽しんで活動できるのは良いと思った。

B:改善点としては、オイルを作るときに自分の好みで選ぶと他のチームと一緒になっちゃうことがあったりして、ほかのにおいの種類も挑戦できたら良いと思った。

介護予防は、握力測定とか、身近にあるものでできるものも多く、また機会があれば、実習で利用者さんとやってみたい。

C:介護予防は、母が 89 歳で、ちょうど介護予防について色々考えなければいけないことで、今日の講習を聞いて、そう

いう筋力とか運動、5回立ち上がり運動とか、自宅の方で試してみたりするのも良いと思った。施設実習で、無理をさせない程度に取り組んでみるのはとてもいいことだと思った。
アロマは昔からちょっと興味があった。詳しい種類を知ったり、自分でオイルを作って試すことは今まで全然なかったが、今日でかなり興味が出たので、これから色んなにおいで試してみたい。

〇事前授業からアンケート、ミニテストまでの良かった点、改善点
C:事前授業の動画は字が小さくて話している顔が大きくて、あそこ小さくて良かったんじゃないかな。後ろの席の人は見えなかったと思う。

〇今回のような講座を学校が取り入れることに対しての意見
C:こういう場は大切。ネットで調べればわかる時代だが、実際ににおいをかいだり自分で感じることがなかなかできない。こういう授業は楽しみながらできるので、今からもこういう授業の中に取り入れて、やはり専門の方が来てもらいたい。教科書上、テキスト上のことでは伝わってこないことがあるので、やっぱそれを二、三十年やっているようなプロの方が来ていただいて話していただいた方が中には入っていくと思う。続けてほしい。

〇プロの先生が良いとのことだが、学校の先生が学んで教えることについてはどう思うか。
C:プロの方が新鮮で良い。先生方も忙しいので負担ではないか。先生方が間に入ると伝わらないこともでてくるのではないか。

教員
〇今回の講座で学生が学べたこと、教員が学べたことはあるか
・二つの講座とも生活支援が介護福祉士のメインの仕事だと認識しているが、やはり多様性というところで色んなニーズが高齢者の中にもある。その中ではこの介護予防という視点とセラピー。やはり精神的な部分でストレスを感じてたりする利用者もたくさんいらっしゃるので、介護福祉士がプラスアルファの知識、技術という中ではこの二つはすごく重要なことかなというところでは、大変良い学びになった。

〇今後今日受けた講座がリカレント教育や学校の中で導入していくことができそうか
・介護福祉士を取得したところがスタートだという風に思っている。そういうのも学校時代に話をしても、実感としてやっぱり社会に出た学生の方から、先生たちがそうやってスタートラインだよと、そこからスキルアップしていかなければならないものなんだということが実感してわかった。実は卒業生から相談が結構来ていて、もう一回学び直しをしたいと。介護技術の部分であったり、介護予防という要支援の方とか、在宅でまだ要介護状態まではいかないような方たちの支援というところで、地域支援事業とかも担っている学生もいて、そういうところで、各分野、各専門性というところを、もう一回学び直ししたいというような相談も実は実際に来ている。そういう中では今の学生に対しても、介護福祉士プラス、私は認知症ケアに強い介護福祉士、私はレクリエーション活動、アクティビティに強い介護福祉士という強みを持ってほしいと私たちは思っているので、そういったものが伝わってきているのかなというところでは今回のこういった講義にも前向きに積極的に参加していくんだというところが見えた。そういう意味ではこういう講座は必要だと思う。

〇事前授業からアンケート、ミニテストまでの良かった点、改善点
動画、講義ともにわかりやすくて良かった。一方で、振り返りをしたい学生もいたので、資料ももらえると教員側でプラスアルファの補足にも使えたとのではないかと感じた。体験もしながら身になる、アロマに関しては利用者にそれを支援するという前に、自分たちも元気でないといいケアはできないという視点で教えていただいて、すごくセルフメディケーションではないが、そういったものに役立つので良かった。

実証の様子













令和 7 年度 文部科学省委託事業

「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業 」実証スケジュール

■実証実施日	令和 7 年 10 月 10 日（金）
■委託事業名	令和 7 年度 文部科学省委託事業 「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業 」
■事業名	これからの高齢社会に対応できる人材育成に必要な介護・医療分野の現場で利活用できる最新技能アップデートのための実践プログラム開発事業及びその有効性を確認する実証研究事業
調査名	「開発したアップデートプログラムの有効性を検証する実証調査」
調査目的	■調査目的 1）開発したプログラムについて、即現場で実践できるか検証する。 ■調査手法 ・受講後直後のインタビュー調査
■実証講座名	ナチュラルセラピーアロマセラピー講座、介護予防講座
■実証会場	学校法人 こおりやま東都学園　郡山健康科学専門学校
■受講人数	介護福祉学科 1・2 年生　 38 名
■実証担当者	内柴祐樹（介護予防コーディネーター） 八子久美子（介護予防分科会） 渡邉みどり（プログラム開発コーディネーター） 小林英一（事業責任者） 沢田秀樹（事務局）
■アシスタントティーチャー	介護予防：佐々木謙太朗 アロマセラピー：小松未来
■企業参加者	一般社団法人自然セラピスト協会

【当日のスケジュール】

10 月 10 日（金）	
12:00	学校法人 学校法人 こおりやま東都学園　郡山健康科学専門学校　到着
12:00～13:00	実証準備・教職員との打ち合わせ
13:00～14:30	介護予防講座
14:30～14:40	休憩
14:40～16:10	ナチュラルセラピーアロマセラピー講座
16:10～16:30	学生へのインタビュー
16:30～17:30	アシスタントティーチャーとの振り返り
17:30～18:00	明日の打ち合わせ

アシスタントティーチャーとの振り返り

【介護予防】

・PPT や進行表などがあり、授業が進めやすかった。自分でワークシートを作成し、習得してほしいものにできた。

・外国人留学生が半数以上を占めていたため、内容的に理解が難しいようではあったが実践では、難しい用語をかみ砕

いて説明するなどの工夫が必要だった。

【アロマセラピー】

・PPT や進行表などがあり、授業が進めやすかった。自分でワークシートを作成し、習得してほしいものにできた。

・外国人留学生に足しての言葉の使い方についてもう少しかみ砕いて説明できればよかったと思った。

・説明する内容が盛りだくさんだったが、伝えるべき内容が明確で時間のコントロールができた。

インタビュー

介護予防

介護福祉科 1 年生 2 名

〇講座を受けた感想

・実際現場でも使われている内容を学べたのでこれから現場実習などで活かしたい

・授業で介護予防の大切さは聞いていたが、重要さやどのようにやっていくかが学べてよかった

〇通常授業以外にこのような講座を受けたいと思うか

・授業では聞くが、具体的に学べる機会が少ないので受けたい

・基礎は授業で学ぶが仕事となると応用に結び付けるために積極的に取り入れるべき

〇卒業後の学びを学校が講座を提供したら来るか

・復習になるし、今の学びを知れるから参加したい

・就職したら学ぶ機会が減ると思うので、参加したい

アロマセラピー

介護福祉科 1 年生 3 名

〇講座を受けてみての感想

・アロマセラピーを知っていたが効果を知ることができた

・自分自身や利用者の方にもリラックス効果を与えられるのが良いと感じた

・自分の生活にも影響することをしってアロマを使っていきたいと思った

〇通常授業以外にこのような講座を受けたいと思うか

・普段の授業だけでは学べないことが学べるから受けたい

〇卒業後の学びを学校が講座を提供したら来るか

・仕事に役立つ内容であれば自分にとても良いと思う

・同僚や後輩にもお勧めできるから良いと思う

実証の様子













令和 7 年度 文部科学省委託事業

「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業 」実証スケジュール

■実証実施日	令和 7 年 10 月 11 日（土） 13:00～15:00
■委託事業名	令和 7 年度 文部科学省委託事業 「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業 」
■事業名	これからの高齢社会に対応できる人材育成に必要な介護・医療分野の現場で利活用できる最新技能アップデートのための実践プログラム開発事業及びその有効性を確認する実証研究事業
調査名	「開発したアップデートプログラムの有効性を検証する実証調査」
調査目的	■調査目的 1）開発したプログラムについて、即現場で実践できるか検証する。 ■調査手法 ・受講直後のインタビュー調査
■実証講座名	ナチュラルセラピーアロマセラピー講座
■実証会場	学校法人仙台北学園 仙台リハビリテーション専門学校
■受講人数	作業療法学科および卒業生 25 名
■実証担当者	櫻井 直人（ナチュラルセラピー分科会） 渡邉みどり（プログラム開発コーディネーター） 小林英一（事業責任者） 沢田秀樹（事務局）
■アシスタントティーチャー	八子久美子
■企業参加者	一般社団法人自然セラピスト協会

【当日のスケジュール】

10 月 11 日（土）	
9:00～10:30	事前打ち合わせ
10:30～12:00	仙台へ移動 ～昼食
12:00	学校法人 学校法人 こおりやま東都学園 郡山健康科学専門学校 到着
12:00～13:00	実証準備・教職員との打ち合わせ
13:00～14:30	ナチュラルセラピーアロマセラピー講座
14:30～14:50	学生へのインタビュー
15:00	実証終了

インタビュー

卒業生男性 A
卒業生女性 B

〇講座を受けてみた感想
A:もともと香りに興味があるので率直に楽しかった。
B:職場でアロマを活用しているが、やってみると楽しかったので現場でも使いたい

〇今までに学び直しの研修などを受けたことはありますか。
A,B:受けたことはない
〇このような研修があったら受けたいと思いますか。
A,B:受けたい。
B:今回は基礎編だったので、ぜひ次回は応用編を学びたい。そして現場でどんどん活用したい

〇どんな受講形態だったら受けたいと思いますか。
B:事前学習はオンラインで、実践は対面の方がわかりやすいので、今回のスタイルは受けやすい。
A:同じく事前学習はオンデマンドで、実践は対面。
B:今回のように学校や同窓会主催で集めてもらえると、先生からの連絡もうれしいし、同級生とも連絡して参加しようとなるので参加しやすかった
A:同窓生に久しぶりにグループ LINE で連絡を取って、久しぶりにみんなにも会えたので良かった

〇今回の研修は職場で活かせそうですか。
B:活かしていきたい。アロマを使ったことはあったが、香りを嗅ぐのみだったので、今回のように作って、使ってみるというのをやってみたい。
A:私は教員なので、授業に取り入れていきたい。実は取り入れようという話も出ていて私を中心に進めていきたい。

実証の様子













令和 7 年度 文部科学省委託事業

「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業 」

実証スケジュール

■実証実施日	令和 7 年 11 月 7 日（金） 13:00～18:00
■委託事業名	令和 7 年度 文部科学省委託事業 「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業 」
■事業名	これからの高齢社会に対応できる人材育成に必要な介護・医療分野の現場で利活用できる最新技能アップデートのための実践プログラム開発事業及びその有効性を確認する実証研究事業
調査名	「開発したアップデートプログラムの有効性を検証する実証調査」
調査目的	■調査目的 1）開発したプログラムについて、即現場で実践できるか検証する。 ■調査手法 ・受講後直後のインタビュー調査
■実証講座名	ナチュラルセラピーアロマセラピー講座、介護予防講座
■実証会場	学校法人明星学園 関東福祉専門学校様
■受講人数	介 護 予 防 ：介護福祉学科 1 年生 50 名 アロマセラピー ：介護福祉学科 2 年生 33 名
■実証担当者	内柴祐樹（介護予防コーディネーター） 角田大騎（介護予防分科会） 櫻井直人（アロマセラピー分科会） 佐々木健太朗（介護予防アシスタントティーチャー）講師 沢田秀樹（事務局） 渡邉みどり（プログラム開発コーディネーター）
■企業参加者	一般社団法人自然セラピスト協会

【当日のスケジュール】

11 月 7 日（金）	
12:30	学校法人明星学園 関東福祉専門学校様到着
12:00～13:00	実証準備・教職員との打ち合わせ
13:00～14:30	介護予防講座・ アロマセラピー講座同時進行
14:30～14:40	休憩
14:40～15:00	学生へのインタビュー
15:30	実証終了
15:30～17:15	関東福祉専門学校から、学校法人敬心学園 日本福祉教育専門学校に移動
17:15～18:00	打ち合わせ、準備
18:00	終了

インタビュー

【介護予防】

教員インタビュー

〇講座の感想

全体を通して楽しく受講できたことが印象的だった。講義の構成が工夫されており、動画の活用や 30 分程度で実技に移る流れがちょうど良く、集中して参加することができた。特に、留学生を含めた多様なメンバーで実践的に学べた点が非常に良かったです。

実際に自分たちで体を動かしながら学ぶことで理解が深まり、高齢者に運動を指導する際の注意点を具体的に考えるきっかけにもなった。体験を通して「自分が感じた負荷」や「安全に行う工夫」を考えられた点が大きな学びとなった。

〇今後授業の中で取り入れてほしい講座だったか

授業に取り入れたいと感じた。

これまでも地域支援の一環として介護予防に触れる機会はあったが、今回のように具体的な実技や体験を通して学ぶ形式は、学生の理解促進に有効だと感じた。

また、「転倒予防」など分かっているようで曖昧なテーマについて、どのような基準で安全を判断するのか、どの程度の状態を危険と捉えるのかなど、実践的に考える機会を得られた点が良かった。

学生にとっても、普段とは異なる講師から学ぶことで新鮮さがあり、興味を持って取り組める内容だと感じた。

〇講座の改善点や追加の希望はあるか

・介護予防の実際の事業内容の紹介。要支援 1・2 の方を対象に、実際にどのようなサービスが提供されているのか、具体的な事例を交えて学べると理解が深まる。

・要介護・要支援の基準と変化の理解。「元気な状態」から「要支援」に至るまでの基準や変化を、数値（例：筋力・体重など）や症例を通して学べると、学生にとって分かりやすい。

・症例を用いた学習。実際の利用者の事例をもとに、どのような経過で支援が必要になったのかを検討することで、より現場に即した理解につながる。

学生インタビュー

〇講座を受けた感想

A：介護予防は堅苦しいイメージがあったが、楽しく取り組める内容だった。

B：介護予防という言葉は学校で耳にすることはあったが、実際にやってみて具体的に知ることができた講座だった。

〇事前動画についての良かった点、改善点

A：日本人でも難しい言葉が多かった。

B：動画の中で専門用語が多かったので、簡単な言葉で言い直してもらえるとより理解しやすいと感じた。

〇講座の良かった点、改善点

A：安全にやるための方法を具体的に教えてもらえたのが良かった

B：わかりやすかった。留学生には少し難しかったかもしれない。

〇今後授業の中で取り入れてほしい講座だったか

A：取り入れてほしい。体験してわかることもたくさんある

B：取り入れてほしい。介護予防は言葉は知っていても何をするかよくわからない。それが良くわかる講座だったから。

【アロマセラピー】

教員インタビュー

〇講座の感想

・手に触れる効果、そこに香りの効果も学ぶことができてよかった。

〇今後授業の中で取り入れてほしい講座だったか

・手浴の授業はあったが、香りを取り入れるということはなかったので、ぜひやってみたい。

〇講座の改善点や追加の希望はあるか

・実際の現場では入浴が多いので、お風呂での香りに触れる体験があるとより幅が広がるのではないか。

実証の様子













令和 7 年度 文部科学省委託事業

「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業 」

実証報告書

■実証実施日	令和 7 年 11 月 8 日（土）・9 日（日）（マネジメント講座 11 月 13 日・12 月 25 日）
■委託事業名	令和 7 年度 文部科学省委託事業 「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業 」
■事業名	これからの高齢社会に対応できる人材育成に必要な介護・医療分野の現場で利活用できる最新技能アップデートのための実践プログラム開発事業及びその有効性を確認する実証研究事業
調査名	「開発したアップデートプログラムの有効性を検証する実証調査」
調査目的	■調査目的 1）開発したプログラムについて、即現場で実践できるか検証する。 特に、ミュージックセラピーの効果について利用者への検証を行う。 ■調査手法 ・受講後直後のインタビュー調査
■実証講座名	【11 月 8 日】 介護予防講座 マネジメント講座 多様な人とのかかわり外国人編講座 多様な人とのかかわり障がい者編講座 ナチュラルセラピーアロマセラピー講座 【11 月 9 日】 排泄ケア講座 外出支援講座 介護 ICT/DX 講座
■実証会場	学校法人 敬心学園 日本福祉教育専門学校
■受講人数	【11 月 8 日】 介護予防講座 45 名 マネジメント講座 7 名（11 月 13 日合算） 多様な人とのかかわり外国人編講座 36 名 多様な人とのかかわり障がい者編講座 1 名 ナチュラルセラピーアロマセラピー講座 20 名 【11 月 9 日】 排泄ケア講座 3名 外出支援講座 3名 介護 ICT/DX 講座 1名
【11 月 8 日】	
■実証担当者	角田 大騎 （介護予防分科会） 講師 八子久美子 （介護予防分科会） 内田 和宏 （マネジメント分科会） 講師 菊地 克彦 （マネジメント分科会） 講師 朝野 愛子 （マネジメント分科会） 講師 太原 靖一郎（マネジメント分科会） 講師 遠藤 康子 （ナチュラルセラピーアロマセラピー講座） 鳥居健一 （多様な人とのかかわり～外国人編） 講師 オンライン 吉田あい （多様な人とのかかわり～外国人編） 講師 オンライン 櫻井 直人 （多様な人とのかかわり~障がい者編） 吉田 智哉 （実証委員会） 渡邉みどり（プログラム開発コーディネーター）

	小林英一（事業責任者） 沢田秀樹（事務局）
■アシスタントティーチャー	介護予防：佐々木謙太朗
■企業参加者	一般社団法人自然セラピスト協会
11 月 9 日（日）	
■実証担当者	真鍋　圭彰　（外出支援分科会）講師
	渡邉みどり（プログラム開発コーディネーター） 沢田秀樹（事務局）
■企業参加者	日本トラベルヘルパー協会　アシスタント 株式会社善光総合研究所　講師 株式会社　ユニ・チャーム　講師
11 月 13 日（木）	
■実証担当者	内田　和宏　（マネジメント分科会）　講師 菊地　克彦　（マネジメント分科会）　講師 朝野　愛子　（マネジメント分科会）　講師 太原　靖一郎（マネジメント分科会）　講師
	沢田秀樹（事務局）
12 月 25 日（木）	
■実証担当者	菊地　克彦　（マネジメント分科会）　講師 朝野　愛子　（マネジメント分科会）　講師 太原　靖一郎（マネジメント分科会）　講師
	沢田秀樹（事務局）

【当日のスケジュール】

11 月 7 日（金）	
17:15	関東福祉専門学校から、学校法人敬心学園 日本福祉教育専門学校に到着
17:15～18:00	打ち合わせ、準備
18:00	終了
11 月 8 日（土）	
8:30～10:00	打ち合わせ、準備
10:00～12:00	実証　＊マネジメントは 13:00 迄実施
12:00～13:00	学生へのインタビュー/昼食
13:00～15:00	実証
15:00～16:00	学生へのインタビュー
16:00～17:30	片付け・終了
11 月 9 日（日）	
8:30～10:00	打ち合わせ、準備
10:00～12:00	実証
12:00～13:00	学生へのインタビュー/昼食
13:00～15:00	実証
15:00～16:00	学生へのインタビュー
16:00～17:30	片付け・終了
11 月 13 日（木）	
13:30～14:00	打ち合わせ、準備
14:00～17:00	マネジメント講座実証
17:00～17:30	片付け・終了
12 月 25 日（木）	
15:30～16:00	打ち合わせ、準備
16:00～17:00	マネジメント講座実証
17:00～17:30	片付け・終了

インタビュー

介護予防

①講座を受けた感想（勉強になったことなど）

A：先生の説明はとても熱心で、雰囲気も明るく、とてもわかりやすかった。

B：とても勉強になった。内容も分かりやすくて面白かった。

C：今回の授業を通して、利用者さんが転倒することは要介護状態になる大きな要因であることが分かった。今後、介護職員として利用者さんに積極的に声をかけ、安心できる生活環境をつくっていきたい。

D：利用者さんが転びやすくなる要因の一つに「薬を 5 個以上飲んでいる場合」があることを知った。さらに、今日のように測定や練習を行うことで、転倒リスクを把握できるということも学んだ。

E：今後、学校や実習先、将来の仕事の中でも、この知識やスキルを活かして、利用者が安全・快適に過ごせるよう支援していきたい。

②事前学習について（良かった点・改善点）

A：介助のやり方をもっと見たい。どうやって歩かせるのかなど、もう少し詳しく知りたい。

B：長さもちょうどいいぐらいでそこまで大変ではなかった。

C：動画は簡単そうに思えたが、実際は力が必要だったりと難しいところも多かった。

D：同じく動画は簡単そうに思ったが、実際やってみると違った。

E：動画だけではわからなかったところが多く、実際に体験して理解できた。

③対面授業について（良かった点・改善点）

A：対面のほうが理解しやすい。動画だけでは分からないことも、実際に先生に会って教えてもらうとよく分かった。

B：（留学生も多いクラスなので）日本語の専門用語が少し難しい人もいると思う。もう少し分かりやすい言葉で説明してもらえると良い。

（改善点やもう少し知りたかった事は）

C：「利用者さんが 5 種類以上の薬を飲むと転倒リスクが上がる」と教わったが、それは 1 日に飲む薬の種類のことなのか、1 回で飲む薬の種類なのか気になった。

D：実際にやってみると、動作の中でも特に「回るとき」に転びやすいことが分かった。

E：チェック動作を行う時間帯によっても体の状態が違うと思う。朝や夜では筋力や集中力も変わるため、その違いも基準として教えてもらえるとより良いと思った。

④今後授業に取り入れてほしい講座だったか

A：取り入れてほしい。

B：とても勉強になった。学校では教科書が中心で少し実際との違いがあるが、今回の講座は現場の先生方の話もあり、リアリティがあって分かりやすかった。

C：はい。授業では話を聞くだけではなく、実際にやってみることが大切。実技を通して体で覚えることが安全につながると感じた。

D：普段の授業では教科書から知識を得るが、こうした実技の授業が増えると、より理解しやすくなる。読むだけよりも、体験した方が記憶に残る。

E：今後、実際の施設で支援を行う際には、より実践的な練習が必要だと感じた。学校で学んだ知識を現場で活かして、正しいやり方や声かけができるようになりたい。利用者さんが安心して生活できるよう支援していきたい。

マネジメント講座

①講座を受けた感想（③対面授業について）

・福祉系現場管理職向けのリスキリングという位置づけの感想として、「マネジメントの基本」が難しかった。頭の中で理解して、自分で翻訳しなければならないのは、1年目～3年目の人にとっては難しいのではないか。自分の現場とのイメ

ージが付かないと感じた。マネジメントのエリアについて、組織構造を含めたマネジメントだとイメージが付かないと思った。1年目～3年目までの管理者の職務権限内の内容であればイメージが付きやすいのではないか。
・朝野先生の目標管理コースと太原先生のコミュニケーションコースを実践できる場面の演習を実践させると良いと思った。講義で考えて、講義内でフィードバックをもらうことができて、自分の仕事に持って帰ることができる建付けがよいのではないか。コミュニケーションをテーマに、対面で学んだことをそのままそっくり持って帰ることができると良いと思う。1年目～3年目のリーダーは部下とのコミュニケーションに最も悩んでいる。
・コミュニケーションをテーマにして行っていけばよいのではないか。「人間関係」を構築する目標管理にしたらよいのではないか。
②事前学習について（良かった点・改善点）
・試験の構成として、適切・不適切があると難しい。理解していることを確認するための試験なのであれば、わかりやすい文章や設問で行った方がよいのではないか。テストのフィードバック、解説が必要だと思う。大学を出た学生は皆無に等しいので、まずは文章をわかりやすくしたほうがよい。
・動画のみでテキストがないので、わかりづらい。配布資料があったほうがよい。学んだものを振り返るものがないのはとてもきつい。
・実践を見込んだ教材を作成する必要がある。細かいポイントなどがワークシートにもあったほうが理解しやすい。
④今後授業に取り入れてほしい講座だったか
・各経験年数に合わせた課題に応じたテーマでプログラムを増やしていってほしい。

多様な人とのかかわり～外国人編～講座

①講座を受けた感想
A：私も外国人で言葉の壁もあり、価値観や文化の違いはある。私の国のいいところも日本のみなさんに伝えたいと思った。
B：今回の講座で様々なシーンが実際にあることがわかったのは良かった。今外国人の良くないニュースを耳にするが勝手な思いや間違った知識にとらわれることも多いので、今回の講座を受けて改めて感じた。
②事前学習について（良かった点・改善点）
A：事前動画と当日の授業が半分くらい同じ内容だった。
B：EPA や様々な制度があるのを知らない日本人が多いので、私自身も基礎知識として学べたのは良かった。
③当日の授業について（良かった点・改善点）
B：動画のところは流しているだけで、もう少し補足説明が欲しかった。クイズやグループワークで参加型の授業があっても良かった。
④今後授業に取り入れてほしい講座、どんなこと授業を受けてみたいか。
A：現場で学んでみたい。
B：現場にいかないとわからないこともある。実際に働いている人の話を聞いてみたい。

ナチュラルセラピー（アロマセラピー）講座

①講座を受けた感想
A：とても勉強になった。自分の手のマッサージを通して効果も実感できた。
B：もともと興味があって受けてみたかったので参加できてよかった。先生の講義もわかりやすかった。
C：授業を受けて、直接手にアロマオイルを塗って体験できたので理解できた。
②事前学習について（良かった点・改善点）
A：オンデマンドなので好きな時間にできたこと、事前に学べたので対面授業もすんなり学べた点は良かった。改善してほしい点は LMS で毎回パスワードを入れるのが面倒だった。
B：事前に知識を入れられたのは良かった。改善点は LMS で毎回パスワード入力が大変。アンケートも毎回メールアドレスを入力するのも大変だった。

C：事前学習で少しわかった状態で当日授業を受けられたのが良かった。

③対面授業について（良かった点・改善点）

A：楽しかった。もっと学びたいと思えた。改善点はなし。

B：良い講座だった。自宅に帰ってから、介護現場にいって活用できる内容だった。取り入れるハードルが下がった講座だった。改善点はなし。

C：来てよかった。改善点はなし。

④今後授業に取り入れてほしい講座だったか

A：取り入れてほしい。興味ない人でもこんなによいものなのかとわかる内容だから

B：取り入れてほしい。

C：ぜひ取り入れてほしい。

排泄ケア講座

①講座を受けた感想

A：とても勉強になった。実習以来の排泄ケアだったが、復習になってよかった。

B：上手なオムツの選び方、当て方などを学べて有意義だった。

C：まだ授業でも学んでいないが、当て方の大切さを学べてよかった。

②事前学習や当日研修についてどんな研修や学習が良いか。

A：事前学習はあったほうがいい。事前に動画を見て学んだ上で当日学べた方が良い。

B：初めて研修を受ける内容では事前学習があったほうが良い。対面でわかることも多いので研修は対面が良い。

C：実際は対面でやってみないとわからないので対面が良い。

外出支援講座

①講座を受けた感想

A：車いすで外出する際の注意点がわかった。小さな段差、駅のホームでの対応など学べたのが良かった。車いすだから入れるか

B：車いすの使い方や乗る側の気持ちがわかった。周りに人がいないさみしさを知ることができた。

C：車いすを乗る側の体験ができてよかった。横断歩道や段差も怖さを知ることができてよかった。

②事前学習について（良かった点・改善点）

A：あまり時間が取れなかったので、テキストがまとまっていると良かった。

B：パワポでまとまったものなどがあればよかった。

C：テキスト到着がぎりぎりだったので、最後までできなかった。期間に合わせてできるボリュームだと良い。

③全体の改善点

B：当日の流れがわかりにくかった。

介護 ICT/DX 講座

①講座を受けた感想

・ICT/DX が苦手だったので、講座を申し込んだ。どんな風に導入するかを学べたので、実践していきたい。

②今回の講座を受けて活かせそうなことはあるか

・見守りの機器を導入したところでまだまだなのでみんなで考えていきたい

③どんな講座なら受けたいと思うか。（形式や会社の研修など）

・オンライン型の方が参加はしやすいが、対面も他の施設の方との交流ができるので良い。対面の講座は東京開催が多いので地方開催も増やしてほしい。

・学びたい内容なら自分の休みの日でも参加したい。

実証の様子

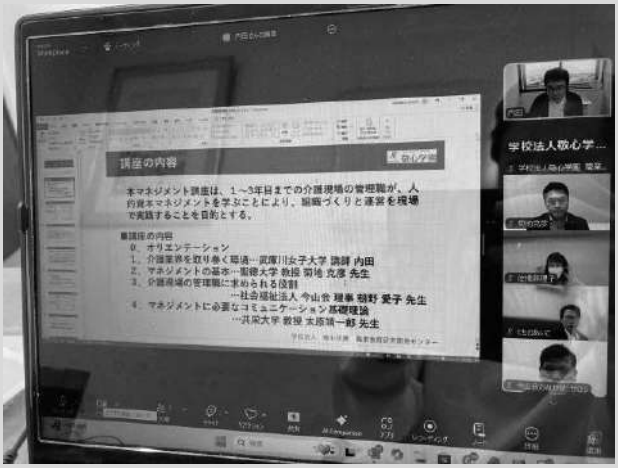
介護予防講座





マネジメント講座





多様な人とのかかわり外国人編講座





ナチュラルセラピーアロマセラピー講座





排泄ケア講座





外出支援講座





介護 ICT/DX 講座





令和 7 年度 文部科学省委託事業

「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業 」

実証報告書

■実証実施日	令和 7 年 11 月 14 日（金）13:00～17:00
■委託事業名	令和 7 年度 文部科学省委託事業 「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業 」
■事業名	これからの高齢社会に対応できる人材育成に必要な介護・医療分野の現場で利活用できる最新技能アップデートのための実践プログラム開発事業及びその有効性を確認する実証研究事業
調査名	「開発したアップデートプログラムの有効性を検証する実証調査」
調査目的	■調査目的 1）開発したプログラムについて、即現場で実践できるか検証する。 ■調査手法 ・受講後直後のインタビュー調査
■実証講座名	ナチュラルセラピーアロマセラピー講座 介護予防講座
■実証会場	学校法人穴吹学園　穴吹パティシエ福祉カレッジ専門学校様
■受講人数	介護予防講座・アロマセラピー講座　　介護福祉士科 1 年生（51 名）
■実証担当者	伊藤健次（介護予防分科会） 堀内有美（アロマアシスタントティーチャー）講師 金井 太佑（介護予防アシスタントティーチャー）講師 小林英一（事業責任者） 沢田秀樹（事務局） 渡邉みどり（プログラム開発コーディネーター）

【当日のスケジュール】

11 月 14 日（金）	
12:00	学校法人穴吹学園　穴吹パティシエ福祉カレッジ専門学校様到着
12:00～13:00	実証準備・教職員との打ち合わせ
13:00～14:30	アロマセラピー講座
14:30～14:40	休憩
14:40～16:10	介護予防講座
16:10～16:30	教員・学生へのインタビュー
16:30～17:00	片付け
17:00	実証終了
11 月 15 日（土）	
9:30～11:00	伊藤　穴吹学園開催のイベントでアロマブースを見学
11:00	終了

インタビュー

【介護予防】

〇講座を受けた感想

・どこが危ないかを学べたのが良かった。

〇事前動画についての良かった点、改善点

・全体的に専門用語が多くて難しかった。

・例えば、字幕に色がついていて強調されていたりするとポイントがわかって良いかもしれない。

・動画の長さや本数はちょうど良い。

〇講座の良かった点、改善点

・立ち上がりテストなど自分の身体で体験できたことが良かった。

〇今後、授業の中で取り入れてほしい講座

・移乗や排泄ケアなどの講座を学びたい。AI や DX などテクノロジーを使った介護なども学んでみたい。

【アロマセラピー】

〇講座を受けた感想

・みんなでアロマの香りを選んで、配合してセルフハンドケアをできて楽しかった。

〇事前動画についての良かった点、改善点

・利用者さんに役に立つことが学べてよかった。

・内容が難しかったので、留学生でもわかりやすいような言葉や字幕があると良い。

〇講座の良かった点、改善点

・グループみんなで取り組めたのが良かった。

〇今後、授業の中で取り入れてほしい講座

・アロマテラピーをもっと深く勉強したい。

・レクリエーションを作る方法が学べる講座などがあると良い。

実証の様子













令和 7 年度 文部科学省委託事業

「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業 」

実証報告書

■実証実施日	令和 7 年 11 月 21 日（金） 13:30～17:00
■委託事業名	令和 7 年度 文部科学省委託事業 「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業 」
■事業名	これからの高齢社会に対応できる人材育成に必要な介護・医療分野の現場で利活用できる最新技能アップデートのための実践プログラム開発事業及びその有効性を確認する実証研究事業
調査名	「開発したアップデートプログラムの有効性を検証する実証調査」
調査目的	■調査目的 1）開発したプログラムについて、即現場で実践できるか検証する。 ■調査手法 ・受講後直後のインタビュー調査
■実証講座名	ナチュラルセラピーアロマセラピー講座
■実証会場	学校法人国際志学園 九州医療スポーツ専門学校様
■受講人数	介護福祉学科 1 年 14 名 介護福祉学科 2 年 11 名 作業療法学科 3 年 19 名
■実証担当者	光星きらら（アロマセラピー分科会・アシスタントティーチャー） 講師 渡邉みどり（プログラム開発コーディネーター）
■企業参加者	一般社団法人自然セラピスト協会

【当日のスケジュール】

11 月 21 日（金）	
9:30	光星事前訪問 学校法人国際志学園 九州医療スポーツ専門学校様到着
10:00～12:00	事前学習実施
12:00	学校法人国際志学園 九州医療スポーツ専門学校様到着
12:00～13:30	実証準備・教職員との打ち合わせ
13:30～15:00	ナチュラルセラピーアロマセラピー講座
15:00～16:30	学生へのインタビュー
16:30～17:00	片付け・終了

インタビュー

〇講座を受けた感想

A（作業療法学科 3 年）：アロマを学べて、他学科との交流もできてよかった。

B（作業療法学科 3 年）：もともと香りが好きで、香りの効果も学べたのがすごくよかった。

C（介護学科 2 年）：日本の学生との交流もできてよかった。

D（介護学科 1 年）：眠れないことがあったが、今回アロマを学んで安眠の効果のある香りを使ってみたいと思った。

〇事前動画についての良かった点、改善点

A（作業療法学科 3 年）：わかりやすい動画だった。

B（作業療法学科 3 年）：わかりやすかった。

C（介護学科 2 年）：わかりやすかった。（留学生の私でも）難しいとは感じなかった。

D（介護学科 1 年）：わかりやすかった。アロマの歴史や新しい言葉も学べてよかった。

〇講座の良かった点、改善点

A（作業療法学科 3 年）：他学科との交流が良かった。

B（作業療法学科 3 年）：講師の先生の説明がわかりやすかった。

C（介護学科 2 年）：講師がわからないところも近くまできて説明してくれてよかった。

D（介護学科 1 年）：勉強、勉強という感じではなくて、自分たちで香りを決めたり調合したりするのが楽しかった。

〇今後、授業の中で取り入れてほしい講座

A（作業療法学科 3 年）：アロマのほかの香りや効果をもっと深掘りして学びたい。

B（作業療法学科 3 年）：アロマは実際の社会でどんなところで使われているかなども学びたい。

C（介護学科 2 年）：アロマをもっと深掘りしたい。

D（介護学科 1 年）：介護現場でもみほぐしが大事なのでアロマを使って利用者さんの痛み緩和に使えるアロマともみほぐしを学びたい。

実証の様子













令和 7 年度 文部科学省委託事業

「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業 」実証スケジュール

■実証実施日	令和 7 年 11 月 26 日（水）
■委託事業名	令和 7 年度 文部科学省委託事業 「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業 」
■事業名	これからの高齢社会に対応できる人材育成に必要な介護・医療分野の現場で利活用できる最新技能アップデートのための実践プログラム開発事業及びその有効性を確認する実証研究事業
調査名	「開発したアップデートプログラムの有効性を検証する実証調査」
調査目的	■調査目的 1）開発したプログラムについて、即現場で実践できるか検証する。 ■調査手法 ・受講後直後のアンケート調査
■実証講座名	多様な人とのかかわり方外国人編
■実証会場	佐倉市役所社会福祉センター　地下研修室
■受講人数	19 名
■実証担当者	鳥居賢一（多様な人とのかかわり方分科会） 吉田あい（多様な人とのかかわり方分科会） 沢田秀樹（事務局）

【当日のスケジュール】

11 月 26 日（水）	
13:00	佐倉市役所到着
13:00～13:30	実証準備・担当者と打ち合わせ
13:30～15:30	多様な人とのかかわり方外国人編講座
15:30	実証終了
15:30～16:00	片付け・撤収

実証の様子













令和 7 年度 文部科学省委託事業

「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業 」実証スケジュール

■実証実施日	令和 7 年 11 月 28 日（金）・令和 7 年 12 月 26 日（金）
■委託事業名	令和 7 年度 文部科学省委託事業 「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業 」
■事業名	これからの高齢社会に対応できる人材育成に必要な介護・医療分野の現場で利活用できる最新技能アップデートのための実践プログラム開発事業及びその有効性を確認する実証研究事業
調査名	「開発したアップデートプログラムの有効性を検証する実証調査」
調査目的	■調査目的 1）開発したプログラムについて、即現場で実践できるか検証する。 ■調査手法 ・受講後直後のアンケート・インタビュー調査
■実証講座名	マネジメント講座
■実証会場	株式会社リエイ
■受講人数	62 名
11 月 28 日（金）	
■実証担当者	菊地　克彦　（マネジメント分科会） 講師 朝野　愛子　（マネジメント分科会） 講師 沢田秀樹（事務局）
12 月 26 日（金）	
■実証担当者	内田　和宏　（マネジメント分科会） 講師 太原　靖一郎（マネジメント分科会） 講師 沢田秀樹（事務局）

【当日のスケジュール】

11 月 28 日（金）	
13:30～13:50	準備、ZOOM 接続確認、打ち合わせ
13:50～14:00	入室許可・出席者確認
14:00～16:00	マネジメント講座 （講師：菊地 40 分・朝野 60 分）
16:00～16:15	事後アンケート
16:15～16:30	振り返り・実証終了
12 月 26 日（金）	
13:30～13:50	準備、ZOOM 接続確認、打ち合わせ
13:50～14:00	入室許可・出席者確認
14:00～16:00	マネジメント講座（講師：太原 90 分）
16:00～16:15	事後アンケート
16:15～16:30	インタビュー・実証終了

インタビュー

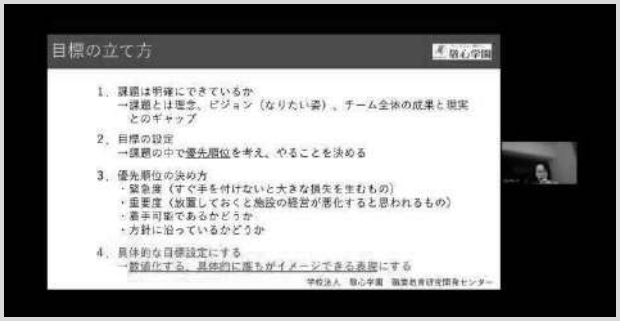
①講座を受けての感想
A:動画を先に見て、普段の業務を振り返りながら受けられたのは良かった。
B:事前学習を受けたことで一定時間準備が必要というのがわかった。時間を作るというのが大変だったが、得るものは多かった。
②事前学習についての感想
A:1 つの動画は小分けになっていたので良かった。しかし、量は多かった。
B:同じく動画が小分けで良かった。今回は講座が 2 回に分かれていたのでどこまで見たら良いのかがわかりにくく、1 回目で全部見てしまった。1 本あたりの時間は問題なく集中できる時間だと感じた。動画の本数は多い。
③当日の講座についての良かった点・改善点
A:今回のように 2 時間×2 回というのはちょうどいい。内容はわかりやすかった。全体はオンラインだったが、大阪は対面でみんなで集まれたのでよかった。
B:昨年対面でも受けたことがある。事前動画を学んでから講座を受ける形式は理解しながら進められるし、わからなかったところは当日理解できるのでとても良かった。内容が昨年と同じだと感じた。忘れていることもあったので復習になった。
④今後このような講座があったら受けたいか。どういう講座なら受けたい。
A:今回の形式はとても良い。自分で弱いところが学べる講座を選べるというもあると良い。今回は会社の人だけの研修だったが、外部の意見も聞くと刺激になるので良い。
B:オンデマンドは色々テーマが分かれてて、自分で学びたい講座を選べるというのがあっても良い。講座の内容、テーマは良かった。マネジメント・コミュニケーション。目標の立て方も良かった。そして、実際にやっていて成果がでたのか確認するのというのも良かった。マネジメント講座以外では介護予防・ICT/DX に興味がある。

研修とりまとめの担当者にも④の質問をした。
C:2 人からも上がっていたがオンデマンドの事前学習で学んで、講座を受けて、そして修正していくという今回の形式は良かった。特にオンデマンドは個別に自由に時間で選べるのは良い。
今回は会社内での研修だったが、他社も含めて意見交換もあると良い。
研修費用は 1 回あたり 10 万円～15 万円くらいが限度。
研修時間は今回の規模なら月 1 回会議の後 2 時間であれば集めやすい。
1 日研修や 3 時間以上の研修も時間を取ること自体は可能。
昨年と同じで短縮バージョンの内容は良かったと感じた。
通常バージョンの対面で、ロールプレイがあるというのは力がついて良い。

実証の様子




令和７年度
「専門職業人材の最新技能アップデートのための
専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業」
『マネジメントの基本』
聖徳大学（人材組織マネジメント、キャリア論）
敬心学園職業教育研究開発センター
猪地克彦


目標の立て方
敬心学園
1．課題は明確にできているか
→課題とは理念、ビジョン（なりたい姿）、チーム全体の成果と現実とのギャップ
2．目標の設定
→課題の中で優先順位を考え、やることを決める
3．優先順位の決め方
・緊急度（すぐ手を付けないと大きな損失を生むもの）
・重要度（放置しておくと施設の経営が悪化すると思われるもの）
・着手可能であるかどうか
・方針に沿っているかどうか
4．具体的な目標設定にする
→数値化する、具体的に誰もがイメージできる表現にする
学校法人　敬心学園　職業教育研究開発センター


部下とのコミュニケーション
～面談を活かした信頼関係の構築～





令和 7 年度 文部科学省委託事業

「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業 」実証スケジュール

■実証実施日	令和 7 年 12 月 1 日(月)13:00～17:00 / 12 月 2 日（火）9:00～13:00
■委託事業名	令和 7 年度 文部科学省委託事業 「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業 」
■事業名	これからの高齢社会に対応できる人材育成に必要な介護・医療分野の現場で利活用できる最新技能アップデートのための実践プログラム開発事業及びその有効性を確認する実証研究事業
調査名	「開発したアップデートプログラムの有効性を検証する実証調査」
調査目的	■調査目的 1）開発したプログラムについて、即現場で実践できるか検証する。 ■調査手法 ・受講後直後のインタビュー調査
■実証講座名	ナチュラルセラピーアロマセラピー講座、介護予防講座
■実証会場	学校法人西野学園 札幌リハビリテーション専門学校様
■受講人数	作業療法学科 14 名
■実証担当者	八子久美子（介護予防分科会兼アロマセラピーアシスタントティーチャー） 小林英一（事業責任者） 沢田秀樹（事務局）
■アシスタントティーチャー	介護予防：宮口先生（札幌リハビリテーション専門学校）

【当日のスケジュール】

12 月 1 日(月)	
12:00	学校法人西野学園 札幌リハビリテーション専門学校様到着
12:00～13:00	実証準備・教職員との打ち合わせ
13:00～14:30	介護予防講座 ＊休憩含む
14:40～16:10	介護予防講座 ＊休憩含む
16:10～16:30	学生へのインタビュー
16:30～16:50	アシスタントティーチャーとの振り返り
16:50～17:00	明日の打ち合わせ・片付け・実証終了
12 月 2 日（火）	
8:30	学校法人西野学園 札幌リハビリテーション専門学校様到着
8:30～9:00	実証準備・教職員との打ち合わせ
9:00～10:30	ナチュラルセラピーアロマセラピー講座 ＊休憩含む
10:40～12:10	ナチュラルセラピーアロマセラピー講座 ＊休憩含む
12:10～12:30	学生へのインタビュー
12:30～12:50	アシスタントティーチャーとの振り返り
12:50～13:00	片付け・実証終了

アシスタントティーチャーとの振り返り

【介護予防】

①講座の感想

基本的な内容は授業でやるが、復習の機会になった。PT の領域の内容も学べるいい機会となった。

緊張していたが、どんな話やどんな展開かというのが均一化されるようなスライドや動画なのでやりきることができた。

事前動画学習でどういうことを行うか把握した上で行う授業形式だったので、グループワークでの発言が良く出たので、良かった。普段は予習をする時間がないなかなので、事前学習の大切さも感じた。

②授業の中に取り入れたいか

【予防と疾病】という授業を担当。予防の観点を持つことが大事だと授業内で話したところだった。病気になった人にリハビリをするというイメージが多いが、健康を続けることが大事なので、予防の観点をもって授業をしていきたい。

③取り入れるとしたらこういった内容を追加してほしいという要望はあるか

認知面の視点も入れてほしい。認知の低下も作業療法士として予防の観点をもってかかわれる。疾病予防、感染予防の観点の予防のプログラムもあると良い。

【ナチュラルセラピー（アロマセラピー）】

①講座の感想

もともと興味のあった分野だったので、広められるうれしさがあった。自分自身も楽しくできた。今回 2 回目のアシスタントティーチャーなので段取りもわかってきたのでやりやすかった。

②授業の中に取り入れたいか

すでに取り入れている。介護なら介護の勉強だと広がらない。「生活を支える」プロフェッショナルだが、＋αがあると利用者さんや患者さんにとってもプラスになるし、私たちもやりがいをもって仕事ができる。

③取り入れるとしたらこういった内容を追加してほしいという要望はあるか

現場に即したアロマの展開ができると良い。学生には今回のような基本、現場に出ている人には次の段階として、利用者さんや患者さんの症状に合わせた内容で、例えば元気のない人を元気にする、認知機能をよくするアロマなど、フォローアップ講座のようなかたちで続編もあるとなお良い。あとは手軽な値段でできるとなお良い。

インタビュー

介護予防

①講座を受けた感想

A:受けてよかったなというのが率直な意見。イメージがしやすかったり、自分が身をもって体験できるような形だったので、もっと役に立ちたいなという気持ちが生まれた。

B:自分たちで具体的なレクリエーションを作るということがあまりなかったので、とても貴重な体験になった。また、フレイルについて知る機会もこれまであまりなかったので、この授業を通して理解できたことがよかった。

C:全体を通して、普段の授業では深く掘り下げない部分にフォーカスし、まとまった時間を確保していただいたことで、それに対する意欲やモチベーションが高まり、「こういうふうに進めればいいんだな」という具体的なイメージをしっかり持てたことが、とてもよかった。

②事前学習について(良かった点・改善点)

A:事前に講座を受けていたことで、「このあと自分が何をするのか」「何に取り組むべきか」を事前に理解して臨めたことは大きかった。

B:事前学習の動画では、項目ごとに分かれていたことで要点が分かりやすく、メモにもまとめやすかった。

C:動画は一つひとつ区切られているので、「次は何をやるのか」という要点を理解した上で見進めることができ、その点が非常に伝わりやすかった。また、何度でも見直せることが動画のメリットだと感じた。早戻しをしてゆっくり聞き直したり、必要な部分を飛ばしたりといった柔軟な視聴ができる点がとても良かった。

③対面授業について(良かった点・改善点)

A:実体験として学ぶ機会が得られたことを嬉しく感じたし、「自分が今何をすべきなのか」「何を学ばなければいけないのか」を改めて考え直すきっかけになった。

B:自分たちで評価なども行ったことで、自分自身の能力を知ることができ、それと比較して高齢者の身体的機能がどの程度不足しているかを具体的に理解できた。身をもって体験できた、とても良い機会だった。

C:普段のグループワークよりも人数が多かったため、自分一人では出ないような意見を多く出し合うことができた。普段であれば「みんなで考えて終わり」になるところを、先生から的確なアドバイスもいただけたことで、より具体的なイメージにつながった。

④今後授業に取り入れてほしい講座だったか

A:レクリエーションとして実際に体を動かし、アイデアを形にしていく過程で、自分たちの意識にも変化があり、「楽しい勉強の仕方とはこういうことなのかな」と感じた。

B:授業に取り入れることで、転倒リスクや介護に対する意識も変わるため、良かった。実習では介護施設に行くこともあるので、授業だけでは得られなかった理解が深まり、とても役に立った。

C:OT では機能面から転倒予防などを考えていますが、それが介護予防の認識につながることで、介護福祉士や一般のご家族に教える際にも、教育的な観点を持って伝えることができる。単に「転倒を予防する」だけでなく、「介護を予防する」という意味も含めて説明できるようになるので、今後も介護予防に関する授業を取り入れていくべきだと感じた。

ナチュラルセラピー(アロマセラピー)講座

①講座を受けた感想

A:最初は「どういう感じなのかな?」という疑問もあったが、実際に体験すると、人と人との関わりの中で、自然というものを通して温かさを知れたり、人と人との触れ合いの大切さを改めて学べた。

B:私はこの授業を受けて、自分の生活にも取り入れられるという部分や、医療職として患者さんに活用できる方法など、色々なことを知れてよかった。

C:私はアロマセラピーという言葉を聞いたときからとても興味があり、楽しみにしていた。実際に受けてみて、香りが人の精神的な部分に関与することを実感し、自分自身だけでなく、今後患者さんに対応していく中でも、とても良い療法だと感じた。今回受けて、もっと学びたいという気持ちが強くなった。

②事前学習について（良かった点・改善点）

A:動画を見る際には座学だったので少し眠くなってしまうこともあったが、事前学習を進める中で「こういうものがあるんだ」「こういうことができるんだ」という気づきが得られ、発見の手助けになった。

一方で、わからない言葉もあり、そういった部分に対する補足説明や、「実際にこれはどういった場面で使われているのか」など、もう少し具体的な説明があると、対面での学びにも役立つのではないかと感じた。

B:先に資料を提示もらうか、スライドの文字をもう少し大きくするなど、分かりやすくできるのではないかと思った。

C:座学の時に先に知識を得られたことで興味が湧いたので、とても良い学習だった。一方で、メモしきれなかった部分によって、逆に「ここはどうなんだろう」という疑問が生まれたので、座学は必要だと感じた。

③対面授業について（良かった点・改善点）

A:グループワークを通して様々なことを知れたり、「この人はこんな香りが好きなんだ」「この人は香りに敏感で苦手なのかな」など、人それぞれの特徴を知ることができた。そういった中で、コミュニケーションや自然を活用することで、より良い関係づくりにつながると思った。

B:実際にやってみることが一番大事だと思った。自分たちで準備する際に「どこから購入できるのか」などが分かると、より良かった。

C:みんなで取り組む中で「この匂いがいいね」などと自然にコミュニケーションが生まれ、交流にもなって良かった。ただ、実習の前にできたら、実習でより活かせたのではないかと思った。

④今後授業に取り入れてほしい講座だったか

A:ぜひ取り入れた方がいい。2 年生よりも 1 年生の方が向いている気もする。

1 年生の時は人の個性を知る。2 年生になりある程度理解が進んだ段階で、高齢者の方と接する機会が多く、そこでつまずく場面もあるので、自然の力であるアロマを利用することで、お互いリラックスして安定した会話ができるのではないか。

B:2 年生になるとグループワークも増え、コミュニケーションを取ることに対して不快感を覚える人も出てくる時期だと思う。その中で、自然にコミュニケーションが取れるのはとても良い機会だと思う。

クラスの雰囲気も落ち着いているので、ピリピリしている時期よりも、うまく効果が出そう。

C:2 年生はプレッシャーも増え、注意されることも多くなるので、そういうタイミングでアロマのような機会があるのは良い。

アロマセラピーだけでなく、ミュージックなど他の領域にも興味がある。私は特にミュージックはぜひやりたい。

こうした取り組みはあって困ることはないし、参加できるなら参加したい。

働き始めると忙しくて参加できないこともあるので、学生のうちにこういう機会があると、「そもそも存在を知る」という点でも非常に意味がある。

A:学生だからこそ色々な授業が生きるし、気分転換にもなる。今は他の勉強でいっぱいいっぱいな状態なので、たまにリラックスして切り替えることも大事だと感じている。

実証の様子













令和 7 年度 文部科学省委託事業

「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業 」実証スケジュール

■実証実施日	令和 7 年 12 月 8 日（月）9:00～12:10 / 15:00～16:30
■委託事業名	令和 7 年度 文部科学省委託事業 「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業 」
■事業名	これからの高齢社会に対応できる人材育成に必要な介護・医療分野の現場で利活用できる最新技能アップデートのための実践プログラム開発事業及びその有効性を確認する実証研究事業
調査名	「開発したアップデートプログラムの有効性を検証する実証調査」
調査目的	■調査目的 1）開発したプログラムについて、即現場で実践できるか検証する。 ■調査手法 ・受講後直後のインタビュー調査
■実証講座名	ナチュラルセラピーアロマセラピー講座
■実証会場	学校法人大庭学園　沖縄福祉保育専門学校様/株式会社 未来創造研究所様
■受講人数	アロマセラピー講座　　介護福祉学科 1・2 年生　47 名 / スタッフ 7 名
■実証担当者	小林光俊（運営企画委員会） 宮本隆史（実証委員会委員長） 光星きらら（アロマセラピー分科会兼アシスタントティーチャー） 小林英一（事業責任者） 沢田秀樹（事務局）

【当日のスケジュール】

12 月 7 日（日）	
18:00	学校法人大庭学園　沖縄福祉保育専門学校様到着（会場確認）
18:00～18:30	打ち合わせ

12 月 8 日（月）	
8:30	学校法人大庭学園　沖縄福祉保育専門学校様到着
8:30～9:00	実証準備・教職員との打ち合わせ
9:00～11:00	アロマセラピー講座　　＊途中休憩あり 5 分程度
11:00～11:30	学生へのインタビュー
11:30～12:10	片付け
12:10	実証終了
14:00	株式会社 未来創造研究所様 到着
14:00～15:00	実証準備・事前学習会
15:00～16:30	アロマセラピー講座
16:30～17:00	アシスタントティーチャーへのインタビュー
17:00～17:30	片付け・実証終了

インタビュー

①講座を受けた感想

A：アロマを使ったことはあったが、詳しく勉強したことがなかった。香りをブレンドしたり、香りに重いとか軽いというのがあるのは知らなかった。今後仕事で利用者さんに提供できそうだと思える講座だった。

B：アロマはリラックスに使ったことはあった。痛みを取ったりするなど効果があることが学べてよかった。

C：アロマは聞いたり使ったりしたことはあったが、効果がここまであるとは知らなかった。アルバイト先の利用者さんを思い浮かべながら「あの人にはこの香りを使ったら効果的だな」と授業を受けていた。習ったことを使って利用者さんのために何かできたらいいなと思う。

②事前学習について（良かった点・改善点）

A：詳しく学べて理解できた。もう少しケアの仕方などがあればわかりやすかった。

B：留学生にとっては難しい内容だった。漢字も多かったので、ルビがあるとありがたい。

C：留学生にとっては難しかった。わかりやすい言葉を使う、英語の字幕を入れるなどすると理解しやすい。

③対面授業について（良かった点・改善点）

A：精油の効能を理解できた。ベースオイルについてももう少し詳しく学びたい。

B：リラックスだけでなく痛みの緩和に効果があることが知れたのは学びになった。手だけでなく、足もやってみたい。

C：動画で学んだ精油を実際に使ったので、よく理解できた。もっと実技の時間を取って、セルフケアだけでなくお互いにケアしてフィードバックしあうような内容でやりたい。

④今後授業に取り入れてほしい講座だったか

A：定期的にやってほしい。アロマ以外にもミュージックセラピーも興味があるのでやってみたい。

B：ミュージックセラピーが気になった。アロマ＋ミュージックでよりリラックスできるのではないか。

C：授業の中でクリームやオイルでマッサージをすることがあるが、そのときにアロマを使ってやるとより効果的だと思うので、ぜひ取り入れてほしい。実習に行くときに今日の授業が活用できたらいいなと思った。

アシスタントティーチャーへのインタビュー

①講座をやった感想

初回は時間配分がわからず落ち着いてできなかったが、今回は 2 回目だったこともあり、また学校の雰囲気も良く先生方も協力的で話しかけてくれたのでリラックスして授業に臨めた。

②講座について要望があれば（追加でこういうのがあったらよいなど）

受講人数が多いとサポートが丁寧にできなかったり時間がかかってしまったりしてしまうので、サポートをしてくれる人がいるとありがたい。5 グループ、20 名以上となると講師 1 名だけでは難しいと感じた

実証の様子


令和７年度　文部科学省委託事業
専門職業人材の最新技能
アップデートのための
専修学校リカレント教育
（リ・スキリング）推進事業）






介護の未来　香りが五感を整える
介護現場に役立つ自然療法（ナチュラルセラピー）
『アロマセラピー基本のキ』実践編





令和 7 年度 文部科学省委託事業

「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業 」実証スケジュール

■実証実施日	令和 7 年 12 月 13 日（土）14 日（日）
■委託事業名	令和 7 年度 文部科学省委託事業 「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業 」
■事業名	これからの高齢社会に対応できる人材育成に必要な介護・医療分野の現場で利活用できる最新技能アップデートのための実践プログラム開発事業及びその有効性を確認する実証研究事業
調査名	「開発したアップデートプログラムの有効性を検証する実証調査」
調査目的	■調査目的 1）開発したプログラムについて、即現場で実践できるか検証する。 ■調査手法 ・受講後のインタビュー調査
■実証講座名	外出支援講座　プロフェッショナル講座
■実証会場	日本トラベルヘルパー協会 事務局
■受講人数	7 名
■実証担当者	沢田秀樹（事務局）
■企業参加者	日本トラベルヘルパー協会　アシスタント

【当日のスケジュール】

12 月 13 日（土）	
9:45～10:00	日本トラベルヘルパー協会 事務局到着・打ち合わせ
10:00～11:30	実証開始（講義・ディスカッション）
11:30～15:30	実証（外出）
15:30～16:30	実証（フィードバック・反省会）
16:30～18:00	実証（日帰り介護旅行計画）
18:00	実証終了
12 月 14 日（日）	
9:45～10:00	日本トラベルヘルパー協会 事務局到着・打ち合わせ
10:00～10:40	実証開始（日帰り介護旅行計画）
10:40～11:00	実証（計画発表）
11:00～16:00	実証（日帰り介護旅行）
16:00～18:00	実証（フィードバック・反省会）
18:00	実証終了

インタビュー

①本講座についての感想

今までなかなか携わることがなかった分野であったため、新たな学びを得ることができた。
また、対面で参加できたことでダイレクトに参加者や講師の方々の考え等に触れることができ、とても楽しく学ぶことができた。

②昨年度受講してから今回まで仕事で学んだことが行かせた場面はあったか。

室内での勤務がほとんどであるため直接的に活用できる場面は少なかったが、基礎的な考え方を振り返る機会とはなった。

③今回 3 級から準 2 級にアップデートしようと思った理由。

知識を更新、ステップアップすることで自分に自信を持つことができるのではないかと考えたため。

④今後もこのような講座を受けたいか。どんな講座なら受けたいか。

ぜひ受講させていただきたい。
資格等、形に残るとモチベーションが上がるし、目標を明確化しやすいのではないかと思う。

実証の様子













令和 7 年度 文部科学省委託事業

「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業 」実証スケジュール

■実証実施日	令和 8 年 1 月 13 日（火）
■委託事業名	令和 7 年度 文部科学省委託事業 「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業 」
■事業名	これからの高齢社会に対応できる人材育成に必要な介護・医療分野の現場で利活用できる最新技能アップデートのための実践プログラム開発事業及びその有効性を確認する実証研究事業
調査名	「開発したアップデートプログラムの有効性を検証する実証調査」
調査目的	■調査目的 1）開発したプログラムについて、即現場で実践できるか検証する。 ■調査手法 ・受講後直後のインタビュー調査
■実証講座名	多様な人とのかかわり～外国人編～講座
■実証会場	株式会社リエイ
■受講人数	28 名
■実証担当者	鳥居　賢一　（多様な人とのかかわり方分科会） 講師 吉田　あい　（多様な人とのかかわり方分科会） 講師 沢田秀樹（事務局）

【当日のスケジュール】

1 月 13 日（月）	
12:45～13:00	準備、ZOOM 接続確認、打ち合わせ
13:00～14:00	多様な人とのかかわり～外国人編～講座（吉田）
14:00～15:00	多様な人とのかかわり～外国人編～講座（鳥居）
15:00～15:20	インタビュー
15:20～15:30	振り返り・実証終了

インタビュー

①講座を受けての感想

A:実体験に基づいている内容でためになった。2 名の外国人がいて現場でのサポートについて悩む部分がある。長く働いてもらうために、施設の中でステップアップする道を提示してあげるなど具体的な話が特によかった。

B：わかりやすくためになった。受け入れ先の日本人インタビュー動画、外国籍の方のインタビューも参考になった。漠然としたものしかなかったが、今後こうしていった方がいいんだろうなというところが見えてきた。

②事前学習についての感想

A：特定技能、技能実習についての内容だった。正直介護リーダーとしての立場としては難しかった。もっと施設長や採用担当など上層部向けの内容に感じた。知識としては知っておくべき内容だが、リーダーレベルだと直接採用に関わるわけではないので、もっと現場で使える外国人への対応の仕方を知りたかった。

事前学習としては非常に良い内容だったが、合間を縫っての学習だったので、少し長いと感じた。

B:同様に上層部向けに感じた。おっしゃる通り現場サイドとしての内容が欲しいとは感じたが、私自身特定技能や技能実

習生など詳しくは知らなかったので、入口からとしては良かった。動画を事前に学んでから講座を受けるという形式は良かった。動画の長さとしてはちょうどよかった。

③当日の講座についての良かった点・改善点

B：先ほどの講座の感想でも申し上げたが、インタビュー動画が非常に良かった。
今後は他リーダーに伝えていきたい。リーダーからスタッフに伝えていくところが少し不安。

A：それぞれの講師の良さもあり、良かった。事前動画同様、少し上層部向けに感じた。
ここで働き続けたいと思ってもらえる対応や支援、コミュニティ作りの大切さを感じた。洗剤の話や英語訳など具体的な事例がたくさんあって取り入れやすいものもたくさんあってよかった。将来のイメージを伝えてあげることの大切さを学んだ。
日ごろからコミュニケーションを取っていきたい。

④今後このような講座があったら受けたいか。どういう講座なら受けたいか。

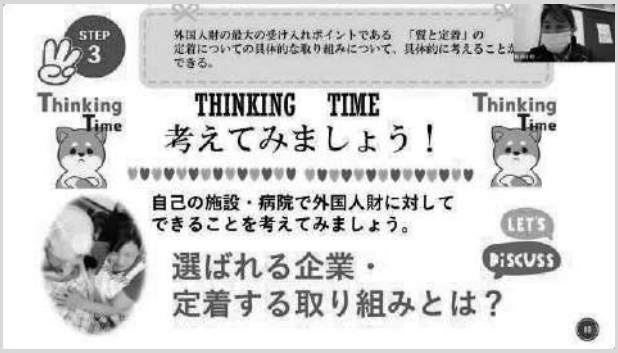
B：グループワークをやりたい。内容に対する希望は特にないが、なかなか全国のスタッフと触れ合う機会がないので、グループワークなどがある研修をやっていただき、研修を通じて交流を深めていきたい。社内外問わずやるのも良い。

A：中途社員向け研修、コミュニケーション研修、認知症向けの研修はあるが、自己流になったりするので、リーダー向けに見直す機会を作るという研修が良い。保険制度や最新の介護技術や認知症対応などを学んでいけると良い。悩んでいることに対するアドバイスを講師の先生にいただける形式というのが良い。実体験からこうしたら良いですよ、認知症の方はこういう考えですなどを共有できる場があると良い。

実証の様子


講師紹介
株式会社オリーヴ 代表取締役
鳥居 賢一
岩手県岩泉町出身
大学卒業後、AOKIホールディングス入社。
店長・新業態開発・人事部長に携わり、その後、上場企業である
人材派遣会社にて海外人財部門立ち上げのために、転職。
介護業界の「人」に関する課題を解決する方法はないかと考え、
2017年4月に株式会社オリーヴを設立。
「関わる全ての人々の夢と幸せを実現する」


講師紹介
グループホーム
ゆう&あい
・株式会社 ゆう&あい
取締役 吉田あい
高齢者グループホームの運営
人材派遣業・有料職業紹介事業・登録支援機関
歯科衛生士・看護師・介護支援専門員資格保持
歯科衛生士としてメーカーでの営業経験
看護師として市民病院で現場経験があります。
現在は㈱ゆう&あいの取締役として
外国人スタッフの派遣・紹介・支援業務を中心に活動しています。
ASUTO様に日本語教育を委託し、特定技能生の育成・送り出しをお願いしています。


STEP 3
外国人財の最大の受け入れポイントである 「質と定着」の
定着についての具体的な取り組みについて、具体的に考えることが
できる。
Thinking Time
THINKING TIME
考えてみましょう！
Thinking Time
自己の施設・病院で外国人財に対して
できることを考えてみましょう。
LET'S
DISCUSS
選ばれる企業・
定着する取り組みとは？







令和 7 年度 文部科学省委託事業

「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業 」実証スケジュール

■実証実施日	令和 8 年 1 月 29 日（木）
■委託事業名	令和 7 年度 文部科学省委託事業 「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業 」
■事業名	これからの高齢社会に対応できる人材育成に必要な介護・医療分野の現場で利活用できる最新技能アップデートのための実践プログラム開発事業及びその有効性を確認する実証研究事業
調査名	「開発したアップデートプログラムの有効性を検証する実証調査」
調査目的	■調査目的 1）開発したプログラムについて、即現場で実践できるか検証する。 ■調査手法 ・受講後のインタビュー調査
■実証講座名	介護 ICT/DX 講座
■実証会場	学校法人 こおりやま東都学園　郡山健康科学専門学校
■受講人数	介護福祉学科 2 年生　 18 名
■実証担当者	沢田秀樹（事務局）
■企業参加者	株式会社善光総合研究所　講師

【当日のスケジュール】

1 月 29 日（木）	
9:00～11:50	実証開始
13:00～13:50	実証開始
14:00～14:50	試験
15:00～16:00	試験開設
16:00～16:30	インタビュー
16:30	実証終了

インタビュー

○講座を受けた感想

・介護における ICT がどのような場面で使われているのかを知る事ができた。特にスマートフォンを職員一人ひとりが持っておりすぐに職員同士で連携を行なえることが非常に便利かつ職員の負担を減らせていることを知った。また、利用者の睡眠の状態が画面一つで分かり、見回りの回数も減り利用者を起こすということもなくなるため、ICTの使用は職員の負担軽減だけでなく、利用者の負担や不安などもなくせることがわかった。

・人材不足や高齢者の増加が深刻な問題となっていて、少ない人数で高齢者を支えていくためにはどうすればよいのかを ICT やロボットをうまく活用して職員の負担を減らしながら効率よく働ける環境作りが行われていることについて動画などを見ながらわかりやすく学ぶことができたので良かった。

〇ICT/DX のイメージ（講座を受ける前、受けた後）

・講座を受ける前は機械やロボットなどが取り入れられている程度しか認識していなかったが、実際に使われている場面を見て介護者にとって負担などを軽減し、業務の効率化も行えるものだということを、講座を受けて知ることができた。特にコミュニケーションロボットのパロは利用者の相手をしつつ介護者の負担を減らし、両者にとってメリットがあることも良く知る事ができた。

・講座を受ける前は、ICT／DX についてよく知る機会があまりなく、なかなかイメージしづらかったが、最先端の技術を利用して介護の中に取り込んでいて今までの介護のイメージが変わるような最新の介護が行われているという印象を受けた。

〇今後どんな講座・研修なら受けたいか

・機会があれば、スマート介護士の上のランクの試験も受けてみて、より上の資格も取ってみたい。

・実際に ICT やロボットを使用する体験ができるような講座や研修を受けてみたい。

実証の様子








SMART
移動支援（屋外）
高齢者等の外出をサポートし、荷物等を安全に運搬できる、ロボット技術を用いた歩行支援機器
移動支援（屋内）
高齢者等の屋内移動や立ち座りをサポートし、特にトイレへの往復やトイレ内での姿勢保持を支援する、ロボット技術を用いた歩行支援機器
移動支援（装着）
高齢者の外出等をサポートし、転倒予防や歩行等を補助する、ロボット技術を用いた装着型の移動支援機器


80%の方が効果を実感！


重点分野（移動支援）
SMART
移動支援（屋外）
高齢者等の外出をサポートし、荷物等を安全に運搬できる、ロボット技術を用いた歩行支援機器
ロボットアシストウォーカー RT.3
移動支援（装着）
高齢者の外出等をサポートし、転倒予防や歩行等を補助する、ロボット技術を用いた装着型の移動支援機器
curara®
RT.3
curara

（3）本年度の成果

本年度の成果

敬心学園

受講者数

目標 450名 → 受講者数 695名

No	講座名	専門学校	介護＋α講座	その他（プロフェッショナル・企業・団体）	合計
1	介護予防	169	45	0	214
2	外出支援	0	3	7	10
3	介護ICT/DX	18	1	0	19
4	マネジメント	0	7	62	69
5	ナチュラルセラピーアロマセラピー	268	20	7	295
6	多様な人とのかかわり～外国人編～	0	36	47	83
7	多様な人とのかかわり～障がい者編～	0	1	0	1
8	排泄ケア	0	3	0	3
9	管理者育成コース	0	1	0	1
				Total受講者総数	695

①受講者数

目標の 450 名を大きく上回る 695 名という結果となったことは本年度の大きな成果である。

本年度の成果

敬心学園

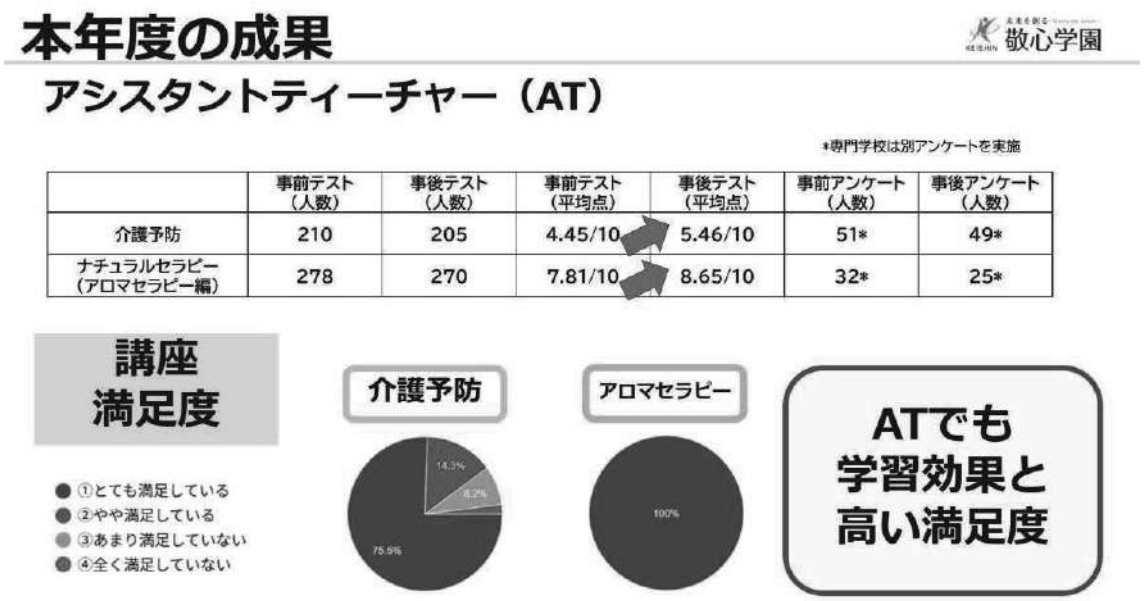
実証数

No	実証先	対象	講座名
1	学校法人 都城コア学園 都城リハビリテーション学院	専門学校（在校生）	アロマセラピー 介護予防
2	学校法人こおりやま東都学園　郡山健康科学専門学校		アロマセラピー 介護予防
3	学校法人明星学園　関東福祉専門学校		アロマセラピー 介護予防
4	学校法人穴吹学園　穴吹パティシエ福祉カレッジ専門学校		アロマセラピー 介護予防
5	学校法人国際志学園　九州医療スポーツ専門学校		アロマセラピー
6	学校法人西野学園　札幌リハビリテーション専門学校		アロマセラピー 介護予防
7	学校法人大庭学園　沖縄福祉保育専門学校		アロマセラピー
8	学校法人こおりやま東都学園　郡山健康科学専門学校		介護ICT/DX
9	学校法人　仙台北学園　仙台リハビリテーション専門学校	専門学校（卒業生）	アロマセラピー
10	佐倉市社会福祉協議会	社会福祉協議会	多様な人とのかかわり外国人編
11	株式会社未来創造研究所	企業	アロマセラピー
12	株式会社リエイ		マネジメント 多様な人とのかかわり外国人編
13	プロフェッショナル講座	令和6年度受講者	介護ICT/DX
14	プロフェッショナル講座		外出支援
15	介護＋α講座	一般	全9講座

②実証数

15 の専門学校や企業に実証協力をいただけたことも大きな成果である。文部科学省委託事業ということで専門学校での多くの実証ができたことはもちろん、社会福祉協議会や企業向けの研修として通用するプログラムの開発ができたことも今年度の成果である。

また、昨年度の受講生が今年度プロフェッショナル講座を受講したことはアップデートの事業として、ひとつの成功であるといえよう。

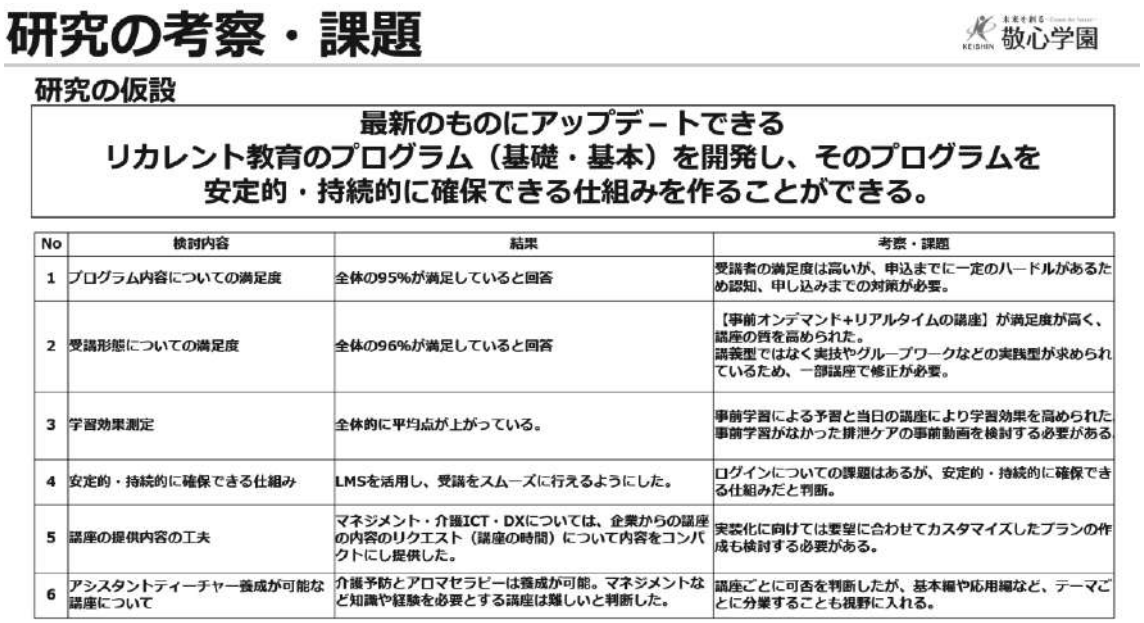


③アシスタントティーチャー

本年度は介護予防とアロマセラピーでアシスタントティーチャー養成講座を実施し、アシスタントティーチャーが実際に講座を行った。多くの実証先でアシスタントティーチャーによる講座を実施し、ミニテストでも事後の点数が上がり、アンケート結果も満足度が高いという結果だった。

このことからアシスタントティーチャーでも遜色なく講座を行えることが証明された。社会実装化において講師以外が教えることができるアシスタントティーチャーのプログラムを開発できたことは大きな成果である。

（4）研究の考察と社会実装化に向けて



研究の考察・課題

敬心学園

研究の仮設

最新のものにアップデートできる
リカレント教育のプログラム（基礎・基本）を開発し、そのプログラムを
安定的・持続的に確保できる仕組みを作ることができる。

No	検討内容	結果	考察・課題
1	プログラム内容についての満足度	全体の95%が満足していると回答	受講者の満足度は高いが、申込までに一定のハードルがあるため認知、申し込みまでの対策が必要。
2	受講形態についての満足度	全体の96%が満足していると回答	【事前オンデマンド+リアルタイムの講座】が満足度が高く、講座の質を高められた。 講義型ではなく実技やグループワークなどの実践型が求められているため、一部講座で修正が必要。
3	学習効果測定	全体的に平均点が上がっている。	事前学習による予習と当日の講座により学習効果を高められた 事前学習がなかった排泄ケアの事前動画を検討する必要がある。
4	安定的・持続的に確保できる仕組み	LMSを活用し、受講をスムーズに行えるようにした。	ログインについての課題はあるが、安定的・持続的に確保できる仕組みだと判断。
5	講座の提供内容の工夫	マネジメント・介護ICT・DXについては、企業からの講座の内容のリクエスト（講座の時間）について内容をコンパクトにし提供した。	実装化に向けては要望に合わせてカスタマイズしたプランの作成も検討する必要がある。
6	アシスタントティーチャー養成が可能な講座について	介護予防とアロマセラピーは養成が可能。マネジメントなど知識や経験を必要とする講座は難しいと判断した。	講座ごとに可否を判断したが、基本編や応用編など、テーマごとに分業することも視野に入れる。

①研究の考察と課題

これまでの研究についての考察と課題について報告する。

1、プログラム内容についての満足度

受講者の全体の 95%が満足していると回答。しかし、講座の認知や申込までにハードルがあるため、講座の申し込みをしてもらえる仕組みや対策が必要。

2、受講形態についての満足度

受講者全体の 96%が満足していると回答。特に、【事前オンデマンド＋リアルタイムの講座】の満足度が高く、また講座の質を高めることができた。

講義型ではなく実技やグループワークなどの実践型が求められているため、一部の講座で見直しが必要。

3、学習の効果測定

全講座のテストの平均点は事前テスト 6.42 点から事後テストは 7.32 点に 0.9 ポイント上がった。事前学習による予習と当日の講座により学習効果を高めることができた。事前学習のなかった排泄ケアは事後テストの平均点が下がっているため今後事前学習用の動画の作成を検討する必要がある。

4、安定的・持続的に確保できる仕組み

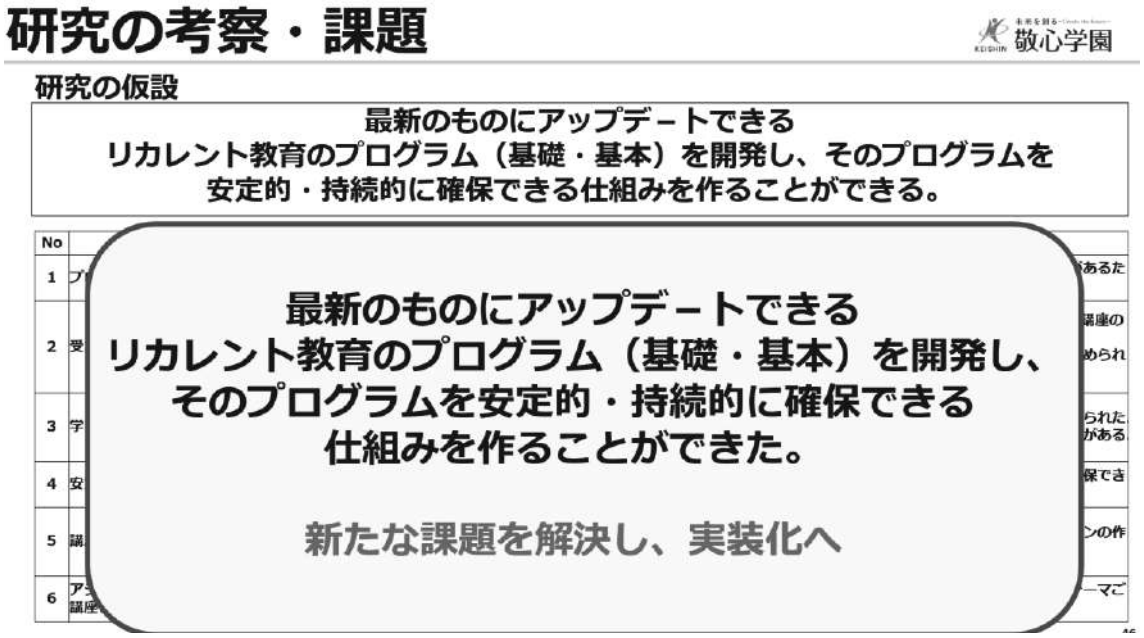
LMS を活用し、受講をスムーズに行えるようにした。初回のログイン方法に苦戦したこと、間が空くと ID とパスワードを忘れてしまうなどのログインについての課題はあるが、ログインさえできれば、事前学習動画の閲覧、テストやアンケート、事前課題のダウンロードなどがひとつのシステムで行えるため安定的・持続的に確保できる仕組みであると判断した。

5、講座の提供の工夫

マネジメント講座やICT/DX 講座など、一部の講座で提供先から内容の調整や時間の変更など講座に対するリクエストがあり、時間をコンパクトにするなど対応した。満足度が高い講座となったため、社会実装化に向けては要望に合わせてカスタマイズしたプランの提供を検討する必要がある。

6、アシスタントティーチャーの養成が可能な講座について

介護予防とアロマセラピーは養成が可能であると判断した。一方、マネジメントなど知識や経験が必要とする講座は養成が難しいと判断した。本研究では講座ごとに可否を判断したが、基本編はアシスタントティーチャー、応用編は専門の講師が担当するなど、テーマごとに分業することも視野に入れる。



②研究の仮説の実証

「最新のものにアップデートできるリカレント教育のプログラム（基礎・基本）を開発し、そのプログラムを安定的・持続的に確保できる仕組みを作ることができる」という仮説を立てて、既に報告してきたような検証を様々行ってきた。3 年間を通して本仮説は実証できたと振り返っている。実証を行っていく中で出てきた新たな課題を解決して、社会実装化へ進める。

③本年度の振り返りと社会実装化に向けて　分科会別

・介護予防講座分科会

今回の事業の一番の目的はアシスタントティーチャーでも回るプログラムの作成だったので、介護予防でできた。次年度実装化に向けては、外国籍向けに優しい日本語にするなど対象者に合わせた講座作りやアシスタントティーチャー向け勉強会の実施、アシスタントティーチャーが独り立ちできるように初回はサポートをつけるなどなどステップを踏むことが提案された。

・外出支援講座分科会

参加者の満足度は高かったが、外出支援のハードルが高く参加者数が増えないことが課題。その解決策として、防災訓練の一環として施設から車いすで連れて行くことで中高生向けにマインド形成や興味関心を持たせるところから始めたい。

・介護施設の ICT/DX 講座分科会

一般参加者を集めることに苦戦。もともと ICT/DX が苦手で福祉分野に来た人もいる。施設の研修などで強制力を持たせる、自治体を主催にして参加者を増やすなど団体受講を積極的に増やしていきたい。初回にグループで役割を与えることで 2 回目以降参加率を上げる仕組みづくりをしていきたい。

・マネジメント講座分科会

今年度一般向け講座と企業向け研修の講座を実施した。実装化に向けては①既存のベーシックなパッケージ講座②テーマ別に小分けした講座③受講者や企業の課題に応じたカスタマイズ型講座という方向性が共有された。

今後はこれまでの「動画による基礎学習→現場実践→振り返りと対話」を軸に、現場のマネジメント実践の向上につながるマネジメント研修の実装を目指していく。

・ナチュラルセラピーアロマセラピー講座分科会

高い満足度と事後テストの点数アップの結果からアシスタントティーチャーでも講座を行えることが実証された。現場で実践となるとかなり壁があり、現実的ではないアンケートの質問項目だった。実装化に向けてはコスト面の課題が残るが、オムニバスのようなかたちでアロマ講座もメニューのひとつとして提供していくのが良いだろう。

・ナチュラルセラピーミュージックセラピー講座分科会

卒後教育で音楽を使って身体を動かすということを身につけることで利用者さんに喜んでもらい、スキルアップをしてもらいたい。次年度以降はアドバンストエッセンシャルワーカーの時に、今回の講座をミニ体験ができるようにしてまず知ってもらうことから始めて、次のステップとして学んでもらう機会を作りたい。

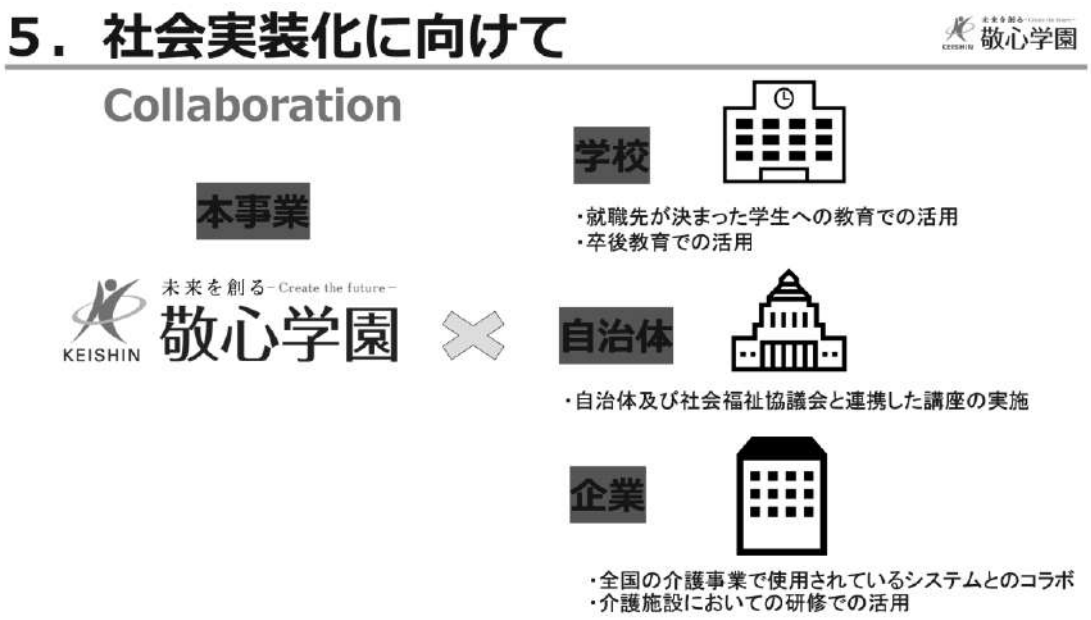
・多様な人とのかかわり外国人編分科会

一般講座、社会福祉協議会主催、企業研修で講座を行うことができた。アンケートや感想でもあったが、グループワークなどをもっと入れてお互いの取り組みなどを共有する場もあればもっといいものになった。外国籍のスタッフに参加してもらうような講座にすると集客にもつながり、外国人の交流の場になるのではないか。次年度以降はアドバンストエッセンシャルワーカーの時に、今回

の講座をミニ体験ができるようにして「外国人を初めて受け入れる」「外国人材と仕事をしていくうえでの悩み」などを案内して知ってもらう機会を作ることが良いだろう。

・多様な人とのかかわり障がい者編分科会

今年度１名受講者がいた。実装化に向けては、マネジメント層への研修が必要。マネジメント講座の一部に障がい者の講座を入れて知ってもらう。興味を持ってもらったら相談会など次のステップを踏めるようにすると良いのではないか。社会実装に向けては自治体と組むこと、そして認知の部分では他の注目されている講座とセットにして興味を持ってもらい障がい者の講座につなげるというステップを作って進めないと難しいということがわかった。



④社会実装化に向けて

社会実装化に向けてのキーワードは【コラボレーション】。

本事業と学校、自治体、企業と連携していくことで社会実装化をしていく。

1）学校

①就職先が決まった学生への教育で活用

アシスタントティーチャーを活用しながら、専門学校で学んだこと、そして自信をもって就職していく学生の後押しになるような＋αの講座として利用してもらう。

②卒後教育での活用

入職 3 年目くらいの方のアップデートの講座として卒業生向けに講座を開催。多くの専門学校で名簿の管理ができていないなどの課題はあるが、今年度実施した仙台リハビリテーション専門学校の成功事例をもとに展開。

2）自治体

①自治体及び社会福祉協議会と連携した講座の実施

今年度、佐倉市社会福祉協議会と連携して講座を実施した。他自治体とも連携に向けて提案を継続して行っていく。

3）企業

①全国の介護事業で使用されているシステムとのコラボ

15,000 事業所が導入しているシステムを利用。オンデマンド配信で興味を持ってもらい、興味を持った方向けに対面研修を展開する。

②介護施設においての研修での活用

株式会社リエイでの実施したように企業研修として本事業の講座を提供していく。

(5)成果報告会の報告



令和 8 年 1 月 30 日(金)、令和 7 年度文部科学省委託事業「専門職業人材の最新技能アップデートプログラムの開発」における「これからの高齢社会に対応できる人材育成に必要な介護・医療分野の現場で利活用できる最新技能アップデートのための実践プログラム開発事業及びその有効性を確認する実証研究」の成果報告会が、対面およびオンラインにて同時開催された。参加者は対面 22 名、オンライン 30 名、計 52 名であった。元日本テレビアナウンサー(プログラム開発委員)の町亞聖氏の進行で、成果報告会がスタートした。

来賓挨拶

文部科学省 総合教育政策局 生涯学習推進課 専修学校教育振興室 専修学校第二係 齊藤秋氏

このアップデートリカレント事業は令和 5 年度から各職業分野において、知識スキルを最新のものにアップデートできるリカレント教育のコンテンツを作成、業界団体等を通じてあの情報提供を行う体制モデルを構築する事業。今年度で最終年度を迎えるがリスキリングの重要性は高まっている。政府全体の方針としても、社会のライフライン等を支えるエッセンシャルワーカーの方々の不足、こういった課題に対してより生産性の高い人材の育成の必要性といったものを示している。

開会の挨拶

学校法人敬心学園 理事長 小林光俊



介護+αの講座は 5 年後 10 年後介護の未来を見据えて介護の幅を広げて魅力を高める狙いとした取り組み。

9 コースを開催し、北海道から沖縄まで 15 か所、695 名の受講者だったことはどの会場においても正解であった。介護の現場及び介護以外でも実装されていくことが狙い。アドバンストエッセンシャルワーカーとして自信を持って介護の魅力を高めるということにつながっていけば本望である。

本日の参加者、受講者、講座の協力をいただいた専門学校や企業のみなさま、ありがとうございました。

本年度の実証報告

学校法人敬心学園 職業教育研究開発センター 事務局 沢田秀樹

研究の概要、本年度の事業計画、昨年度の課題と本年度の解決策、実証実績について、研究の考察、課題、社会実装化に向けての報告があった。

■目的

アップデートプログラム開発のための実態調査を行う。6 つの既存のプログラムを活用し、これから介護職となる人材と介護職員向けに活用できるプログラムであるか調査する。

■対象者

介護施設の職員及び介護福祉士養成校の学生・卒業生

■実証調査

令和 7(2025)年 10 月～令和 8(2026)年 1 月

■調査方法

①次年度のプログラム開発をするために必要なデータを収集する。

②既存のプログラムについて、即現場で実践できるかについて、

アンケート・インタビューを行い、プログラムの有効性を検証する。

■調査結果まとめおよびデータ分析

実証調査においてプログラムが有用性のあるかどうかについて分析を行う。

また、実証とともに受講形態の意識調査も行いその結果をまとめる。

■実証報告

総受講生数　695 名

■研究の考察・課題

【考察・課題】

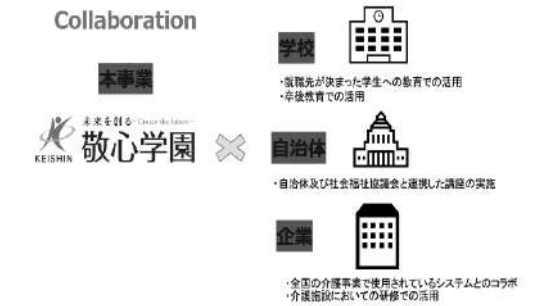
講座の満足度は高いが、申し込みまでのハードルが高い。

社会実装化に向けてのキーワードは「コラボレーション（連携）」。

①学校との連携

②自治体・社会福祉協議会との連携

③企業との連携



<u>本年度の振り返り　プログラム開発委員会委員長</u>

プログラム開発委員会委員長　竹下康平氏

　事業開始初年度から「社会実装」を目標として掲げ、取り組んできたと振り返る。今年度の受講者数について、報告では 695 名とされているが、当初の目標は 450 名であったことを説明。満足度も高かったことも成果があった。

特筆すべきは社会福祉協議会や企業で通用するプログラム開発ができたこと。アシスタントティーチャーでも成果が出せたことも汎用性の高いプログラム開発ができた。最後に、改めて関係者全員への感謝を述べ、今後の展開に期待を示して発言で締めくくった。



<u>本年度の振り返り　実証委員会委員長</u>

実証委員会委員長　宮本隆史氏

　目標としていた人数を大幅に上回ることができたことは実証委員会として大変うれしいこと。その時代に合わせた学習の在り方や効果の最大化を意識して社会実装化へ。まあ、こういった事業を通してリスキリング、リカレントということだけではなく介護という仕事、福祉、そういったものの魅力発信にして行くということも本当に必要だし、一部でも実践できたことによって、次に生かしていく機会になった。最後に、改めて関係者全員への感謝を述べ締めくくる。



座談会（現場の責任者が考える”アドバンスト・エッセンシャルワーカー）

プログラムの中盤では座談会を開催し、太原靖一郎氏の進行で「現場の責任者が考える”アドバンスト・エッセンシャルワーカー」 をテーマに、以下の方々よりそれぞれの話を伺った。



大岡美佐子氏
（社会福祉法人 美幸会 特別養護老人ホーム かさかけの里
現場統括責任者）
千石友明氏
（株式会社ニチイ学館 人財開発事業部 シニアエキスパート）
永野慎一氏
（医療社団法人敬徳会 施設サービス部長）

①現在の状況（人手不足など困っていること）

（大岡氏）

私の施設は小規模だが、現場はベテランと若手に二極化しており、その間を繋ぐ「中堅の管理職・育成担当」が不足している。そのため、新人が入っても「現場の流れで見て覚える」という形になり、十分に育ちきれない課題がある。また、介護への思いはあっても、それをどう形にすればいいのかという意識が低下しがちだ。現在は外国人材を 9 名受け入れており、今後も増える予定だが、彼らとどう連携し、互いを高め合う会話や教育に繋げていくかが大きな課題だと感じている。

（千石氏）

弊社でも人手不足の状況は変わらないが、昨年度は離職が少し落ち着き、在籍数は微増傾向にある。現在、私のミッションは新卒採用の強化だが、ストレートに「介護をやりたい人」を集めるのは難しい。そのため、「自立支援」や「人を支援する」という切り口で学生にアプローチし、選考を通じて介護の本質を伝えている。また、学生は日常的に ChatGPT などの AI を使って検索することが当たり前になっており、こうしたデジタルへの親和性が現場にどう影響するかを注視している。

（永野氏）

私の施設では、職員の半数近くが外国人という環境だ。特定技能のスタッフが非常に多く、彼らへの教育が重要になっている。課題は「言葉の壁」だ。介護現場特有の難解な言葉を、いかに日本人に教えるような感覚で噛み砕き、学習サポートをするか。一般的な言葉に立ち返りながら、現場での教育を日々模索している。

②「アドバンスト・エッセンシャルワーカー」について、現場ではどう捉えているか。

（千石氏）

専門知識やスキルを習得・活用し、生産性を向上させる存在だと捉えている。新卒学生が介護業界を敬遠する理由の一つに「他業界より報酬が低い」という見た目のイメージがある。これを打破するには、単に給与を上げる議論だけでなく、しっかりスキルを身につけ、生産性を上げる「アドバンスト」な働き方を確立することが不可欠だ。弊社では「スマイルラボ」という現場の IT 活用実験を行っているが、例えば「高性能ドライヤー」を導入するだけで、乾燥時間が短縮され利用者も職員も負担が減る。こうした身近な成功体験の積み重ねが重要だ。

（永野氏）
現場のベテラン層にこの言葉を伝えた際、最初は戸惑いがあったが、「エッセンシャルワーカーは誇りを持てる仕事だ」と伝えると理解が進んだ。ただ、ICT 導入など新しいことを始めようとすると、難しい名称が先行して心理的ハードルになる。しかし、いざスマホを使い始めると意外とハードルは低い。現場の職員が「これを使えば自分たちの課題が解消されるんだ」と実感できる具体例を提示し、納得感を持ってもらうことが大切だ。
（大岡氏）
現場の 20 代の若手からは「アドバンストと言われても、それが自分にどう関係するのか」という反応が返ってくる。彼らは成長よりも「今の仕事をこなし、プライベートを大切にしたい」という考えが強い。そのため、まずは「組織として動くことが自分たちの利益や楽しさに繋がるんだ」というサービス業としての本質を伝える必要がある。また、私たちが経験で培ってきたものを「見える化・言語化」し、データとして共有することで、若手の判断力を補い、教育に繋げていくことが「アドバンスト」への第一歩だと考えている。

③マネジメントの工夫
（大岡氏）
若い世代をプロジェクトに巻き込み、「あなたたちの意見はどうだろう？」とディスカッションを重ねている。自分たちの意見が通るという「成功体験」を積ませることで、主体性を引き出したい。介護現場は横並びの意識が強いが、組織としての階層や役割を理解してもらい、チームで動くことの重要性を伝えている。
（千石氏）
本社側が一方的に導入するのではなく、現場と日々コミュニケーションを取り、アンケートやテストを繰り返している。導入する側が「なぜこれが必要なのか」を言語化する知識を持つことが重要だ。現場が使いやすいように、いかに噛み砕いた状態でシステムを届けられるかが、管理側のミッションだ。
（永野氏）
「与えられたものを使う」だけでは愛着が湧かない。自分たちで考え、新たなものを生み出すプロセスに関わることで、その仕組みを「自分で育てたい」という主体性が生まれる。こうした「自分たちで考える力」を養うことが、アドバンスト・エッセンシャルワーカーの本質ではないか。

④まとめ
（太原氏）
今回の議論を通じて、学びの機会を増やすことの重要性を再認識した。現場の求めていること困りごとを解決する工夫しながら改善していく。その中で”アドバンストエッセンシャルワーカー”という言葉が出来上がっていくのではないだろうか。

事業の総括と今後の展望
学校法人敬心学園　職業教育研究開発センター　事業責任者　小林　英一
3 年間の事業の総括と新たなるチャレンジへの思いが語られた。
　文部科学省委託事業者の専門学校同士連携したり、企業と連携したりすることでここまで多くの実証を行うことができる。皆様のおかげで 3 年間を終えられた。これだけの数をやれば課題がでてくる。その中に、30 代前半の層が自発的な研修参加を避ける傾向がある。

理由としては、自分がスキルアップしても、学ばない上の世代を楽にさせるだけ・負担は増えるが報酬に反映されないという不公平感。
「50 代・60 代の上司が共に学ぶのであれば参加したい」という声があり、組織全体の学ぶ姿勢が問われている。



今後の社会実装に向けた 5 つのアプローチが必要と考える。
1.専門学校での卒後教育： 卒業生名簿の活用や周知方法の改善。
2.専門学校での教育：アシスタントティーチャーの活用。
3.自治体・社会福祉協議会との連携： 都道府県へのプログラム導入提案を継続。
4.企業助成金の活用： 企業の教育投資を促す仕組み作り。
5.システム会社との連携： 既存の介護システム（15,000 事業者導入）を通じたオンデマンド配信と対面研修のハイブリッド展開。

文部科学省の次年度方針として、「アドバンスド・エッセンシャルワーカー養成」を主軸としたプログラムの公募（16 事業規模）が予定されている。本事業の 3 年間の成果を土台とし、さらに発展させた形でチャレンジを継続していきたい。

Ⅲ. 事業評価

外部評価委員会評価まとめ

(1)本委員会の役割

【目的】

外部評価委員会は直接点検・評価を行うことはせず、各プロジェクトが行う自己点検・評価の結果を総合評価実施することで、評価の有効性、適切性について第三者の立場から客観的のある評価を行う。

【役割】

- 計画段階において、目標が明確か、目標を達成したことを測定する評価指標は適切か、事業がスムーズに進み大きな成果が得られるように助言する。
- プログラムの評価効果測定を担当するとともに、事業全体への評価・検証を行う。

【検討の具体的な内容】

① 事業の企画・運営に関する助言
② 事業の運営と成果に関する評価・検証
③ 開発した教育プログラムそれに伴う教材の検証

(2)評価方法について

各委員会の遂行した事業において、評価項目に基づいて評価を行う。当該年度においては、以下の 5 つの項目について評価を行った。

① 事業計画に基づき、各委員会それぞれの活動計画を立案できたか。
② 各委員会で立案したそれぞれの計画に基づき、予定通り遂行できていたか。
③ 事業計画書・各活動計画と実施された内容は合理的に適合していたか。
④ 各委員会が、それぞれの活動実績について適切に振り返りを行っていたか。
⑤ 各委員会で行った振り返りに基づく今後の実装化の計画は妥当性があるか。

(3)運営企画委員会に対する評価

外部評価委員会として、運営企画委員会において以下の評価を行った。運営企画委員会の設置目的は、本プロジェクトに参加する当事者を含む多様な関係者による事業の目的、目標、運営方法の検討・共有を行い、各委員会の調整も行うことにある。本委員会では、①～⑤について評価を行った。

①事業計画に基づき、各委員会それぞれの活動計画を立案できたか。
⇒昨年度の課題を踏まえた活動計画を作成し、令和 7 年度の活動計画を策定した。あわせてキックオフミーティングを開催し、活動計画の内容について関係者間で共有を図っている。
②各委員会で立案したそれぞれの計画に基づき、予定通り遂行できていたか。
⇒委員会の開催数は目標回数に達しなかったものの、事業全体の企画・運営を行い、各プログラムを完成させ、さらに開発したアップデートプログラムの実証実験を実施した。

③事業計画書・各活動計画と実施された内容は合理的に適合していたか。
⇒計画どおりに実施されており、必要に応じた調整を行いながら、事業計画の到達点に向けて事業全体の運営が行われている。
④各委員会が、それぞれの活動実績について適切に振り返りを行っていたか。
⇒各活動の終了後に振り返りを実施するとともに、成果報告会を通じて、活動全体についての振り返りを行っている。
⑤各委員会で行った振り返りに基づく今後の実装化の計画は妥当性があるか。
⇒最終年度としての役割を十分に果たしつつ、次年度以降の実装化に向けた準備を進めている。

(4)プログラム開発委員会に対する評価

外部評価委員会として、プログラム開発委員会の活動について以下の評価を行った。プログラム開発委員会は、プログラム全体および教材の企画・開発を行うとともに、講座開発に伴うプログラムについて最終的な検討を行うことを目的として設置されている。本委員会では、以下の項目①～⑤について、評価を行った。
①事業計画に基づき、各委員会それぞれの活動計画を立案できたか。
⇒委員会の開催数は目標回数に達していなかったが、第 1 回委員会において、具体的な活動計画およびその実施について検討が行われている。
②各委員会で立案したそれぞれの計画に基づき、予定通り遂行できていたか。
⇒委員会の開催数は目標回数に達していなかったものの、アップデートプログラムの開発を行い、その有効性を検証する実証実験を実施した。
③事業計画書・各活動計画と実施された内容は合理的に適合していたか。
⇒昨年度の課題点を改善したうえで、計画どおりに事業を実施し、各プログラムを完成させるとともに、開発したアップデートプログラムの実証実験を実施している。
④各委員会が、それぞれの活動実績について適切に振り返りを行っていたか。
⇒各活動の終了後に振り返りを実施するとともに、第 3 回委員会において、進捗状況の確認ならびに活動の振り返りを行っている。
⑤各委員会で行った振り返りに基づく今後の実装化の計画は妥当性があるか。
⇒最終年度としての活動を十分に果たしつつ、次年度以降の実装化に向けて、企業・団体に向けた情報発信を行い、社会実装を進めていく方向性である。

(5)実証委員会に対する評価

外部評価委員会として、実証委員会において以下の評価を行った。実証委員会の目的は、開発した教育プログラムと、それに伴う教材を使って実証し、検証することにある。委員会では、実証の内容と進め方、検証方法、協力体制の確認など、以下の項目①～⑤について、評価を行った。
①事業計画に基づき、各委員会それぞれの活動計画を立案できたか。

⇒昨年度の課題を反映した活動計画を作成し、第 1 回委員会において、具体的な活動計画および実施方法について検討がなされた。

②各委員会で立案したそれぞれの計画に基づき、予定通り遂行できていたか。

⇒委員会の開催数は目標回数に達していなかったものの、一部を除き、当初の予定どおり 10 月から 12 月にかけて、総受講者数 695 名に及ぶ実証実験を実施している。

③事業計画書・各活動計画と実施された内容は合理的に適合していたか。

⇒昨年度の課題点を改善したうえで、計画どおりに事業を実施し、計画に沿った実証実験を行っている。

④各委員会が、それぞれの活動実績について適切に振り返りを行っていたか。

⇒各活動の終了後に振り返りを実施するとともに、成果報告会を開催している。

⑤各委員会で行った振り返りに基づく今後の実装化の計画は妥当性があるか。

⇒次年度以降の実装化に向けて、今年度の実証を通じて得られた課題の改善に取り組んでいく方針である。

(6)全体を通じての評価

本外部評価委員会としては、本事業が委員会および分科会を中心とした運営体制のもと、概ね計画どおりに実施されており、運営面は適切であったと総合的に評価する。各委員会において、進捗状況や課題の振り返りが丁寧に行われ、議事録等を通じて関係者間で情報共有が図られていた点は、事業全体の質を高めるうえで有効であった。

また、昨年度の課題を踏まえた改善が随所に見られ、各プログラムの完成および実証実験の実施に至った点は、最終年度として一定の成果を上げたものと評価できる。参加者数の確保については一部に課題が残ったものの、行政や企業による集団研修を活用するなど、実務的な工夫により一定程度の目標達成が図られたことは評価に値する。

講座内容に関しては、受講者アンケートにおいて満足度が総じて高く、学習体験として一定の評価を得ている。一方で、実践への結びつきについては評価が分かれており、知識理解と現場での行動変容との間に一定の距離があることも明らかとなった。こうした結果を踏まえ、単なる成果報告にとどまらず、課題を明確に言語化し共有している点は、他事業と比較しても精度の高い取り組みであったといえる。

さらに、3 年間にわたる事業実施を通じて、リカレント教育プログラム(基礎・基本)の開発ならびに LMS を活用した安定的・継続的な実施体制の一例が構築された点は、本事業の有意義な成果として評価できる。

(7)今後の事業への期待

上記の評価を踏まえ、最終年度を迎えた本事業においては、今後、個別プログラムの達成度にとどまることなく、社会実装や持続的展開を強く意識した戦略的整理が求められる。特に、企業や関係団体に向けた情報発信を一層強化し、本事業で得られた成果や知見が、現場でどのような

価値を生み出すのかを具体的に示していくことが重要である。

デジタル人材育成や ICT・DX 関連の取り組みについては、重要な社会課題が掲げられている一方で、参加者数や実装面において目標との乖離が見られた。今後は、個別講座としての集客努力にとどまらず、既存の研修事業や他の関連施策との連携を前提とした目標設定、ならびに運営体制の再検討が必要である。加えて、厚生労働省や関係団体による類似事業との役割分担を意識しつつ、KPI や情報発信の整理を行うことで、事業全体の実効性向上が期待される。

人材の定着や質の向上を図る観点からは、卒業後も継続的に学び直しができるリカレント教育の位置づけをより明確にし、段階的・体系的なプログラム展開を進めていくことが望まれる。その際、現場の介護職員にとって「参加することで何が改善されるのか」という実感を伴うメリットを示すことが不可欠である。LIFE（科学的介護情報システム）等の共通基盤との連動や、データに基づく効果の可視化は、その実現に向けた重要な鍵となる。

さらに、講座受講者同士の横のつながりを意識的に構築し、情報交換や相互支援が可能なコミュニティ形成を促進することは、継続的な学びと実践への動機づけにつながると考えられる。介護フェス等の取り組みについても、一過性のイベントにとどめることなく、継続的な議論や共創の場として発展させていくことが期待される。

総じて、本事業は一定の成果を上げている。今後は、社会実装を見据えた整理と情報発信、費用対効果の可視化、現場にとっての実質的な価値提示を通じて、持続可能な展開へとつなげていくことを強く期待したい。加えて、本事業が介護分野における人材育成とサービスの質向上に資する取り組みとして、広く波及し得る形で発展していくことを期待する。

外部評価委員会　一同

Ⅳ事業の振り返り

(1)プログラム開発委員会 本年度事業の振り返り

プログラム委員会を代表しまして、本事業に多大なるご協力をいただきました、関係者の皆様に心から感謝申し上げます。
また、プログラム開発委員長を 3 年間務めさせていただきましたことを非常に光栄に思っております。また、多くの実証先で開発したプログラムを試せたことも実証先の皆様、ご支援いただきました皆様に大変感謝しております。

事業開始初年度から「社会実装」を目標として掲げ、取り組んできました。今年度の受講者数の目標は 450 名でありましたが、695 名という結果については予想以上の成果だと思います。そして実証先も 15 の専門学校や事業所にご協力いただけたこと、そして満足度も高かったことからすると成果があったのではないかと振り返っております。

文部科学省委託事業ということで、専門学校での実証は当然のことですが、特筆すべきは社会福祉協議会や企業で通用するプログラム開発ができたことは大きな成果であったと感じております。社会実装化がキーワードになっているので、講師以外が教えることが難しいため横展開が難しいことが大きな課題となるわけですが、今回アシスタントティーチャーでもアロマセラピーと介護予防で成果が出せたことも汎用性の高いプログラム開発ができたのではないかと思います。

プログラム開発に携わらせていただき集大成が大きなものになったという喜びとさみしい気持ちと複雑な気持ちではございますが、今回携わっていただきました委員のみなさま、成果が出たということは自信を持っていただき、改めましてプログラム開発委員長を 3 年やらせていただき皆様に感謝を申し上げます。

プログラム開発委員長
株式会社ビーブリッド
代表取締役
竹下康平

(2)実証委員会 本年度事業の振り返り

実証委員会を代表いたしまして、本事業にご尽力いただいた関係者の皆様、ならびに実証にご協力いただきました各施設・学校の皆様に、多大なるご支援を賜りましたことを心より厚く御礼申し上げます。3 年間にわたる現地実証において、関係各位が真摯に取り組んでくださったおかげで、幾度もの試行錯誤を重ねることができ、それが本日の成果へと結実したと考えております。

本事業において、目標としていた受講者数を大幅に上回ることができた点は、委員会としても大きな成果であると認識しております。「アドバンストエッセンシャルワーカー」としてのスキル向上は極めて重要な視点です。昨今の AI をはじめとする技術革新が進む中で、従来の記憶に依存した一辺倒な学習方法には限界があると感じておりました。今回、多様な手法を凝らした実証講座を展開した結果、専門学校側からは「学生の取り組む姿勢に劇的な変化が見られた」との評価もいただいております。今後の社会実装に向けては、時代に即した学習の在り方を追求し、教育効果を最大化させる意識が不可欠であると再認識いたしました。

学校教育における基礎知識は非常に重要ですが、教育現場と実務現場の間には少なからず乖離が生じるのが実情です。そのため、事業者側が現場の状況に合わせて内容をアレンジし、工夫を凝らすことが求められます。多様な場面で多様な学びが得られるよう教育に変化をつけていくことが、これからの社会に必要な「実践教育」の姿であると考えます。

介護業界では 2040 年、2050 年に向けて深刻な人材不足が予測されています。社会保障と経済は両輪の関係にあり、社会保障の枠組みにおいて、この仕事を「生業」とする方々がやりがいを持って働ける環境を整えることは極めて重要です。本事業は、単なるリスキリングやリカレント教育に留まりません。事業を通じて介護・福祉の本質的な魅力を発信していくことも必要であり、今回の実践で得られた知見を次なる展開へ繋げる貴重な機会となりました。

このような機会をいただいたことに改めて感謝申し上げます。この 3 年間で培われたアライアンス(連携)とナレッジ(知見)という強固な関係性を活かし、今後も皆様と共にさらなる事業の発展に邁進してまいる所存です。

実証委員会委員長
社会福祉法人善光会
アドバイザリーボード
宮本 隆史

(3)新たなるチャレンジへの思い

はじめに、この研究にご尽力いただきました関係者様、実証校の皆様に心より感謝申し上げます。皆様のおかげで 3 年間を終えられました。

文部科学省委託事業者の専門学校同士が連携したり、また、企業と連携したりすることでここまで多くの実証を行うことができました。これだけの実証数を実施すれば課題もでてきます。分析していくと、30 代前半の層は自発的な研修参加を避ける傾向にあることがわかりました。

インタビュー調査を行うと、研修を受けることで 100 の仕事が終わって早く帰れるなら良いが、早く終わった分仕事を増やされて結果 120 の仕事を要求される。スキルアップしても、学ばない上の世代を楽にさせるだけで、給料は変わらないことに対して不満を感じているようです。「5、60 代の方々も一緒に研修を受けるのであれば自分たちも受けます。」ということも言っておりました。

その下の Z 世代の 20 代に聞くとまた別の回答で「そんなことはどうでもいいから失敗はしたくない」という考え方の傾向があります。失敗したことを拡散されることが怖いと感じています。いろんな世代で実証を行ってきた結果、いろいろとわかったことがありました。

私たちは、社会実装化に向けては 5 つの方法を考えております。

1 つは専門学校での卒後教育。今回仙台リハビリテーション専門学校で実証を行わせていただきました。作業療法士になられた卒業生向けに卒後教育として講座を行いました。とてもいい雰囲気で交流にもなったと好評でした。しかし、専門学校の課題は卒業生のリストがないところが全国的にも多く、実施するにも案内できないということもわかってきました。

2 つ目は専門学校の在校生向けに、アシスタントティーチャーで行う講座。今回アロマセラピーと介護予防でうまくいったという実績もありますので、今後広げていきたいと思います。

3 つ目は自治体や社会福祉協議会との連携です。今年度は佐倉市の社会福祉協議会で講座を行いましたが、他にもすでに話を進めている自治体があるので、連携を強化して自治体主催の講座を開催したいと考えております。

4 つ目は企業との連携です。我々の講座を企業の研修として使っていただき、補助金や助成金の制度をうまく組み合わせることで、実装化できると思います。

5 つ目も企業との連携ですが、現在使用しているシステムの会社は 15, 000 事業所に入れているシステムで、その会社に協力いただくことは取り付けてあります。そのシステムでオンデマンド教材を提供し、興味を持った事業所向けに対面研修を行うという流れで考えております。

次年度は、文部科学省からアドバンストエッセンシャルワーカーのプロジェクトが新たにでると伺っております。ICT/DX やマネジメントの色が強くなると思いますが、今回作った講座もオムニバス形式でも使っていきたいと考えております。

日本の介護業界を盛り上げていくために、また関係各所のみなさまのご協力を賜れればと思っております。まずは、3 年間の区切りとなります。ご支援いただきました皆様には大変感謝いたしております。本当にありがとうございました。

学校法人敬心学園　職業教育研究開発センター
事業責任者
小林　英一